
Mystic Lady ~ 邂逅編 ~

DIVER_RYU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M y s t i c L a d y 〱 邂逅編 〱

【Nコード】

N 2 6 3 0 U

【作者名】

D I V E R | R Y U

【あらすじ】

表面積の約九割が海に覆われた世界。謎の美女“ロツサ”を護り、海の漢“琉”が今日も行く！ 物語の舞台を南国オルガネシアから砂の国アルカリアに移し、二人を待ち受けるのは新たな出会いか、襲い来るハルムか、垂涎の砂漠グルメか、はたまたあの邪教集団か！？ 男のロマンを描くSFファンタジー第二段！！ 相変わらず誤字脱字が多いです。変なところを見つけたらご報告ください。

『琉が飲むソディアの水は熱い』 序（前書き）

オルガネシアを旅立った琉とロッサ。今、アルカリアでの冒険が始まる。

前作『Mystic Lady 第一部 〈復活編〉』の続きとなっております。未読の方はこちらへどうぞ↓ <http://nocode.syosetu.com/n7922s/>

『琉が飲むソディアの水は熱い』 序

カレッタ号船内。明かりのついた部屋で一人、パソコンを打つ姿があった。

『航海日誌：○月×日 アルカリアを目指し、オルガネシアを出て4日が経った。明日の朝にはアルカリアの玄関口、ソディア島に着くだろう……』

アルカリア。日誌に出てきたソディア島に加え、リチウム島、ポタス島、カルス島の4つからなる国である。ソディア島以外は小さく、あまり人は住んでいない。

海底遺跡エリアは、ソディア島の沖に存在する。比較的島から近いので、基地から直接通って調査するということが可能である。難点と言えば、この古代文字はまだ解読が成功していないというところだけだろうか。

『まずはソディアのラング基地に話を通しておこう。それからまずは街の探索。ロッサにまた色々と見せてやる必要があるだろう。それにしても久しぶりのソディアだ。またサソリで一杯飲みたい所である……』

キーボードを打ちながら感慨にふける琉。

「まあ、まずは着いてからだな！ 今日のもう寝よう」

（翌朝）

「ロッサー！ 着いたぞー！！」

操舵室から響くアナウンス。部屋の中、ロツサは目を擦りつつ布団の中からもぞもぞと出て来た。

「起きたか。今日は外で飯にするぞ、行こうか!」

目をこすり、操舵室に向かったロツサに琉は言った。窓からはこれまでよりも強烈な日差しが降り注いでいる。彼女は窓の外を見ると、そこには今までとは違う砂と岩で構成された世界が広がっていた。

「ここがソディア……。何て言うか、島全体が黄色い……」

「アルカリアが熱砂の国と呼ばれる理由はこれさ。ソディアに限らずどの島に行ってもこんな感じだぜ」

辺り一面砂景色。強烈な日差しが道行く者に突き刺さる。この環境を好む種族であるディアマンを除けば、他の種族はオアシスと海辺付近以外にはほとんど見られない。これまでの島とは違う環境を目の当たりにし、ロツサは夢中になって眺めている。

「港の付近にちよつとした街がある。調査は明日だ。今日は一日、街の散策とでも洒落てみないかい？」

カレッタから降りた二人。早速ロツサが街に歩こうとした時だった。

「待った。そっちじゃない、こっちだ」

琉の指差す方向には大きな建物があった。

「ソディアのラング基地さ。先に手続きを済ませて来る」

琉に連れられ、ロツサはラング基地まで歩いた。基地の入り口には大きな看板が立てかけてある。

「やれやれ、『女性装者募集！』か。見るたびに大きくなってるな、この宣伝」

「ねえ、琉。どうしてこれが大きくなるの？」

ラング装者は現在の所ほとんど男性しかない。強大な力を必要とするせい、女性が志すことがまずないのだ。男女格差をなくすべく、この業界は女性用アーマー（因みに普通のアーマーは30kg）を開発したり、トライデントの軽量化（普通のトライデントの重さは2kg）に努めたりして積極的に女性装者を増やそうとしているのだが、現状は大して変っていない。

おまけにソディア基地の装者はほとんどが赤銅色の肌をしたマツチヨな猛者ばかりなため、まず寄りついてもらえないという現状があるのだ。因みに女性用アーマーを使用しているのは琉の知る限りは一人だけ。しかしそれも、種族の特性上筋肉量の少ないジャックが身につけているモノだけである。

カウンターに向かい、手続きを済ませた琉はロツサを連れて出た。そろそろ二人にとっての朝食の時間であるが、この基地には訓練施設や食堂と言ったモノがない。待ちきれないとばかりにロツサは琉の手を引き、街の方に引っ張ろうとした。

「慌てるなって。そうだ、せっかくだからアレ使おうぜ」

笑いながら琉が言う。彼はパルトネールを取り出すと、カレッタ

号の方を向いて言った。

「アードラー！」

海面に影が浮かびあがり、琉のサポートメカであるアードラーが姿を現す。

「チェインジ！ マシン・アードラー！！」

たちまちアードラーはバイク形態であるマシンアードラーに変形した。琉がハンドルを握ると、ロツサがその後ろに乗ってがっちりと組みついた。当然のことだが琉の背中には柔らかいモノが押しつけられる。

（やべえ、心拍数が急上昇してやがる……。落ち着け俺、この間に一緒に飛んだ時はどうもしなかっただろう！）

「琉、どうかしたの？」

琉の耳元に、不意にロツサの声がした。

「ひゃあつ、何でもない！ い……行こうか！！」

琉がハンドルを握り、アクセルを鳴らす。踏み固められた砂の道を、青の機体が駆け抜ける。一部の島をのぞいて道路が作りにくいこの世界に、オンロード車は存在しない。

「ちょっとこの奥に旨い飯屋がある。朝早くからやってるし、そこにしようか」

早朝、まだ人通りの少ない街中でアードラーを飛ばす琉。ロツサはその背中で、アルカリア独特の熱気をはらんだ風を肌を感じていた。

「琉、ここって美味しいモノ、ある？」

ロツサが聞く。琉はハンドルを握ったまま答えた。

「旨いモノね。ここには他で食えないモノが色々あるぜ。例えばサボテンのステーキとか、オオトカゲの丸焼きとか。ここは環境が厳しくてね、元々生き物が少ないんだ。その数少ない食材をフルに活用するためにね、料理そのものは色々と発達してるんだぜ。個人的お勧めはサソリの唐揚げかな……。あれ、ビールの当てに最高なんだよね」

琉はあちこちの島に行くせいか、中々の食通でもある。旨いモノには目がない一方、嫌いな食べ物ほとんどない。彼にとって、食べられないモノはイコール食中毒を起こすモノか調理に失敗したモノである。

「サボテン？ オオトカゲ？ ……サソリ？」

ロツサにとっては新出単語のオンパレードである。それもそのはず、これらの生物は皆この世界ではオルガネシアでは見られず、アルカリアにしかないモノばかりだからである。目覚めて一カ月では世界を把握しきれない。琉はぽかんととなっているロツサに言った。

「まあ、食ってみれば分かるさ。どれも旨いモノだぜ。……お、そろそろ着くな」

『琉が飲むソディアの水は熱い』 序（後書き）

ついに始まりました第二部！ 感想、評価、レビュー、ツッコミ等、お待ちしております。

『琉が飲むソディアの水は熱い』 破（前書き）

アルカリアの領地、ソディア島に着いた琉とロツサ。二人は早速地元の飯屋に向かったのだが……。

『琉が飲むソディアの水は熱い』 破

二人が着いたのは小さな露店であつた。この島は日中が暑いため、建物の外に店を構える所が多い。ちよつとした屋根の下にある店内には、実に様々な食材が置いてあり、実に旨そうな匂いが立ちこめている。琉は店の外にアードラーを駐車し、席に着いたのであつた。店で中年と思われる男が一人で切り盛りしていた。

「いらつしゃい、注文が決まったら呼んでくれ……！？」

「どうかしましたか？ ひょつとして、何か付いてる？」

店主の男は琉とロツサを見るなり驚愕の表情を浮かべ、すぐさま建物の中に駆け込んで行つた。

「一応、頼むモノは決めとくか。あと、チャリンも用意しないとな」

この世界の飲食店は先払いが基本である。因みに通貨はどこにいてもチャリンで通じるようになってる。

「琉、あの吊るされてるモノは何？」

「あれ？ オオトカゲだ。流石に朝からこいつは重たいな……」

ロツサの指差した先には大きなトカゲの尻尾を結んで吊るしてある。他にも、サソリの入ったバケツや適当な大きさに切られたサボテンが置いてあつた。

「何か、お勧めはある？」

「うーん、そうだね。朝だし比較的あっさりしたモノが食べたいかな……。この砂豆のスープなんてどうだい？ 味は塩味が良さそうだ」

砂豆とはこの島で育つ独特の豆の事である。少ない栄養分でも育ち、かつ栄養分が豊富なのでアルカリアでは主食として食べられている。元々は野生のモノだが、品種改良して大粒かつ大量に実るモノが栽培されているという特徴を持つ。因みにこのスープ、塩味の他にオオトカゲの肉の入ったモノや魚のつみれダンゴを入れたモノ、香辛料を多く入れたモノまで色々ある。

「すいませーん!!」

琉は店主を呼んだ。建物の奥から先程の男が慌てて走ってくる。

「ええと、砂豆のスープを二つ。一つは大盛り、味は塩味で!」

「は、はい、かしこまりました。250チャリンです……」

この店主、今度はロツサをじっと見ている。それも睨みつけるかのような鋭い目つきで。ロツサは首を傾げた。

「どうしたんです？ ……やっぱ、気になりますか？」

そこに琉が自分の両手を胸に当て、おどけた口調で悪戯っぽく聞いた。

「あ、いや、何でもありません!! いや、何か見覚えのある顔だな、と思っただけで……」

「わたし、この人知らない」

妙に慌てる店員。彼の顔を指差し、冷静かつバツサリと否定するロツサ。その様子を笑って見ている琉。

「そ、そうですね。ははは……」

店主は逃げるように店の奥へと走っていった。

「何だ人違いだったのか。まあ良くあることさ」

琉はロツサに言った。そう考えれば腑に落ちないこともない。一方のロツサは店内に置いてある大きな赤い果物を手に取っていた

「琉、このゴツゴツしたのは何？」

「そいつはドラゴンフルーツ、サボテンの実だ。そうだな、そいつデザートに頼んでみるかい？ 旨いんだぜ、これ！ ……すいませくん、追加注文したいのですが！？」

一方建物の奥では。

「良いかアヤ、よく見る。あいつらだ。例の二人がよりもよつてうちの店に来たぞ！」

「お父さん、どうする？ やつつけるの？」

先程の店主が、自分の娘に言い聞かせている。店員の手に持っているモノ、そこには琉とロツサの顔写真が映ったポスターであった。

『WANTED! 賞金：男は100000C、女は300000C。独立宗教法人メンシエ教』

そう、琉達が寄ったこの店はメンシエ教徒の持ち主だったのである。

「アヤ、あの棚から例のアレを持って来い」

娘は棚から何やら白い粉を持って来た。店主はその粉をコップに入れた水に入れる。粉は瞬く間に水に溶け、跡形もなくなった。

「お父さん、念のためにこれも持ってって」

娘は大きなナイフを店主に手渡した。店主はナイフを懷にしまい、コップの乗った盆を持った。同時に店から琉の声がかかる。

「ふっふっふ、丁度良い時に追加注文か。意外と馬鹿な奴らだ……。はいはい!!」

店主は琉の元に向かった。テーブルに水を置き、琉とロッサの顔を見ると、彼は追加注文の内容を伺った。

「あーすいません、ドラゴンフルーツを一つ。お願いできますかね？」

「はいかしこまりました。120チャリンです」

店主は琉からチャリンを受け取ると、そのまま店の奥まで逃げるように入って身を隠した。

「どうしてあの人、慌てて奥まで行くの？」

「本当に謎だよな。何でこう慌てて店の奥に行くんだ？ まだ朝早いし、客なんざまだ俺達含めてまだ3組しか来てねえぞ？ まあでも、これからどんどん忙しくなるんだろうな。……そんなことより水来たぜ水！ ここにいと本当に喉が渴くんだよな！！」

そう言いながら琉は水を口にしようとした。が、

「ん！？ ロツサ、飲むの待った。ちょっとそのコップ貸してくれ」

琉に言われ、ロツサもコップを琉に渡した。琉は水の匂いを嗅ぎ、言った。

「ロツサのもだ。おかしいぜ。何で水からトラ電池の匂いがするんだ？」

トラ電池とは、「トライデント用電池」の略である。第一部の第六章で、琉がオキシ島のラング基地で買ったアレである。この電池は、中に特殊な液体燃料が密封してあるのだ。しかしこれは非常に危険な物質で、一般家庭にあるモノではない。

「まずい、感づかれたか？ くそ、相当鼻が良いみたいだな……」

琉はコップを持って立ち上がると、真剣な顔でロツサにこう言った。

「一応調べを入れる。ちょっと離れてくれ」

ロツサがそこから数歩下がるのを確認すると、琉は持ったコップを傾けて中の水を地面に少し落とした。するとなんということだろう。水が地面に着いた瞬間に瞬く間に炎が上がったのである！

「水が……燃えた！？」

信じられぬ光景に絶句するロツサ。当然周りの客も騒ぎ始めた。琉は炎を踏みつけて消すと、店の奥に向かってこう言った。

「アキサミヨー（なんてこつたい）！？ ……おい、これは何てタイムサービスだい？ 喉の消毒サービスか……うわッ！？」

店の奥から店主がナイフ片手に飛びかかってきた！ 刃をかわし、店主の腕を素早くつかむ琉。そのナイフを見て、琉は驚愕した。

「これはメンシェマーク！？ おい、いくら俺が憎くてもこんなことしたら店の評判が落ちて、アンタの家計まで火の車になっちまうぜ！！ ……ロツサ、他の客連れて外に逃げる！！」

琉に言われ、ロツサは他の客と一緒に外に出た。

「ひいッ、あんなモノ飲まれた日にゃ、一瞬で灰にされちまうぞ！」

「朝からなんてことが起きるんだ全く！！」

客は口々に言いつつ外に逃げた。

「貴様、よく気付いたな！ しかしメンシェの裁きから逃れられると思うなよ！」

「説教なんざどうでも良い、表に出ろ！！」

琉と店主が組みついたまま、店の外まで飛び出て来た。静かだった通りはたちまち騒がしくなる。店主は琉を振り払うと、そのままナイフで斬りかかった。

（ちっ、速いな。パルトを抜く隙がない。よし……）

相手のナイフをしゃがんでかわし、そのまま足払いを掛ける。ナイフを持ったまま、相手は転倒した。つかさず琉はナイフを握った手を掴み、指を立てて強く握りしめた。

「ぎゃああああ！？」

穴が開くほどの激痛が店主の腕に走る。悲鳴とともにナイフは落ちた。

「お父さん！？」

悲鳴を聞きつけ、店から店主の娘が飛び出て来る。

「俺の握力は80kgある。リングを握ればつぶれるどころか穴が開くぜ！」

台詞と共に琉は腕を放した。ナイフに手を伸ばす店主。しかし琉がナイフを蹴飛ばし、額にパルトネールの先端を押し当てて言った。

「しばらく眠ってな。パラライザー！」

『琉が飲むソディアの水は熱い』 破（後書き）

第二部連載中！ 今回もまたノツケから飛ばしますよ！w 更に第二部以降は一章を序・破・急の三部構成にしようと思います。四部構成だと後の管理が大変だったので……。

『琉が飲むソディアの水は熱い』 急（前書き）

食事をとりに行った琉とロツサは、その店の店主に命を狙われた。
メンシエ教徒は忘れた頃にやって来る……！

『琉が飲むソディアの水は熱い』 急

引き金を引く琉。パルトネールの先端から至近距離で、オレンジ色の閃光が店主の額に突き刺さった。娘の見えるすぐ目の前で、店主は動かなくなった。

「ふっ、やれやれ。世話が焼けるぜ」

琉は店主を店の中に放り込むと、トリガーパーツを外して上着にしまいこんだ。パルトネールを腰のサッシュに差すと、そしてロツサの方を向いて言った。

「ロツサ、飯は船で食うことにしよう。今日は一端帰ろうか……っ
ておわッ!？」

その場を離れようとした琉の背中に衝撃が走る。ロツサの目の前で地面に倒れこむ琉。そこにいたのは低めの身長に短めの黒髪の女であった。女はポケットからスタンガンを取り出すと、今度はロツサに迫った。地面から起き上がる琉。女の持つスタンガンを見るなり、琉はその場から女の腕に飛びついた。

「ロツサ、今すぐ逃げろ！」

ロツサの体は電気に弱く、例えばスタンガンでも彼女にとっては凶器である。琉はロツサをその場から離すと、スタンガンを強引に取り上げて踏み壊した。すると相手は先程のナイフを取り出し、店主よりも格段に速い動きで斬りかかる。このままじゃやられる、そう思った琉は一端距離をおいた。

「お父さんの仇……！　よくもやってくれたわね！！」

女は店主の娘であつた。ナイフを握る手が小刻みに震えている。彼女にとつて、すぐ目の前で父親を撃たれるというのはトラウマにもなりかねぬショックな出来事と言えるだろう。

「お父さんを撃つたのは悪かった。だが安心してくれ、撃つたのはパラライザーだから一時的に眠ってるだけだ」

「それでも、撃つた事実は変わらないわ。貴方は悪魔をかばうためなら他人を犠牲にすることもいとわないのね。それにお父さんが生きていようといまいと、アタシが今やるべきことは一つ！　例えば刺し違えてでも貴方を倒す！！」

女はそう言うとな이프を逆手で持ち、琉に飛びかかった。琉はパルトネールでナイフを受けた。

「悪いことは言わん、ナイフをしまつて撤退しなさい。こんなこと、中学生のやることじゃない！」

「あら、誰が中学生ですつて？　この期に及んでふざけるんじゃないわよ、これでも22だからッ！！」

パルトネールを押し切り、女のナイフが琉の上着とサツシュを切り裂いた。上着が地面に落ち、琉は黒い半袖の開襟シャツと白いベストを羽織った姿となる。

（ちつ、やりやがったな！　ただでさえ俺は射撃苦手なのにちよこまか動き回るんじゃないやねえよ！！）

琉は女のナイフをかわし、前転すると共に上着を拾い上げ、トリガーパーツを取り出そうとした。

「そうはさせるか！」

女は琉の肩を蹴った。仰向けにひっくりかえる琉。女は流に組みついてナイフで首を掻こうする。しかし女の表情は途端にこわばったモノとなり、握っていたナイフは地に落ちた。

「考えもなしに組みつくとな、こうなるんだぜ、お嬢さん？」

パルトネールの先端が、女の鳩尾を捉えていた。そう、琉は組みつかれるのと同時にパルトネールを構え、相手の飛びつく勢いを利用して真っ直ぐに突いたのである。琉は女を払いのけると上着を回収し、そのままアードラーに向かって走った。

「琉、大丈夫だった!？」

「俺は大丈夫だ、早く船に戻ろう！」

ロツサを後部に乗せ、琉はその場から走り去ろうとした。

「待て……逃げるのか卑怯者……！ 殺すならさっさと殺しなさいよ……」

女が鳩尾を押さえたまま琉達に迫る。

「……俺に前科は不要だぜ、特に婦女暴行はな。そうだ、こいつはトラ電の燃料代な」

台詞の後、琉はポケットから硬貨を取り出した。

「釣りはいらんよ。とっときな」

琉は女に向かってその硬貨をシュツ、と投げつけた。硬貨はすねに当たり、女はそのまま足を押さえてしゃがみこんだ。その隙を突き、琉はアクセルを鳴らして走り去っていったのだった。

「なんて屈辱……ってこれ、1チャリンじゃないの!？」

因みにこの世界における1チャリン硬貨は1円玉と違って四角いという特徴がある。更に少し重いため、こういう風に銭型。次みたいにぶつけられると非常に痛いのだ。アードラーに乗って走り去る二人の背中に、女の恨めしそうな視線が突き刺さっていた。

「うう、喉が渴いたよお……」

「ここは乾いてるからね……。待ってろ、船に着いたらたっぷり飲ませてやるからな!」

カレッタ号に急ぐ二人。アードラーを船底に戻すと、琉とロツサは我先にと食堂に走って水を飲み、そのまま遅い朝食を取ったのであった。

「くっそ、あの女……。俺の服を台無しにしゃがったな!」

食事の後、琉は自室で女にやられた上着を広げていた。ナイフで斬られた上着は真つ二つに裂かれており、戦闘の激しさを物語っている。

「服、直らないの？」

傍らで見ているロツサが言う。

「このままでは直らない。ロツサ、君が着ているモノと違って、俺のは体の一部じゃないんだよ？ まあ、幸いここには腕の良い知り合いがいる。後で修理に出しに行こう。まあ、しばらくは……」

そう言いつつ琉はクローゼットを開けた。すると何てことだろう。中には同じ上着がずらりと並んでいたのである。

「一応こっちからここまでが夏用。あとは冬用だ」

琉は一着、夏用のモノを取り出して羽織ると、裂かれた上着からポケットの中身を移した。中には替えの電池、メモ帳等の筆記用具、財布、ライセンスの入ったカードケース、パルトネールのトリガーパーツと、大小様々なモノが入っている。その一つ一つを琉は移したのであった。

「ねえ琉、何で同じ服ばかり持ってるの？」

ロツサの疑問ももつともである。

「決まってるだろ、めんどくさいからだ！」

琉は服には無頓着である。いつも来ている服は作業着であると同時に礼服でもあるという、ズボラな琉にとってはまたとない便利なモノなのだ。因みに彼のベストはいざという時に膨らんで救命胴衣になる。彼にとって服とは道具であり、機能性こそが最も大切な要素なのだ。因みにどれも同じ柄なのは其の柄が好みだからである。

「ロツサ、夕方になってから裏通りに向かう。それまでは休んでなさい。……やれやれ、こっちは何も食ってねえのに食事代とられちまったなあ……」

まあ、命を買ったと思えば安い買い物だったか、と琉は考え直した。果たして二人は無事にこの国で過ごせるのか、そして垂涎の砂漠グルメを口にすることは出来るのか？ ロツサをめぐるアルカリアでの物語は、まだ始まったばかりである！

「覚えてらっしゃい……！　いつか、貴方の首はアタシがもらい受けるから……！」

『琉が飲むソディアの水は熱い』 急（後書き）

今回は色々と変なことが判明しましたねw 更に新レギュラーも登場しました。あと、今回から次回予告は後書きでやろうと思います。ではどうぞ！

ゝ次回予告ゝ

「久しぶりだな！」

「琉、さっきから何を慌ててるの？」

『硬いことは良いことか』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

謎の美女ロツサの記憶の手掛かりを求め、アルカリアまでやって来た琉。翌日に潜水調査を控え、市内観光と洒落ようとした二人を待っていたのはメンシエ教の罠だった！ 何とか退けた琉達であったが、果たして二人は無事に調査することが出来るのであろうか！？

『硬いことは良いことか』 序

交番。あの後琉は、朝の騒ぎの中心人物の一人として警察に呼ばれたのだった。今、琉の目の前には警官服に身を包んだダイヤモンドの青年がいる。

「……なるほど、周りの証言とも一致しますね。ということは、一方的に命を狙われた、と。そうそう、あの店主から例の薬物の反応が出ました」

琉は襲われた時のことを警官に話した。幸いにも目撃者が多く、琉がとった行為はいわゆる“正当防衛”であることが証明された。

「ところで、こういうことは過去にもありましたか？ 何か、彼らから恨みを買うようなことでも」

「過去も何も、何度かやられてます。どうも奴らに、メンシエ教に目を付けられたみたいで……。心覚えと言ったら他の人種の知り合いが多いのと、以前に私の故郷にいた教徒を警察送りにしたのが原因ではないかな……」

琉はなるべくロッサに触れないように警官に話していた。オルガネシアでメンシエ教に破防法が適用されたという情報はアルカリアにも入っており、特にダイヤモンドが多く住むこの国では警戒されていたのだ。

「分かりました。また何かあったら、こちらまで連絡して下さい」

琉が交番を出ると、すでに外は夕焼け空となっていた。

「琉、どうだった？」

「ああ、無罪放免だ。ま、いつも言ってるけどさ、俺に前科は不要だぜ。さて、裏通りに行くか」

そういうと琉はアードラーに跨り、ハンドルを握った。二人は、今朝通った道のすぐ裏側……通称裏通りを通っていた。店が立ち並んで賑やかだった表通りと比べ、裏通りには生活感が溢れている。

「ここにはちよつとした穴場あるんだが……その前に寄っておきたい場所があるんだ。ロツサ、自分の入ってた棺を覚えているかい？」

ロツサは海底遺跡の棺の中から発見された。しかしその棺は目覚めたロツサには不要となり、琉はある知り合いの所へこれを宅急便で送ったのである。

「覚えてる。でも、あれがどうかしたの？」

「ロツサ、君にとっては使い捨てのベッドかもしれないが、俺達にとっては当時の事を知るための貴重な資料なんだ。だから調べてもらうことにした。今日向かってるのはそれを調べている工房さ。実はさつき連絡があつてね」

この国は主にダイヤモンドとトヴェルクが住んでいる。あとは海端とオアシス付近にヒトが少しくらいか。逆に森林を好むアルヴァンは全くと言って良いほど見掛けない。ダイヤモンドは鉱石等の“素材”に詳しく、一方トヴェルクは高い技術力を持っている。故に、このアルカリアは砂漠の国であると同時にモノ作りのメッカでもある

のだ。

「話によれば棺のことが少し分かったらしい。そして丁度俺がここにいると来た。……行くしかないよね？ それにここで食える料理はほとんどがディアマンとトヴェルクの伝統料理が入り混じったモノでね、こう言った工房が発祥だったりするんだぜ」

やがて二人はある建物にたどり着いた。その壁と屋根には様々な生物を模したレリーフの見られ、中からは石を削る音やPCのキーボードを叩く音等が聞こえてくる。

「さて、到着だ。ちょっと待ってな」

琉はアードラーにヘルメットをしまうと同時に座席から一升瓶を取り出した。そして玄関に向かい、扉に付いているチャイムを押した。

『オキヤクサンダヨー！！』

明らかに分かりやすく、かつウケ狙いとしかたれないチャイム音が響く。数秒して、扉は大きな声とともに開いた。

「はいはい、どちらさんですか……おお！ 琉ちゃん！！」

中から現れたのはディアマンの男であった。顔に石で出来たタイル状の鱗が生えており、額にはこれまた大きなダイヤモンドがはまっている。肘から手の甲にかけてゴツゴツとした殻状の石に覆われていた。ゴツい外見とは裏腹に、その喋り方はどこかのんびりとしていた。

「久しぶりだな、アル！ お土産もあるぜ」

アルと呼ばれた男は扉を開け、琉達を出迎えた。

「早速上がってよお！ …… おや、彼女が例の棺の？」

「ああ、そうだ。彼女がロッサだ、よろしくな。ロッサ、彼はアルベール。俺の昔からの知り合いだ」

アルベール・デュランダル、通称アル。ダイヤモンドの男性で、琉がこの業界に入って以来の知り合いである。ダイヤモンドは長生きでかつ成長が遅く、彼も見た目は若いが実は今年で50歳になる。しかしこの年齢、ヒトでいう25歳弱に相当するため、おやっさんと呼ぶにはまだ若かったりするのである。

「皆、今日はもう上がってえ！ 大事なお客さんなんだあ！」

工房内で作業していた者は、次々に作業を止めて帰り始めた。

「何か悪いね、邪魔しちゃったみたいで」

「良いよ良いよ、こっちは商売だし。そうだ、ちょっとここに座っててねえ」

琉とロッサは事務室に案内され、席に着いた。

「おう！ 琉ちゃんじゃないか！！」

そこにもう一人、トヴェルクの青年が入ってきた。

「ゲオ！ 元気にやってたかい！？」

「ああ、もちろんさ！ ってあれ、彼女は？」

ゲオはロツサに気付いた。

「彼女はロツサ。例の棺に眠ってた子だ。…… ロツサ、彼はゲオルク。ここの職人だ」

ゲオルク・ハインツェル、通称ゲオ。これまた琉の知り合いである。因みにここの工房の図面を引いたのは彼である。

「そうだ、せつかくだしお土産持って来たぜ！」

琉は持っていた一升瓶をテーブルにドン、と置いた。途端に彼の目が輝きだす。

「ヒヤッハー！ 泡盛だアー！！」

「そうだ、俺の故郷、ハイドロ島の泡盛さ。好きなんだろう？」

そこにアルが入ってきた。

「お待たせえ。そうだ、御飯作らなくちゃねえ。琉ちゃんも食べてくかい？ 良いオオトカゲがあるけど」

「あ、良いかい？ じゃあ手伝うよ！」

意気揚々と工房のキッチンに向かう琉。こうしてやっとアルカリアの料理にあり付けることとなった琉とロツサなのであった。

「聞いたぜ琉ちゃん、今朝は散々な目に遭ったんだって？」

ゲオが琉に聞いた。

「ああ、水ん中にトラ電の中身入れられたぜ。あれ飲むと死ぬの通りすぎて火葬まで出来ちまうからなあ……」

「あれは危ないよお。ヒトだったら丁度コップ一杯で灰になるからねえ。まあ、オイラ達ならその半分でも十分危ないけどさあ、それだけあつたらうちのPCがフル稼働で1週間使えるよお」

つまり琉とロツサの分を合わせると二週間分である。工房で最もかかるのは食費と燃料費なので、この話はあまりにもつたいないことだというのがお分かりだろうか？ 要するに琉を殺すのに使うくらいなら、彼らの所に持って行けばむしろ感謝されるところだったのである。

「どうせなら持ってきてよお」

「ダンナ、地味に無茶をおっしゃる……。密封してないんですぜ？」

『硬いことは良いことか』 序（後書き）

新キャラ登場！ それも、ダイヤモンドのメインキャラが初登場致しました。彼らの活躍にもご期待下さいw

『硬いことは良いことか』 破（前書き）

棺について分かったことがある——連絡を受け、琉とロッサは工房に向かった。

『硬いことは良いことか』 破

オオトカゲの皮を剥ぎ、肉をぶつ切りにするゲオ。そこに香辛料を加え、大量の油で炒め始めた。皮はなめして使うことが出来る。その横で、琉はサソリを揚げていた。

「琉ちゃんの料理は久しぶりだなあ。今日は腕が鳴るねえ」

アルは素手でサボテンを引きちぎり、皮を剥がして焼いていた。のんびりとした口調で、やっていることは中々豪快である。

「そっぴゃあの棺桶のことで来たんだよねえ？ まずオイラの目からすれば、あれは中々良い大理石で出来てるよお。色々くつついてボロボロだったけど、あれは是非ともオイラの鱗に欲しいんだなあ。一片食べたんだけど、中々旨かったよお」

ダイヤモンドは鉱物を食べ、骨や体表の鱗、髪の毛や爪等に変えている。そして鉱物以外にも、有機物から摂取した炭素が年齢とともに額や首筋といった場所に蓄積され、大きなダイヤモンドが出来るといった特徴を持つ。アルの頬には一枚、棺から取ったと思われる大理石で出来た鱗が生えていた。

「あともう一つ、あの棺は埋葬するためのモノではないぞ。いわゆるコールドスリープ装置って奴だ。それも封印解除の際にエネルギーを与え、目覚めた後はすぐに活動できるようにするモノさ。碑文からしても恐らく、彼女は何かから逃れるためにこの処置をされた可能性がある」

ゲオが言う。確かにこの棺は最初にこれに群がるハルムの血で字

を満たし、その上で一杯の清水を与えることで蓋が開いた。ゲオの推測ではハルムを集めてその血からエネルギーを棺に集め、清水を掛けることで水分を補給させるのが目的ではないだろうかということであった。

「そして最後に指定したモノを口に直接入れることで封印が解ける。しかし彼女の場合は液状だったようだな。おれたちでも流石に対象を溶かして封印する技術は聞いたことがない。ということは恐らく……」

「まさか液化した姿の方が本来の姿、てことかい？」

琉は驚愕した表情で聞いた。

「それしか考えられないよお。つまり彼女はヒトじゃない何かってことお。流石にそこまではオイラ達の専門外だあ。そっぴや、聞いた話じゃあ彼女は母ちゃんになるのが使命なんだってえ？　だとしたら、何処かに同胞がいるかもしれないよお」

アルが答える。つまりロツサの姿は、長身かつ豊満な胸を持ち、腰に達するほど長いブルネットの髪、端正な顔立ちのあの姿はいわば、世を忍ぶ仮の姿ということである。

「いや、ヒトじゃないのは明らかだ。こっちも色々と見て来たからな……。まあ、続きは事務室にしようか。サソリ揚がったぜ！　ロツサ、ちよつと手伝ってくれ」

ロツサの手伝いで皿を運ぶ三人。テーブルには様々なアルカリア料理が並ぶ。大皿に豪快に盛り付けられたオオトカゲ炒めに、琉の揚げたサソリの唐揚げ、サボテンのステーキに切り分けられたドラ

ゴンフルーツ。どれもこの世界ではアルカリアでしか食べることの出来ない珍味である。

「開けるぜ！」

琉が自前の泡盛を開けて杯に注ぐ。久しぶりのご馳走に舌鼓を打つ琉に、初めて見る料理に目を輝かすロツサ。見た目は大人でも、無邪気にはしゃぐその姿はまさに子供そのものだった。

（ふっ、相変わらず可愛い子だな……）

そつと心の中で呟く琉。ロツサは喋るのも忘れて夢中になって食べていた。

「いつもそんな感じがあい？ まあ、食べ物が美味しいのは幸せな証拠だよお」

杯を片手にアルが言う。相槌を打つ琉。

「そつだ、棺の話の続きといこうか。あれ、一体何年前のだったんだ？」

「ああ、あれねえ。おおそ三千年前に作られたモノだねえ。三千年前といえはいわゆる“大洪水”と時期が被るんだよねえ」

大洪水。遺跡の調査によれば、三千年前のある時期に大きな洪水があちこちで起こり、これで陸地の大半が沈んでいったという。同時に、この時期には大規模な戦争があったらしいことまで判明しているのだ。

「ということは戦火と洪水から逃れるために……」

琉は考える。ということは、メンシエ教の聖典に書いてあるのは見事なデタラメだということになる。

「それに母になることが目的なら、どこかに男の同胞がいるはずだと思っただ。しばらくは棺探しを中心にと良いかもしれないな」

「棺探しも良いけどもっと大事なことがあるよぉ!!」

アルが何だか悲痛な声を上げた。

「早く水位を下げる方法を開発しないといけないんだよぉ！ 知ってる？ この一年でソディアは5cmも水位が上がったんだよぉ！？ このままじゃディアマンは絶滅だぁ……」

説明せねばなるまい。約三千年前の大規模戦争と大洪水で、この世界の陸地は約三分の一が一気に海に沈み、推定で四十億人が亡くなったとされている。更にそこからじわじわと海面は上昇し、約三千年かけてまた更に世界の陸地の半分が沈んだことが調査で分かっているのだ。洪水が起きたために戦争が起きたのか、はたまた戦争が起きた所に洪水が起きたのか。その史実は未だ、深海の闇に沈んだままである。

アルを始めとしたディアマンは水に弱い。鉱物が大量に体に含まれる彼らは、水中に入ると浮上出来なくなるのである。さらに湿気が多いと鱗に苔や藻が生えてボロボロになってしまうのである。事実、遺跡で見つかる遺骨はディアマンのモノが最も多く見つかったことからそれが伺えるだろう。

四種族中最も海への進出が目覚ましいヒトといえども、流石に陸地がなくなつては生きていくことが出来ない。というか、陸地がな

なくなつて生きていける種族はいないのである。船というモノは港がなくなればいつか沈む。それはヒトである琉にはよく分かつていた。

「しかも暴徒化した奴もいるしな。……メンシエ教とかさ」

生命の危機に見舞われた生物は、何とか生きようと必死になる。そして中には、少ない資源を取り合い罪を犯す者も出始めるのだ。いわば“ヒヤッハー”な連中である。メンシエ教はいわば、その筆頭といつても過言ではないだろう。

「社会不安が事件を招き、やがて矛先は弱者に向かう……。その弱者の中に、ロッサも含まれてるワケか」

『硬いことは良いことか』 破（後書き）

新たな事実がまた次々と……。実はそこまでお気楽な世界ではないんですw

『硬いことは良いことか』 急（前書き）

ロツサの棺の秘密。それは、葬るためのモノではなく再び目覚めるためのモノであつた……。

『硬いことは良いことか』 急

洪水、戦争、封印。かつてロツサを襲ったと考えられる史実。迫害、忘却、使命。現在彼女が向きあわねばならない事実。現実とは非情なモノで、一難去ってまた一難とはまさにこのこと。何故彼女は、この純粹無垢な愛すべき存在はこれほどまでに苦しまねばならないのか。喜々として御馳走をむさぼるロツサを見ながら、琉は考えていた。

「せめて、彼女が今笑顔でいられる場所があること。……それが救いって奴か」

思わず琉の口から漏れた一言。それを聞いたロツサは、琉の方を向いて言った。

「どうしたの？ 何で難しい顔してるの？ せつかくの御馳走なんだからもつと食べようよ！」

はいはい、そう言いながらも琉の顔には自然と笑顔が戻っていた。

「そうだね、ロツサちゃんの言う通りだあ。このことはまた明日だねえ」

「ま、今は食べようか！」

アルとゲオの表情もほころび、四人は改めて食事に手を付け始めた。

「それにしてもロツサちゃん、飲むねえ。1升あった泡盛がもう空

になっちゃうよぉ!」

ロツサはこう見えてかなりの酒豪である。以前にもワインボトル（750mL）を一人で二本も空にしており、今回も琉達が話している間に次々と泡盛を飲んではおかわりしていたのだ。具体的には琉達が三杯飲む間に彼女は何と九杯も飲んでいた。

「仕方ない、ビール開けようか」

ゲオが冷蔵庫からビール瓶（小瓶）を取り出した。栓抜きを掛けるとたちまちプシュツと豪快な音がする。

「これ、何？」

「ビール。ソディアの酒でね、ここの料理によく合うんだ。……しかしロツサ、本当に大丈夫かい？　というか、今日は泡盛だけで終わらす予定だったんだが……」

因みにこの世界でビールと言ったら砂豆で作ったモノである。

「やっぱサソリにはこっちだな。キンキンに冷えてやがるぜツ!」

琉達の話題は棺のことから次第に食べ物のことに移っていった。

「へえ、やっぱり今でも自炊してるんだあ!」

「んじやさ、彼女にも御馳走しちゃったり？」

へへっ、と笑った後、琉は言った。

「もちろんに決まってるだろう？　むしろやんなきゃ漢^{おとこ}じゃねえつての。実際彼女はよく食べるし、俺の料理を気に入ってくれたみたいだし！」

得意気に語りつつ、オオトカゲの身を頼張る琉。普通、この世界の探検家は料理人を雇って任せるか、外食で弁当を買い込む人がほとんどである。そのため琉のようなタイプはかなり珍しいといえるだろう。するとゲオが言った。

「しかし琉ちゃんよう、これだけ食欲旺盛なのに何で彼女は筋肉つかねえんだ？」

確かにロツサは、いかにも女性らしいむっちりと丸みを帯びた体つきをしている。これがハルムに組みついて捕食するなんて考えられないほどに。

「筋肉？　十分付いてるだろ。でなきゃこの胸はありえないぜ」

するとゲオはいきなり立ち上がり、ロツサに近づいた。いきなりこのことに驚くロツサ。ゲオはロツサをじろじろと見始めた。

「ゲオ？　さては惚れたな？」

冗談を言いつつ酒を飲む琉。しかしゲオは、琉とロツサには想像のつかなかったある行動に出たのである。彼はスッと彼女に手をのばし、そして

むにゅっ

「……え、何？」

何と、大胆にも彼女の胸を片手で掴んだのである！ キョトンとするロツサ。それを見た琉は思わず酒を口から吹き出し、たじろぎながらこう言った。

「おい馬鹿やめろ、つか何やってんだ！ 俺でもまだ触ってねえんだぞ！！」

顔を真っ赤にし、あたふたする琉。半ばパニックに陥ってる彼にゲオは言った。

「なあ琉ちゃん、おめえこんなにぶよぶよとした胸が好きなの？ これじゃあただの脂身じゃねーか」

説明せねばなるまい。トヴェルクという種族には、男女ともに鍛え上げられた筋肉隆々の肉体こそが至高という価値観がある。そのためヒトやアルヴァンからすれば魔性ともいえるロツサの体はむしろ“デブ”の範疇に入り、あまり好まれるモノとはいえないのだ。

「ありや残念、胸筋じゃなかったのお？ だったらもつと力チ力チにならずにゃあ」

またもや解説せねばなるまい。ディアマンという種族の価値観は鱗と筋肉で出来たカツチリした肉体こそが美しいというモノで、トヴェルクのそれとかなり似通っている。因みにヒトとアルヴァンと同じように、トヴェルクとディアマンの間にも同様に混血が生まれるという特徴がある。

「あのなあ、俺達からすりゃあこれくらいが良いんだよ！ ……つてロツサ、どうしたんだ？」

ロツサは飲むのも食べるのもやめて自分の胸を触っていた。どうやらさっきのことを真に受けてしまったようである。

「ねえ、琉……」

ロツサは琉の手を掴んで言った。

「ゴクリ……な、何だねロツサ……」

妙な緊張感を覚える琉。すると何を考えたか、ロツサは自分の胸を琉の手に触らせたのである！

「ひゃ、ひゃあつ！？ ……つてあれ？ 硬い……！？」

何ということだろう。ロツサの胸はあのふくらした魅惑的なモノではなく、琉やゲオ達と同じ硬くてツルつとしたモノに変わっていたのである。

「ねえ、どうかな？ 硬い方が良い？」

「何、硬くなっただと！？ ちょっと琉ちゃんどいて！」

茫然とする琉をどかし、ゲオがロツサの胸を撫でた。

「ヒューッ！ 見ろよ彼女の胸筋を、まるでハガネみてえだ……！」

「ええ、変わったの！？ やっぱり女も筋肉だよねえ」

驚愕と感心の混ざったゲオの顔。その様子を見ながら放つロツサ

のドヤ顔。一方、一人酒を飲みつつゲンナリ顔の琉はこう言った。

「ロツサ、一々皆に好かれようとしなくて良いから……。少なくとも俺は柔らかい方が良かったぜ」

するとロツサはまたも琉の腕を掴むと、やはり自分の胸を触らせた。

「そうそうこつむつちりと、かつむにゆうつとしたこの柔らかい手触り……。って、ええッ!？」

琉はハタと気付いた。さっきから自分らがやっていること、それは……。

「あわわわわ!! ちょ、ちょっとロツサ、さっきから何やってんのちょ、おい、て、てか俺さっきからむ、胸、ロツサの触っちゃまってる!?! おろろろろ!!」

「琉、何急に慌ててるの? ワケが分からないよ」

頬を赤らめ、意味不明なことを次々に口走る琉。元々照れ屋でシヤイな性格だった彼に、これは少々刺激が強すぎたようである。

「む、胸、ロツサの胸……ブパアッ!!」

最終的に琉は大量の鼻血を出して引っくり返ってしまった。ロツサの胸を触ったその手は、卒倒してもなおビクン、ビクンと動いていた。

「ロツサだっけ? あんまり人に自分の胸を触らせちゃいけないよ。

中にはこうなっちゃ奴もいるからね」

「特に琉ちゃんは本当はすごくシャイなんだよお。だからオイラ達と違って未だに独身なんだよお」

琉の顔を心配そうに覗き込むロッサ。と、こんなワケで琉の初めてのラッキースケベは血みどろな結果に終わったのであった。

『硬いことは良いことか』 急（後書き）

琉ちゃん、ついに鼻血吹き出しちゃいました。では、次回予告です。

〈次回予告〉

「残念ながらこいつは“生きて”もらい受けるぜ！」

「琉、待ってて！」

『必殺海底仕事人』 序（前書き）

～前回までのあらすじ～

琉ちゃんはある時海底遺跡でロツサちゃんを見つけました。でも彼女、なんと記憶が一切ないのぉ！ だから琉ちゃんは彼女の記憶のためにあちこちの遺跡を回る決意をしたワケ。それでオイラ達ディアマンの住むアルカリアのソディア島までやってきました。そこで以前に彼から送られた棺を調べて分かったことを教えてあげたよぉ。あれはコールドスリープ装置で、ロツサは約三千年前に封印されたみたい。その時期は大きな戦争と洪水があっただよねえ。だとしたらロツサはそれから逃れるために？ でもまだ分からないことが一杯あるよぉ！

『必殺海底仕事人』 序

あの飲み会の翌朝。琉はカレッタ号にて準備をしていた。

「やつと俺の日常が戻ってきたぜ。さてロッサ、今日やることだが……」

海図を出し、琉はロッサに説明を始めた。

「今いるのがここ。ここからざっと30分でこの白い点、エリアδに着く」

相槌を打ちながら話を聞くロッサ。エリアδの古代文字は解読されておらず、更に入り組んだ独特の地形が特徴である。そのため、ここはかつて大きな町だったのではないかと考えられているのだ。しかしその入り組んだ地形は数々の探検家の行方を阻んできた。

「一応ロッサには……留守番をしてもらおうかな。仮に何かあったらその装置が鳴るようにしてある。あとは俺の言う通りにすれば動くはずだ」

琉は準備を終えると舵を握った。発進するカレッタ号。天気は快晴で波もなく、探索にはもってこいの海況である。海の水は青く、透き通っていた。

「エリアδ、座標確認。ダイバースイッチ・オン！」

琉の声と共に、舵の中心にあるスイッチが入る。甲板が装甲に覆われ、ロボットアニメを思わせる変形音を鳴らしながら船の形が変

わってゆく。

「すごい、すごい！ 船が海の中に入っていくー！！」

ロツサを乗せて潜水するのは初めてのこと。話には聞いても体験まではしてなかったロツサにとって、これは忘れられない思い出となるだろう。

「今日はあまり来てないようだな。まあ、気楽だから良いか。アンカー・シユート！」

水深約80m付近。掛け声とともにスイッチが押され、碇が放たれる。カレッタ号のライトが、遺跡全体の光景を照らしていた。15mはあるうかと思われる、四角い塔のようなモノが乱立した遺跡の地形。本来はもっと高かったのだろうか、どれも途中で崩れたり倒れたり。多量の付着生物等によって原形を留めていないが、これはかつて高い建物だった推測されている。その証拠に内部は空洞で、中から人骨が見つかるのである。しかし何のために大きな建物を建てたのかは依然謎のままである。

「ロツサ。ジャックによれば、君の“目”が見つかったのはこの辺らしい。何か、覚えてないかい？」

外の風景を眺めるロツサ。しかし……

「駄目、何も思い出せない……」

「流石に、ここまで崩れたら分らないか……」

うつむくロツサに琉は言った。ここはあの“大洪水”により壊滅

したとされており、それもかつての街の姿が分からぬほどに崩壊したのである。

「クラストアーム！」

琉はカレッタ号に備え付けられた装置、クラストアームを展開すると辺りのガレキを取り除き始めた。

「よし、これで入れるぞ！ ロツサ、ちょっと付いて来なさい」

琉はポケットから取り出したライセンスを舵の中心にあるスロットに差すと、背後にある重い扉が開いた。扉の向こうには小さな部屋がある。琉とロツサが中に入ると扉が閉じ、そのまま船底に向かって降りて行った。エレベーターから出るとそこには巨大な装置と小さな個室があった。

「ちょっと待っててくれ」

そう言って、琉は個室に入って行った。扉を閉め、鍵のかかる音がする。

（彼女にこの部屋を見せるのは初めてだな。さぞかし驚くだろうな！よしさつさと着替えるか……ん？）

琉はある違和感に気が付いた。ここは着替え用の個室である。にも関わらず、何処かから視線を感じるのだ。

「ハハ、まさかな……！？　こら、ロツサ！　着替え覗きはやめなさい……！」

なんとロツサが、扉の上に手を掛けて覗き込んでいたのである。

「琉だつて以前お風呂覗いたじゃん。ところで、その食いこんでる布は一体何？」

「ああ、これ？ ふんどしだ……って、早く降りなさい！ 全く……ってちよつと待て。この間のジャックと一緒にやった奴、バレてたのか！？」

顔が真っ青になる琉。その一方で、覗かれるのも覗くのも平気なロツサ。彼女にはどうも“羞恥心”というモノがないらしい。

（落ち着け、今はそんなこと考えてる場合じゃないだろ！ 仕事だ、仕事！）

潜水作業で最も大切なことは“冷静でいること”である。非常に危険を伴う作業だからこそ常に心を落ち着かせ、ゆったりとした気持ちでいる必要があるのだ。興奮状態に陥るとガスの消費が激しくなり、最悪の場合は呼吸が出来なくなってしまう。

「お待たせ。じゃ早速、ラングアーマーお披露目だ」

ウェットスーツに着替えた琉は、備え付けられた装置に向かって背中を向けた。琉の背後には人型のシルエットが両手を広げたポーズで描かれている。その“手”の部分に、スイッチが一つずつ備え付けられていた。

「では、ちよつと離れて。ハア……」

目を閉じ、交差した両手を伸ばしつつ呼吸を整える琉。

「ラングアーマー・セトアップ！」

掛け声とともに両手を広げ、拳で二つのスイッチを押す。すると琉の頭上に傘のような装置が現れ、スポットライトのように彼を照らした。そして琉の体は黒い霧状のモノに覆われてゆく。スイッチを押してわずか1秒。彼の体は漆黒の装甲に覆われた姿となった。

「すごい……」

思わずロツサの口から言葉がこぼれる。琉は口元の装備、マウスピースを力チツ、とはめ直した。すると独特の起動音とともに、彼の装甲に紅い縁取りや模様が入って発光する。

「これで装備完了だ。それじゃあ、行ってくるよ。操舵室で待っていてくれ」

目の前の床が開き、琉はそつと海の中に飛び込んだ。床が閉じるのを見届けると、ロツサは操舵室に向かった。

操舵室に行くと、窓の外に琉の姿があった。アードラーに乗り、船の中に向かって手を振っている。ロツサはそれに気付くと振り返した。琉はロツサが振り返すのを見ると、頭にある耳かヒレのような装置を触り始めた。するとロツサの近くから呼び出し音が響き始める。

「あー、あー、聞こえるかい？」

「聞こえるよ！」

琉は窓越しに頷いて見せた。

「良いかい、海中と船内での連絡はそいつで行う。また鳴ったら出てくれ。それじゃ――！」

琉はアードラーにしがみつき、そのまま遺跡に向かって行ったのだった。

『必殺海底仕事人』 序（後書き）

今日はアルにあらずじを読んでもらいました。なんか長いですw
そして今更ですがタイトルはネタですw w

『必殺海底仕事人』 破（前書き）

ロツサの手掛かりを求め、遺跡に向かう琉。果たして彼を待ち受けるモノとは？

『必殺海底仕事人』 破

カレッタ号のライトに照らされる遺跡の光景。所々穴のあいた建造物が、いくつも建ち並んでいる。琉達探検家はこれを“塔”と呼んでおり、探しモノは大抵ここにあることが多い。塔の外には所々クレーターがあり、ここにも戦火が及んだことが伺える。ロツサの“目”はここで発見された。だとしたら、ここで“目”を失う要因があつたはずであり、その要因は恐らく戦争か……と琉は考えた。

「ただ洪水があっただけなら、ここで“目”を失うとは考えにくい。恐らくここで攻撃を受けたんだろうな」

更に目を取り戻した途端に戻った記憶、“母になれ”という使命を帯びたのもこのはずである。琉はアードラーに乗り、更に探索を続けた。

「ガレキ多いな……。その上見る場所も多い。場所を絞ろう……。オセルスレーダー！」

琉の掛け声とともに、額にある三つの単眼を思わせる装置が紅く光かり始める。すると琉の視界にはそれまで見えなかったモノが次々に映し出された。

オセルスレーダー。ラングアーマーの頭部に備え付けられた装置で、透明度の低い場所や隠れたハルムに備えるために使う。辺りを透視したり隠れたモノを探し出したりすることが出来、面積の広いエリアではかなりお世話になる機能である。

「あの辺りに何かが密集している……。よし、探りを入れるか」

琉は塔の一つに目を付けた。まだあまり探られていないのか、反応物が多い。

「よし、潜入だ！」

琉はアードラーを外に停めると、その尻尾にあたる部分からワイヤーを出し、それを持ったまま塔の中に入って行った。以前入ったエリアβの時と違い、今回入る所は結構広い。水中拘束を防ぐため、塔の探索には命綱が必須である。琉はパルトネールの先端から光りを出し、辺りを照らしつつ進んで行った。オセルスレーダーには透視能力はあれど、辺りを照らすことまでは出来ないためである。

朽ち果てた建物。これは何のために建てられたのだろうか？ オセルスレーダーの映す宝を求め、琉は塔の内部を歩く。と、その時だった。パルトネールから音が鳴り始めたのである。

「何、ハルムだと？ 何処にいる！？」

慎重に辺りを探り始める琉。オセルスレーダーにはハルムを発見する機能もあり、琉は額のリボルバーを回してその感度を上げていた。

「キシキシシ……」

独特の鳴き声が閉鎖された空間に響く。間違いない、ハルムは近くにいる！

「パルトネール・サーベル……」

剣に変形させたパルトネールを握り、琉は構えた。と、次の瞬間琉の頭上から謎の粘液が襲いかかって来た。すぐに腰のスクリュー

を起動してかわした琉だが、粘液は壁に絡みついて溶かし始めた。

「チツ、よりもよってパントーダか！　こんな時に厄介な奴が出たぜ……」

毒づきながら上を見る琉。そこには、蜘蛛とカニを足して胴体を取ったような外見の奇妙な生物——即ちハルムが張り付いていた。

パントーダ。ラング装者にはある意味一番恐れられているハルムである。特定のエリアに待ち伏せ、自らのテリトリーに獲物が入り込むとそつと死角から忍び寄り、口から粘性の強い毒液を吐いて絡め取り、捕食してしまうという習性を持つ。毒液には溶解作用があり、絡め取られた獲物はその場で消化されてしまうというモノで、ラングアーマーでもこれをまともに浴びると危険である。しかし本当に恐れるべきは、コイツの毒液は塔の壁をも溶かしてしまうことにある。

「生かしておいたら崩壊する……止むを得ん！」

事実、このハルムのせいで探索していた場所が崩され、命を奪われた者もいる。パントーダは天井の割れ目から、ふわりと降りて来た。サーベルを構え、対峙する琉。毒液を吐かれる前に息の根を止め、消滅させねばならない。

壁をつたい、パントーダが琉にせまる。サーベルを構え、柄の先端をひねるとたちまち刀身は光をおびてゆく。迫りくるパントーダを睨んだまま、琉は言った。

「行くぜ……パルトヴァニッシュ！」

毒液を吹き付けんと口を開くパントーダ。そこに尽かさず、琉は輝く刀身を刺し込んだ。刺したまま、パントーダを真上に投げ上げ

る琉。パントーダは刺された部分から光を放ちつつ消滅した。

「早く行こう、他にもいる可能性がある！」

自分自身に言い聞かせ、琉は塔の奥まで急いだ。一方、カレッタ号船内では……。

「わたしの目が、ここに……」

ロツサは窓から、外の様子を眺めていた。ライトに照らされ、数々の塔がそびえ立つ奇妙な光景。彼女にはそこはかとなく見覚えがあった。しかし次の瞬間だった。

「ハッ!? ここはどこ? カレッタは? 琉は? ……きゃあっ
!」

気が付けば見知らぬ光景。海中の船の中にいたはずが、いつの間にか陸上の、それも巨大な建物の建ち並ぶ光景にいた。そして何故だか、たくさんの人達がこちらに向かって走っている。そしてロツサの目の前で、突如として爆発が起きた。

「ロツサ、大丈夫か!？」

ある男がロツサに手を差し伸べる。ボサボサした長い髪、無精髭を生やしており、ロツサの着ているモノとどことなく似た服を着ている。彼女は彼のことなど覚えていない、しかし何処かで会ったような、そんな感じがした。

「ここにはまずい、早くしないと……!」

ロツサは男の肩を借り、そのまま走り始めた。途中で男が何度も話しかける。しかしロツサにはそれが何を言ってるのかよく分からなかった。ただ突然の恐怖から逃れたいために、必死に走る他なかった。やがて二人はある船にたどり着いた。

「ここまで来れば大丈夫だ、あとは安心出来る……。奴ら、こんな所に船を隠してるなどとは気が付かなかったろうな……」

大勢の人々と共に船に乗り込んだロツサ。必死に走った反動か、彼女は船室に入って椅子に座るとそのまま疲れて眠りこんでしまった。

どれほど時間が経ったろうか。ロツサが次に目を覚ました時には元の、カレッタ号の船内にいた。

「今のは一体……。それに、さっきの男の人は、誰……？」

夢から覚めたような覚めてないような、妙な気分のロツサ。今のは何だったのだろうか、そう思いつつロツサは改めて外の風景を眺めた。そびえ立つ塔、あれはかつてもつと高かった。所々に開いたクレーター、あれは爆発によって起きたモノだ。遺跡の光景を見るたびに、ロツサの脳裏には少しずつ先程の謎の光景がリンクしていた。

「じゃあ、あれは……」

そう思った矢先、突如呼び出し音が鳴り始めた！

「ロツサ、マズいことになった！ 今から俺の言う通りにしてくれ、良いな……うわぁッ!？」

何かを言い終わらぬうちに、琉からの連絡が途絶えた。

「琉？　琉ッ！？　一体、何が……！？」

『必殺海底仕事人』 破（後書き）

さあ、久々にハルムが出て参りました。モチーフはウミグモ、実物は中々グロいですww

『必殺海底仕事人』 急（前書き）

カレッタ号に入った琉からの無線。しかし連絡は途中で途絶えた！
一体流に何があったのだろうか！？

『必殺海底仕事人』 急

カレッタ号に走った水中無線。琉の言葉は何かを言いかけて突如として切れた。一体何があったのか、話は十数分前に遡る。

「全く、ワイヤーにも汁掛けやがって……。全く、いつものことだが遺跡に長居は無用だな。さっさと見つけ出して帰っちまおう」

琉はワイヤーに着いた毒液を払うと、レーダーの反応する位置に急いだ。辺りを照らし、周りのモノには目もくれず、ひたすら宝の山を目指す琉。これを手出来ればロツサの秘密が高確率で見つかるだけでなく、この後しばらく食い繋ぐことも可能である。

「ここかッ！」

パルトネールは依然として反応を示している。それも無視して、琉はスクリューを使って突き進んだ。もはや歩いてなどいられない宝の場所はまだ近い。とうとう琉はレーダーの捉えていたモノを探し当てた。そこには数々の宝石や鉱石、更に当時の調度品と思われるモノが大量に置いてあったのだ。

「ここは倉庫か何かだったのかな？ 今までスルーされてたのが不思議なくらいだぜ。では、回収と参りますか……そうはいかないか」

琉はそう言うのと背後に振り向いてサーベルの先端を突き付けた。そこには何十体ものパントーダがあり、その中に一体だけひと際大きな個体が混じっていた。普通のパントーダでも足を広げれば3m近くあるモノだが、この個体は実に12mほどの大きさである。

「なるほど、罨ってワケか。案外頭が良いんだな。残念ながらコイツは“生きて” もらい受けるぜ！ アードラー！！」

琉はアードラーを呼んだ。たちまちパントーダ達の背後からアードラーが突進する。パントーダ達はアードラー目がけてその口を向けた。

「吐かせてたまるか！ アードラー・バックスティング！！」

アードラーの尾の付け根に付いた棘から、無数の針状の光線が放たれた。光線はパントーダ達に降り注ぎ、毒液を吐こうとした個体は次々に消滅していった。その隙に琉はアードラーを近くに寄せるとそのカバーを外し、琉はつかさず宝をいくつか詰め込んだ。そしてアードラーの光線を盾にしつつ、残りの大きなモノを窓の外に置いたのである。

「さて、後は奴らを外まで誘導すれば……何ツ！？ しまった！！」

何と回収している間に、琉はパントーダの群れに包囲されていたのである。どうやらこの外にも伏兵がいたらしい。パントーダ達は一齐に毒液を吹き始めた。咄嗟にアードラーを抱え、バックスティングで応戦する琉だったが時はすでに遅し。琉のいる階層の壁が、天井が、柱が溶けて崩れ始めたのである。

「止むを得ん、ロツサ、マズいことになった！ 今から俺の言う通りにしてくれ、良いな……うわぁッ！？」

ロツサに連絡を入れようとした琉に、巨大パントーダの吐く大量の毒液が襲いかかった。アードラーを使ってかわした琉であったが、よりにもよって水中無線に使う装置に毒液が付着、溶かされてしま

ったのである。

「キシュシユシシシヤアアア!!」

巨大パントーダの鳴き声が響く。たちまち無数のパントーダがハサミを振りかざして琉に襲いかかった。アードラーに乗り、あちこちに垂れ下がる毒液をかわしながら琉は応戦した。しかし斬れども突けども相手は無尽蔵に現れる。その上塔は今崩壊の危機。それでも助けが呼べない以上、こうする他はない。

「もう一発だけサービスだ、アードラー・バックスティング!!」

琉はアードラーにしがみ付き、その場で回転しながらバックスティングを放った。塔を崩さず、複数の相手に決定打を与えられる技は現在これの他にない。辺りのパントーダを一掃したのを見るや否や、琉は巨大パントーダにバックスティングを放った。三本の棘を一か所に向け、針状の光線は巨大な影に次々に飛んでゆく。やがて相手は脚を縮こめ、動かなくなっていた。

「やったか!？」

しかし喜びもつかの間。塔の天井が遂に溶け崩れ、琉の頭上に降り注いだ。

「しまった!!」

アードラーを外に向け、脱出を試みる琉。しかし脱出寸前に出口はガレキに塞がれた。崩れた衝撃で辺りの水が濁り、急激に視界が悪くなる。遂に琉は腹をくくり、そっと目を閉じた。通信が途絶えて助けを呼ぶこともままならず、ガラガラと崩れゆく塔と運命を共

にし、わずか25年という短い生涯を終えようとしていた。

（カズ、ジャック、ゲオ、アル、そしてロツサ……。すまねえ、俺は一足先にあっちに行くぜ。）

塔の先端が、音を立てて深海の闇に沈んでゆく。突然の轟音に驚いてか、塔の内部にいた生物が次々に飛び出て来た。琉のいたフロアが、ガレキに包まれて消えてゆく。琉にはただ、死を待つ他なかった……と、思われた。

「琉！ 琉ッ！！ しっかりして、琉！！」

聞き覚えのある声が琉の耳に入り、彼の体を何モノかが揺り動かす。

「その声は…… ロツサ？ ロツサなのか？ …… そうか、ここはあの世か……」

「何言ってるの琉！ ここは海の中！！」

「海の中？ そうだよな。俺は塔と一緒に…… ってええっ!？」

やっと我に返った琉。気が付けば、別の塔の先端で柔らかい誰かに抱かれている。目を開けば、そこには紅い目の美女がこちらの顔を覗き込んでいた。琉はガバツと起き上がって周りを見て、言った。

「た、助かったのか？ …… ロツサ!? 一体どうやってここまで…… てか、息は大丈夫か!？」

「わたしなら大丈夫。息ならちゃんと出来てるから。それにどうや

つて来たかって言っと……」

途絶えた連絡を受けたロツサ。琉に何かが起きている、そう確信した彼女だが、カレッタ号の操縦は彼女には出来ない。ではどうすれば良いか。途方に暮れた彼女はあることを思いついたのである。

（そういえば、琉が飛び込んだあの扉、あれを使えば……！）

すぐさまロツサはラング装置の部屋に向かった。飛び込んだ扉は閉じている。しかし、彼女にはどつてことのないモノだった。ロツサは自分の体を液化すると、わずかな隙間から入り込み、海中に出たのである。

（琉、待ってて！）

ロツサは額の目を使って琉を探した。すると一つ崩れかけている塔の中に、大量のハルムと一人のヒトを見つけたのである。ロツサは再び体を液化すると、そのまま塔目がけて突き進んだ。途端に崩れだした塔。ロツサは夢中になり、塔の内部に入り込んで琉とアードラーを抱え、素早く外に引っ張り出したのである。

「ロツサ……よくやったな……」

満身創痍の琉。しかし喜ぶのはまだ早かった。崩れた塔のフロアに向かい、無数のパントーダが集結していたのである。

「何だ、仇打ちにでも来たのか？」

そう思った瞬間。塔のガレキの隙間から、あの毒液が吹き出て来たのである。毒液は塔どころか周りのパントーダ達にまで絡みつき、

瞬く間に溶かしていくではないか！

「共食いか……？」

周りを溶かした毒液が、再び塔の内部へと戻ってゆく。そして次の瞬間、塔のガレキをはじき飛ばしてあの巨大パントーダが現れたのである！ それも、先程の二倍近くの体格となつて。

「琉、気を付けて。あそこまで“融合”した奴は船をも溶かす力がある」

記憶が少し戻ったのか、ロツサは琉にそう忠告した。

「言われなくても分かつて……。しかし、塔の外なら存分に暴れられるな……！」

琉はアードラーに乗ると再び先程の塔に向かった。体を液化し、その後を追うロツサ。

「生憎だったな、塔の外なら遠慮はしないぜ。さっきのお返しをさせてもらおうか……パルトネール・チェイン！」

琉はパルトネールをチェインに変え、分銅を放った。一方ロツサも狩りの腕を構え、指先を引き延ばして鞭のように叩きつけた。毒液を吐くパントーダ。しかし広大なフィールドを手にした今の琉にそんなモノは通じない。一方ロツサは体を液化させ、果敢にも毒液の中に突っ込み、口の中に突撃した。

「ロツサ！？ 大丈夫か……！」

しかし次の瞬間、ロツサはパントーダの胴を突き破って現れた。
見た所体に別条はなさそうである。一方のパントーダは胴をやられ、
悶え苦しんでいるようにも見えた。

「大丈夫、元々溶けてるようなモノだから。しかしあそこまでされ
ると流石に硬すぎて食べられない……」

「……そうか。よし、だったら後は俺に任せてくれ。奥の手を見せ
てやる」

琉はアードラーに乗ったままパントーダに近づいた。アードラー
の上に立ち、琉は手を額の上に掲げて構えた。

「オセルスフラッシャー！」

掛け声とともに手を下げると、琉の額に付いた単眼と全身の模様
が紅く発光し始めた。琉の視界にはロツクオンマーカ―が映り、そ
の標的を相手の胴に合わせた琉は再び叫んだ。

「発射アーーーーッ……！」

琉の叫びが海底に響く。次の瞬間、彼の単眼から紅い光線が放た
れ、パントーダの体を貫いた。パントーダの巨大な体格は光線によ
って飛ばされ、塔の上から海底の闇の彼方へと堕ちていき、二度と
上がってくることはなかった。

「ハア、ハア、ハア……」

肩で息をする琉。残り時間もわずか。二人はカレッタ号に戻ると
海面まで浮上し、こうして長い2時間は終わりを告げたのであつ

た。

『必殺海底仕事人』 急（後書き）

今回は久々に「水中戦」と「遺跡探検」を書きました。いや、本来はこちらをメインにしたいのですが……。さて、予告です。

〈次回予告〉

「一体何者だったんだ？」

「これ……ワイン？」

『古より愛をこめて』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

俺はある時、遺跡で女を見つけた。名前をロツサという。彼女は記憶を失くしていた。そこで俺はあちこち回って調べることにし、手掛かりを求めてアルカリアまでやって来た。そして海底遺跡エリアに挑んだんだけど、そこで久々にハルム、それもよりにもよってタチの悪いパントーダに襲われちゃった。危ないところをロツサに助けてもらい、無事に浮上することが出来たのだが……。

『古より愛をこめて』 序

アルカリア領海、ソディア島沖。何とか浮上に成功した琉はラングアーマーの点検を行っていた。ラング装置にPCを繋ぎ、キーを打つ。琉の目の先にはメッセージが表示された。

『アクアイヤーに損傷あり。修復します』

アクアイヤーとは、ラングアーマーのパーツの一つで船との通信に使う装置のことである。頭部に着いた耳かヒレのようなモノで、琉のモノは縁の紅い三日月型をしているという特徴がある。カレット号との通信が出来なくなったのは、この装置を毒液で溶かされたのが原因であった。

『粒子化装置を起動します。原料を挿入して下さい』

海底遺跡から発掘されたロストテクノロジーのうち、最大の発見とされているのが物質の粒子化技術と流体化技術である。特殊な装置と人工触媒を用いて物質の形を自在に変え、制作や収納、変形が自在に出来るようになったのだ。ラング装置には一定量の粒子化した原料がタンクの内部に入っている。ライセンスに書き込まれた情報をもとにして形状化し、その人専用の使用に自在に姿を変えることが可能となっているのだ。そしてもし今回のように損傷した場合、必要に応じてそこに必要な原料を注ぎ足すことで容易に修復することが出来るのである。

「ロツサ。悪い、その『イヤー』と書かれた引き出しから、瓶を持ってきてくれないか？」

ロツサは琉に言われた通りに引き出しを開けた。中にはワインボトルが数本入っており、ラベルには『飲むなよ！ 絶対に飲むなよ！』と書いてあった。

「これ……ワイン？」

「ワインボトルの使いまわしだ。中身はむしろ同じ量のワインより高いな……飲めないんだけど。つか飲んだら不味いだろうな、多分」

冗談を言いつつ、琉は瓶を開けると装置に注いだ。

『燃料残り30%です。補充して下さい』

修復が終わると今度は燃料である。先程の戦闘で大量に消耗しているので、今回は多めに注ぐ必要があった。

「ロツサ、こいつに一杯水を汲んできてくれ」

琉は装置から筒状のモノを出してロツサに渡した。ロツサが戻ってくると、琉は水の中に白い粉を入れた。粉は一瞬にして水に溶け、跡形もなくなった。

「琉、これもしかして……」

「あの時の水に入ってた奴さ。これが正しい使い方だぜ」

琉は容器に蓋をすると、再び装置に入れた。

『メンテナンス完了』

画面に映った文字。ラングアーマーは再び使える状態となった。作業の後にはメンテナンス、ラング装者の常識である。

「さて、腹も減ったし飯にするか！」

修理を終えた二人は食堂に向かった。単純計算で、水中での運動量は同じ時間の陸における運動量の約2倍となる。ましてやあんなにも激しい運動をした二人は当然空腹となっていた。

「作業の後は豪快な、ガツンとしたモノが食いたくなるんだよね」

琉は冷蔵庫から骨付き肉を取り出すと、オーブンにそのまま入れてスイッチを入れた。この肉は保存用に特殊なタレに漬け込んだモノである。タレは琉の手作りで、各種香辛料を彼自身の好みで混ぜ合わせて出来ている。保存が利くだけでなく既に味が付いているので、疲れきった作業後でもオーブンに入れて焼くだけで手ごろに食べられるという利点がある。更に使用されている香辛料が、肉の臭みを消すだけでなく疲労回復等の様々な薬効を発揮する優れモノでもあるのだ。

「よし、焼き上がりだ！」

オーブンを開けるとたちまち香ばしい匂いが食堂に広がった。見事に焼き上がった肉に、琉は豪快にかぶりついた。ロツサはそれを見ると、琉と同じように骨を掴んで肉に噛み付いた。

「どうかな？ 焼いただけなんだが。……せめて切りやあ良かったかな」

琉の言うことは耳もくれず、ロツサは肉に噛み付いたまま離れな

かった。噛み付きながらもその目はルビーのように輝いている。相
当気に入ったらしい。

「ま、表情に出てるから良いか……ん？」

琉はあることに気が付いた。ロツサは肉に噛み付いたまま引き千
切らない。よく見ると、彼女の白い指が骨の溝に突き刺さっていた。
巨大な塊だった肉は見る見るうちにしぼんでいき、最終的には骨す
らもボロボロと崩れてしまった。

「はわゝ、おいしかったゝ！ 特に骨が」

「は、ははは……。そうか、それは良かったぜ……」

骨付き肉を、文字通り骨の髄まで堪能したロツサ。彼女の意外な
好物と驚愕の食事法に、琉はひきつった表情のまま笑っていたので
あった。しかし琉にはある光景がフラッシュバックされていた。エ
リアαにおいて、オドベルスを捕食した際のあのやり方に、今の食
事法がそっくりだったのである。

「い、一体どうやって骨まで食ったのかな？」

「指先で溶かして吸った。そのままだと噛めないから」

ロツサは、その尖った指先から自分の体の一部を流し込み、溶か
して同化してしまう。以前オドベルスと戦った時も指先を相手の体
に突き刺し、溶けたオドベルスの肉や骨を首筋から吸い取っていた
のだ。現実世界における、タガメやクモのようなモノだと考えてい
ただければ分かりやすいと思われる。

（ロツサの好物は肉よりも骨か。覚えておかないとな。しかしどうにも恐ろしい食い方だぜ。まさしく猟奇的な彼女って奴か……）

肉をかじりつつ、琉は思っていた。一方でロツサは琉の持っている肉を、いやその骨をじーっと見ていた。琉は肉を食べ終わると、ロツサに聞いた。

「俺、骨までは食えないんだ。よかつたらどうだい？」

「え、良いの？　じゃあ早速……」

骨をもらってむしゃぶりつくロツサ。彼女の指が骨の溝に刺しまれ、真つ赤なその唇に触れた途端に骨はたちまちボロボロになり、砂のように崩れてしまった。

「じゃあ、皿は洗っとくよ。……こんなに喜ぶんだつたら今度からは多めに作っておくかな。ロツサ、港に戻ったら拾ったモノをチェックするぜ。ひよつとしたら何か思い出すモノがあるかもな」

そう言いつつ琉は皿を受け取った。ロツサの皿には吸い尽されて原形をとどめていない骨がこじんまりと置かれている。いや、もはや骨とも言い難かった。

（まあ、骨の処理が楽になったと考えれば良いか。別に俺が吸われるワケじゃないしな）

『古より愛をこめて』 序（後書き）

前回のあらすじを読んでいるのは……そう、あの人です。しかし今回、ロッサのちよつと怖い部分が判明しましたねw

『古より愛をこめて』 破（前書き）

ラングアーマーの修理。 ロッサの戦慄の食事。 その後は……

『古より愛をこめて』 破

戦慄の食事の後、カレッタ号は港に戻った。二人はアードラーを甲板に上げ、船内に運んでいた。

「琉、これを何処に持ってくの？」

「作業室だ。君が目を覚ました部屋だよ」

二人は部屋に着くとアードラーのカバーを開け、中から大量の宝を取り出した。

「すごい、こんなに落ちてたの？」

「ふむ、おそらくほとんどが当時の装飾品だね。テクノロジーには応用することは出来ないが金にはなる。これでまたしばらく食っていけるぜ。しかしこのままじゃ売ることは出来ん、磨かないとな」

そういつて琉はブラシを二本取り出し、ロツサに一本手渡した。そして宝の一つを手にとると、

「良いかい、付着物をこいつで……こうやって取り除くんだ。時々こうやって真水で洗いながらね。……ほら！」

琉は少し磨いたその宝を見せた。磨かれた部分が鮮やかな青色となっている。

「こいつは立派なサファイアだ。他にもあるかもしれんな。これでちよつとでも当時の事を思い出してくれれば……まあ良い。何かあ

「ったら呼んでくれ」

これだけ言うと琉は、再び作業に取り掛かった。ロツサも彼と同じように、ブラシを持って見よう見まねで作業に取り掛かる。二人の顔は真剣そのものだった。

（お、やってるやってる。こうすれば記憶戻しになる上に作業の効率化、即ち金儲けにもつながるって寸法だぜ。やっぱ二人分稼ぐにはそれなりのことをしてもらわないとな……）

黙々と作業を続ける二人。やがて付着物だらけの宝物は、どれもピカピカの装飾品へと変わって行った。残り少なくなった時、ロツサは琉に言った。

「琉、これ上手く出来ない。代わりにやってほしい」

ロツサがそう言って持ってきたのはひも状の何かだった。確かにこれを磨くのは初心者には難しい。

「よし分かった。じゃあ代わりにこいつを頼むよ。なるべく自分でも出来そうな奴を選ぶようにね」

琉はそれを受け取り、代わりに自分の磨いていた石を渡すと早速作業に取り掛かった。ところどころ錆でボロボロにはなっていたが、ものの数分で付着物だらけの紐は見事な形のペンダントに姿を変えた。

「ほお、こいつは中々上手いこと残ったペンダントだね。……ん？」

琉はペンダントの先が開きかけているのに気が付いた。しかし付

着物と錆が邪魔で上手く開かない。そこで琉は更に磨きをかけ、錆を薬品で落として見事にこじ開けた。

「ここに写真か何かを収められるようになってんだな……んな!？」

琉は驚愕した。そしてロツサの方を向いた。それでもつてもう一度ペンダントを見た。

「こりやすごいモノを見つけちゃったようだ……ロツサ、ちょっとこっちへ!」

「え、何か面白いのあったの？」

「面白いも何もこのペンダント見てくれ、こいつをどう思う!？」

ロツサは作業を中断すると、琉の方に歩いて来た。そして彼に言われた通りにペンダントを見た。そこには何と髪の毛の長い無精髭を生やした男と、ロツサにそっくりな顔の女性が写っているではないか!

「すぐく……そっくり……」

「そっくりどころか君じゃないのか? というか、この男に見覚えは!？」

琉は半ば興奮状態にあった。追い求める真実にまた一步、近付きつつあるからである。一方のロツサはペンダントに写った男を凝視した。

「この人、知らな……!？」

ロツサの脳裏にある光景が鮮明によみがえった。炎の上がる街、崩れゆく建物、怒号や悲鳴の中で逃げまどう人々。そんな中自分の手を引いて走る謎の男、海中で突如広がったあの光景に出て来たあの男に、この写真の人はまさしく瓜二つだったのである。

「手を引いてくれてた……」

「な、何だって！？ 覚えているのか、いや思い出したのか！？ ちょっと詳しく聞かせてくれないかい？」

ロツサは琉に話を始めた。琉が潜水中に突如目の前に広がった光景。目の前で上がった炎、その後自分に話しかけて手を引き、街中を駆け抜けた謎の男。ロツサは出来る限りあの時の様子を琉に話して聞かせた。

「なるほど、フラッシュバックって奴か……。するとこの男が君を戦火の中から助け出したと言うのかい？」

「うん、この人だった。でも、誰なんだろう……？」

「ペンダントと一緒に写ってる辺り、恐らくいつも一緒にいた人だろうな。そういえばロツサ。確か以前に、昔も空を飛び回っていたと言っただけだったか？」

ロツサはうなずいた。琉はペンダントの写真を見つつ、少し考えるとロツサに言った。

「彼と一緒に、飛び回った覚えはないかい？」

「ごめん、思い出せない……。覚えてるのはただ、彼に手を引かれ

て街を出たくらいで……」

「分かった、もう良い。つらい記憶を蒸し返してすまなかった。…作業を、続けようか」

二人は作業を再開した。モノを磨きつつ、琉は考えていた。

（この男が何者か、また新しく謎が増えたな……。しかしここでの戦に巻きこまれたのなら、やはりここで“目”を失ったと考えて差し支えないだろうな……。ん？）

琉はふと、ペンダントの裏側に文字が入ってることに気が付いた。そのうちの一行に、琉は見覚えがあったのだ。しかしここはエリアδ、使用されている文字は違うはずである。何故なら、海底遺跡のエリア区分は文字の種類によって分けられているからである。

琉は携帯電話を取り出すと、以前に登録した古代文字の表を出した。琉は解読した古代文字を携帯電話にも移し、見やすくしているのである。

「たしかここに……。あつた。下の方だな……。『ロッサ・ヴァリアブル』……。！？」

何という偶然か。何とペンダントに刻まれた文字はエリアβのモノだったのである。だとすればロッサの出身はエリアβ、場合によってはこの男の出身もエリアβの可能性が考えられるのである。

「翻訳機にかけてみるか。ロッサ、ちよつと席を外すぜ」

琉は部屋から出ると操舵室からPCを持って現れ、部屋にある装置に繋いで起動した。ペンダントを装置にかけ、琉のPCにはある

文字が浮かび上がる。

「ねえねえ琉、それなあに？」

ロツサが気付き、PCを見に来た。

「これ？ 文字の翻訳機さ。こいつを使えば俺に分かる文字で出て来るんだ。何せ、ちよっとペンダントの文字に見覚えがあつてさ……」

そう言つて琉はPCの画面を見た。だが……

『ロツサ・ヴァリアブル』

画面にはロツサの名前だけが映っていた。肝心な男の名前までは出ることが出来ず、琉はがっくりと肩を落としていた。

「やはり、そう単純な話なワケないよなあ……」

「ちよつと見せて」

そう言われ、琉はロツサにペンダントを渡した。ロツサの燃えるように赤い目が、ペンダントの文字をじつと見据えている。

「分かるかい？」

琉はロツサに聞いた。するとロツサはペンダントの文字を指差し、琉に見せながら言つた。

「『愛する者とともに。リベール・ドラゴニアとロツサ・ヴァリア

ブルって書いてある」

『古より愛をこめて』 破（後書き）

ロツサのまつわるモノを発見！ そしてこの男の正体は？

『古より愛をこめて』 急（前書き）

拾い集めた宝。その中であつたペンダント。その中にはロツサと、
もう一人謎の男が写っていた……。

『古より愛をこめて』 急

まさかの展開に驚愕する琉。しかし同時にあることを思い出した。彼女の能力の一つ、あらゆる言語を読みとる力である。ロツサは復活してすぐにも関わらず今の時代の書物を読むことが出来た。ましてや自分のいた時代の古代文字が読めないはずがない。

「すると男の名はリベール……。一体何者だったんだ？」

リベール・ドラゴニア。このペンダントの写真から見る限り、短髪で童顔の琉とは対照的に、髪がボサボサと長く無精髭を生やしたむさ苦しい男である。ロツサの話では、彼女のドレスと似たような服を着ていたらしい。

「そいつは恐らくこの辺の民族衣装だぜ。何せ暑いからな」

二人はこの後も作業を続けた。モノを拾い、ひたすら磨いて当時の姿に出来るだけ戻す。作業開始からトータルして約3時間が経ち、結局ロツサの記憶のヒントとなったのは先程のペンダントだけであった。

「明日、もう一回δに行こう。ある程度思い出した所で見に行けば何か分かるかもしれないな。……ところでペンダント、ボロボロだね。せっかくだし、修理してもらうかい？」

琉の提案で、ロツサはペンダントを修理してもらうこととなった。早速二人は船を降りると、アードラーを呼び出して街に向かった。発掘した宝石を売り払い、大金に代えると琉達はあの裏通りに走って行った。

「こいつの修理ねえ。分かった、早速やつくよお。どうせなら見て行くう？」

アルはペンダントを受け取ると、早速その手と目で意識を集中させた。これはダイヤモンドの技術で、モノに含まれる鉱物の成分を調べるといふ技術である。本人いわく、「舐めたらもつと手っ取り早い」そうだが。

「ふむ、分かったよ。じゃあ早速やってみようか。ゲオちゃん、鎖の方お願いーい」

アルの手によりペンダントの鍔が落とされ、更に輝きを増してゆく。そしてゲオがボロボロになった鎖を外して装置に入れ、流体化するとアルの書いたメモ書きを元に原料を注ぎ込んだ。スイッチを起動すると鎖の型の中に金属は注がれ、瞬く間に固まってゆく。遂にペンダントは新品同様の姿に生まれ変わったのであった。

「はい、これで完成！ ロッサちゃん、早速着けてみなよ」

ゲオに渡され、ロッサはペンダントを首に着けた。銀のペンダントが、彼女の美しい胸元を演出している。

「うーん、もう少し筋肉があればなあ……」

「ペンダントはやっぱりハガネのような胸板に合うよねえ」

「いやいや、このままの方が良いッ！」

種族の価値観の違いは置いておくとして、話はロッサのこととな

った。

「オイラ達にも一回詳しく聞かせてはくれないかい？ 力になりたいからさあ」

「こないだは酒が回ってたせいかよく覚えてない。たのむよ」

アルとゲオの二人に頼まれ、琉とロツサは話すことにした。

「まず今分かっていることなんだが、彼女は元々エリアβの出身らしいとのことだ。それが何らかの理由でエリアδにいた。そして彼女には、いつも一緒に行動していたと思われる男……ロツサ、ペンダント貸してくれ」

琉はロツサにペンダントを借りると携帯電話で挟まれた写真を撮り、確認できるとロツサに返した。

「この男、名前はリベール・ドラゴニアって言っらしいな」

アルとゲオはまじまじと携帯電話を覗き込んだ。

「琉ちゃん、何で名前が分かったのぉ？ るってまだ解読終わってないよー！」

「わたしが読んだ。字が書いてあれば分かるから」

ぽかんとする二人。琉はそつと補足した。

「二人とも、彼女は“文字”さえ書いてあれば表面上の意味を読みとることが出来るんだ。だから今の字でもきっちり読めたりする」

「琉ちゃん、それ凄いいことだぞ。彼女さえいれば、ロステク全部復活出来るじゃねえか!!」

ゲオが目を輝かせて話に食いついた。しかし琉は首を横に振る。

「よく考えるゲオ。どうやってその解読が合つてると証明するんだい？ 具体的な解読方法を示さないと認めてもらえないぜ。……ただ、ヒントにはなるな。さて続きだ。彼女はそのエリアδであの大戦争に巻きこまれた。そしてその際に、“第三の目”を失ったと考えられる」

「攻撃を受けた、ということかぁ。すると相当弱ってたと考えて良いねえ」

「そしてその後脱出して、何処へ向かったのかということか。恐らく、エリアβに直行した可能性が高いな……」

琉の調べた結果に、アルとゲオの推測が答える。一方ロッサはペンドアントの奥にいるリベールの顔を見つめていた。

（リベール……一体誰なの？ どうしてわたしと一緒にいたの？ 教えて、教えてよりベール……）

しかしいくら問うてもリベールは答えない。彼は三千年も前の人間、すでにこの世にはいないのだ。

「ねえ琉ちゃん、例の“使命”って一体誰が言っただろうねえ？ 少なくとも“目”を失う前だよねえ。でも何でわざわざ……」

アルが琉に聞いた。ロツサには、“母になる”という使命がある。しかし誰が言ったのかは定かではないし、そもそも繁殖そのものをわざわざ“使命”とするのはおかしいだろう、アルはそう考えたのである。

「そこは流石に分からん。そのためには彼女の種族、“ヴァリアブル” 自体を調べる必要があるからな……」

謎が謎呼ぶロツサの過去。本人すらも計り知れないこの謎を解き明かすのは容易なことではない。しかし解き明かさねば、彼女は使命を果たせなくなる可能性がある。

「これは俺の推測なのだが……ひょっとしたら彼女の他にもう一人ヴァリアブルがいる可能性があるんじゃないかと思うんだ。それも“男”のだ」

「男のヴァリアブル？」

アルとゲオは同時に声を発した。

「そうだ。つまり彼女は生き残り、もう一人男の生き残りがいてこちらが“父になれ”という使命を帯びている、とすれば……」

「それ何か昨日言った気がするよお、何となくだけど……。しかし普通に考えればそれしか思いつかないねえ」

「琉ちゃん、しばらくは棺桶探しだな。しかし何かヒントはないものか……」

男三人は黙り込んだ。必死に思い出そうとするロツサだが、これ

以上の記憶が出てこない。ペンダントを握ったまま考えるロツサに、琉が話しかけた。

「ロツサ、明日もう一度エリアδに行こう。そんでカレッタ号でじっくりと全体を回ってみようか。また何か、思い出すかもしれないアル、ゲオ、今日は有難う。今日はもうこれで失礼するよ。また明日、調査が終わったらここに来るから」

琉はそう言うと、工房を出てアードラーに跨った。

「気を付けてねえ〜！」

「こつちも何か分かったら連絡するぜ！」

工房で手を振る二人。ゴツい見た目でも気さくな性格である。アードラーで風を受けつつ、琉はロツサに言った。

「そう気を落とすなって。じっくりとな、じっくり」

ものの数分で二人はカレッタ号にたどり着いた。

「よし、チェインジ・マリナーアードラー！ ……さて、明日は7時出発だが……」

琉はアードラーを船底に戻すと甲板から階段を展開させ、ロツサと一緒に昇りつつ言った。しかしロツサの顔はシリアスな面持ちのままである。

「……ロツサ、難しい顔はよせ。どうにも思い出せないのを無理に思いだそうとしてもくたびれるだけだぜ。……さあ、飯だ飯だ〜！」

「……うん、そうだよ。飯だ飯だ！」

ロツサの顔に笑顔が戻る。難しいことはまた明日、今日はひとまず腹ごしらえ。そう考えて、二人は階段を駆け上がって行ったのであった。

『古より愛をこめて』 急（後書き）

謎の男リーベル。彼は何故ロッサと一緒にいたのか。謎が謎呼ぶ物語、第五章にご期待下さい。

次回予告

「くっ、何だこいつらは!？」

「嘘……誰も乗ってない!？」

『史実は見えるか』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

海底遺跡で発見された謎の美女、ロツサ。彼女を発見した男、琉。二人は手掛かりを求めてエリアδに挑んだ。途中でハルム（化けモノの意）に襲われながらも発掘に成功した琉。そしてその宝の中にあつたペンダントの中に、ロツサにかかわる重要な秘密が含まれていた。果たして画像の男、“リベール”とは何者なのだろうか！？

『史実は見えるか』 序

「ふむ、それほどまでにあの男が憎いか」

薄暗い部屋の中、フードの付いたローブを羽織った男が一人の女に話しかける。

「はい。奴は、あの彩田琉之助という男は悪魔に魂を売り、私の父を社会的に葬りました。何故あの男が無罪で父が牢獄に入れられるのか、私には理解できぬのです」

アヤメと呼ばれた女は淡々と、かつ激しい怒りを込めた口調で答えた。

「そうか。ところでコイツを見てほしい」

男はモニターを指差して言った。モニターには港の風景が映し出される。大きな船が停まっており、そこに丁度バイクに跨った男女が現れた。バイクから降りると

男はヘルメットを外して座席に仕舞い、女はヘルメットがほぐれて見る見るうちに髪に変わっていった。その顔を見た瞬間、アヤメは目を見開いて思わず声が出た。

「こいつは……！」

「うむ、奴らの近くに隠しカメラを用意しておいた。これで場所が分かるだろう？更に船には発信機を取り付けてある」

男がそう言う中、モニターの中で琉は棒状のモノを取り出した。

『よし、チェインジ・マリナー・アドラー！ 戻れ！！……よし、
収納完了。ステアオープン！……よし来たぞ、と。……さて、明
日は7時に出発だが……』

琉とロツサは階段を昇って行き、やがてモニターには映らなくな
った。それを見とけると男はアヤメに向かって言った。

「今聞いたな？ 奴らは7時にここを出発する。そこで、ここ
で我々が開発したあの武器を試用したいと考えている。その役割を、
お前に任せようと思うのだがどうだろうか？」

「新たな武器……もしや例の“アレ”ですか？」

「そうだ。その使用权をお前に与えよう。船も用意した。今日は明
日に備えて休むが良い……。では、メンシエの神の名のもとに」

「メンシエの神の、名のもとに」

アヤメは一礼すると部屋から出て行った。

「出て行ったか。よし入れ」

男はまた別の人物を呼んだ。するとアヤメが出た扉とは別の扉か
ら数人の男が現れて一礼した。

「例の武器はあの娘に任せることにした。そなた達はその間に“聖
戦”の準備を済ませておくように。決行は明日の夕方だ、良いな？」

「ハッ！ メンシエの神の、名のもとに！！」

男達は部屋から出て行った。

「もうすぐだ、待っておれ。囚われの同志達よ……！ メンシエの神の、名のもとに」

（翌朝）

「ロッサ、今日は早起きだな」

操舵室。琉がモーニングコールを掛ける前に、ロッサは起床していた。

「まあ、早起きなのは良いことだ。早速飯にしよう」

食堂で、早速琉の料理が振舞われる。卵を割って解き、その中にスライスした野菜と缶詰の肉を混ぜて焼く。味付けは缶詰の塩だけで十分だ。たちまち琉特性のオープンオムレツが出来上がる。

「今日の作業は早く終わる。だから帰港したらちよつと食料品の買い出しに出ようと思っている。工房に行くのはその後だ」

琉は朝食を取りつつロッサに予定を話した。

「骨付き肉を多めに買おうか。ロッサ好きだろ？」

「え、良いの！？」

ロッサの赤い目が輝きだした。骨付き肉はもはや彼女の好物で

ある。

「ああ。料理人として、自分の料理が旨いと言われるのは至高の喜びだからね。そういえばあの時のメンバー、元気にしてるかな……」

「あの時のメンバー？」

「ああ、以前話さなかったっけ？ 俺は他の船でコックをしていたことがあったんだ。……要するに料理人さ」

琉は語った。彼は一度カレッタ号を大破させたことがあり、修理してる間他の船に乗っていたことがある。

「パントーダに派手に溶かされちまってね。だから今でもあのハルムは勘弁だぜ」

仕事先を探す琉に、ある声がかかった。かつてラング装者の訓練を共に受けた同級生に、うちの船で働かないかと声がかかったのだ。

「しかしその船、ラング装者枠はすでに埋まっていたんだ。だから何で呼んだか聞いたら『コックやってくれ』だと。確かに俺は訓練時代からちよくちよく料理作ってたけどさ……」

半ば不満を覚えながらも、仕事を受けた琉。しかし琉の料理はその船の中でも好評で、琉はすっかり機嫌が直ってしまったのである。同時に、彼は自分の料理を誰かに振舞うという喜びに目覚めたのであった。

「まあ、父子家庭だったからね。小さいころから料理は自分で作ることが多かったからなあ。でも本格的に金貰って振舞ったのはこれ

が初めてだったね。だから色々作って出したよ。……まあ、たまに失敗することもあったけどね」

一応、琉は調理師免許を持っている。元々料理が趣味だった彼だが、なんとなく受けたらあっさり通ってしまったのだ。しかし人に本格的に振舞ったのはこの時が初めてだったという。

「自分で言うのも何だけど、人の舌を意識したら以前より味が良くなったよ。……

まあ、それをしばらくの間自分一人で食べていたんだけどね」

そして琉がカレッタ号に戻って五カ月後、彼はロッサと運命的な出会いを果たしたのである。

「やつぱ、船員がいるって良いことだよなあ。正直な話、あの後しばらく一人で船に乗ってるのが辛かったんだよ。そんな時に……まあ良い」

琉にとってロッサは、一人で寂しい所に舞い降りた天使のような存在でもある。しかし彼には、このセリフの続きは流石に照れ臭すぎて言えなかった。

「琉、どうしたの？　なんか、赤くなってるよ？」

「気にすんな！　さてさて、食い終わったら準備だ。……思えばあれから料理に対するこだわりが大きくなったんだよなあ……」

若干早口になりつつも過去を回想する琉。食器を片づけ、上着の裾をビシッと決め直し、二人は操舵室に向かった。

「昨日何度か話したが、今日はエリアδを見て回る。ついに取りこぼしたモノをアームで回収する予定だ。それじゃあ……出航!」

港を出るカレッタ号。亀の甲羅を模した柄の旗を屋根に掲げ、青い海面を切り裂いて、白波の軌跡を描いて船が行く。その姿を、港から見ている者がいた。

「あれがカレッタ号、あの船に奴らが……。ふふ、二度と浮き上がれないようにしてあげる……!」

彼女は船に乗り込むと、すぐさまカレッタ号の後を追ったのであった。

『史実は見えるか』 序（後書き）

実習も試験も終わり、肩慣らしも済んだので久々に投稿致しました。
またボチボチと投稿していきますのでよろしくです。

『史実は見えるか』 破（前書き）

ロツサの記憶のため、再びエリアδに挑む琉。しかし二人を待っていたのは思いもよらぬ展開であった。

『史実は見えるか』 破

ダイブモードに変形し、海中を進むカレッタ号。徐々に群青に染まりゆく光景に、眩いサーチライトの光が刺し込んでゆく。やがて光は、数々の“塔”がそびえ立つエリアの独特の風景を映し出した。所々、塔や地面に空いたクレーターが、3000年前の大戦争の激しさを物語っている。ロツサは、ペンダントに写った男——リベールの顔を見ながらの景色を眺めた。

「あの道を、わたしとリベールは一緒に走って、そして……」

ロツサはそう言いながらの端を見た。

「あの崩れた所……あそこに船があって一緒に逃げた……」

「あの道、ねえ……。ちょっと、俺にも見せてくれないか」

舵を握ったまま、琉はロツサと一緒にあって窓の外を眺めていた。琉はロツサにペンダントを見せてもらいつつ、当時の光景を想像していた。女の手を引き、海を目指して走る男。男に手を引かれ、炎から逃れて走る女。今の推測では、このエリアという所は元々大きな街だったと考えられている。戦場と化した街。奪われた日常。迫りくる炎。琉の脳裏に浮かんだのはあまりにも悲惨な光景であった。

「ちょっと、あちこち回ってみるぜ。ついでに……」

琉は、ある大きく崩れた塔を見て言った。

「回収、するかな。ガレキはどかしておかないとね、クラストアーム！」

クラストアームを展開し、ガレキを取り除く。この塔は前日の戦いで大きく崩れた塔であり、まだ若干の宝が残っていた。琉の記憶では、この中に棺が混じっているはずである。

「たしかこの辺に……あつた」

琉はそれらしきモノを見つけると、クラストアームでカレッタ号の船内に取り込んだ。他にも石像等の宝を見つけ、漏れなく回収して行った。これでまたしばらく食っていける。

「ロツサ、遺跡の中を見て回ろう。アンカー・シュート！」

琉は碇を打つと、ラング装置の部屋に向かった。

「ロツサは水の中でも平気みたいだけど、俺はこれがないと息が、ね。ラングアーマー・セットアップ！」

ラングアーマーを装着し、飛び込む琉。そして海中からロツサの手を引き、水中へとエスコートした。アードラーを呼び、二人はその背中に乗って海底へと向かってゆく。塔の隙間に出来た碁盤状の道を、縫うように進む琉とロツサ。サーチライトに照らされた遺跡の光景。道に出来たクレーターや塔に空いた穴が、かつての戦争の激しさを物語っている。

「そう、この道。この道を、ずっと向こうの方に走ったんだ！」

「この道かい？ よし、たどって行こう」

カレッタ号の明かりから離れた個所を、ロツサが指差した。そこに向って、アードラーのサーチライトが照らし始める。

「ここに船があつて、そこから海に出て……ごめん、あとは思いだせない……」

「……そうか。しかしここから比較的近いのはエリアβだ。今度行ってみることにしよう」

来た道に戻る二人。遺跡の外れから、再び塔の建ち並ぶ遺跡へと戻って行く。街を歩くのと同じように、二人は海底スレスレをアードラーで進む。

「……そうだ、あの辺にいつも行つた食べ物のお店があつて、この辺でいつも散歩してて……。あ、あそこだ！」

「うん？ あの辺がどうしたんだ？」

「わたしがリベールと住んでた家……あの塔の中にあつたと思う」

ロツサの記憶が戻つてゆく。ここでリベールと暮らした思い出。例えわずかな記憶でも、琉にとっては重要な手掛かりとなる。ましてやかつての家となれば、琉にとってはこれ以上ないキーアイテムが見つかるだろう。琉はアードラーの先端を塔に向け、真っ直ぐにその部屋に向かった。

「ここかい？」

「その右……そうそこ！」

琉はアードラーを穴の入口に停めると、ロツサと共に入り込んだ。パルトネールの先端から光を出し、中を搜索し始める琉。

（まさかこんなことまで思い出してくれるとはな……これでまた一歩、彼女の史実に近づいたか。さあて、俺に史実は見えるかな、と）

琉とロツサは家にあるモノを片っぱしから拾い集めてはアードラーに積んで行った。部屋の壁には攻撃によって空いた大きな穴があり、持ち帰れるモノは少なかったが、それでも大きな進展につながるのは間違いないだろう。一通り積み終わると、琉はロツサに言った。

「よし、カレッタ号に戻って一個ずつ確かめるとしようか……うわっ!？」

突然塔に走った衝撃。思わずよろける琉とロツサ。塔の天井が音を立てて崩れ始めた。琉はロツサを抱えるとすぐにアードラーにしがみ付き、夢中になって塔の穴から飛び出した。そして、ある違和感が付いたのである。

「馬鹿な、パルトネールが反応してないだろ!？」

「琉、見て!」

ロツサの指差す方向から、大量の影がこちらに向かって来る。たちまち二人のいる塔の周りを、向かってきたモノが取り囲んだ。直径約2m、厚さ50cmほどの円盤状の物体。中心は盛り上がっており、その先端から砲台が伸びている。先程の衝撃はどうやらこの攻撃だったようである。

「驚いた、小型艇だったとはな。最近の海賊はこんな狭苦しい船に乗ってるんか」

琉がパルトネールを構えて言い放った。ロツサは第三の目を開き、小型艇を睨んでいる。この世界の海賊は小型艇に乗り、機動性を活かして集団で襲いかかってくることで知られている。しかしロツサの口から、思わぬ事実が告げられた。

「嘘……誰も乗ってない！？ 琉、この船自分で勝手に動いてる！」

「何だと！？ んな馬鹿な、ラジコン操作ってワケかい？ 確かに、ヒトが乗るにはちよつと小さすぎるとは思ってたんだが……」

そんな二人のおしゃべりに聞く耳持たず、無人の小型艇は二人に照準を合わせると容赦なくぶっ放してきた。すぐさまアードラーに乗ってかわす二人。

「無人ならこちらも容赦はいらないな。パルトネール・チェイン！」

パルトネールの先端から分銅が現れる。一方でロツサの手が赤黒い狩りの腕に変貌する。琉は一つの小型艇目がけて分銅を発射した。中心部を貫かれ、たちまち動きが鈍る小型艇。

「パルトショック！」

鎖から伝わる電流で、小型艇は爆破された。そのまま琉は分銅を振り回し、小型艇を引っ掛けると別の小型艇にぶつけて大破させた。一方のロツサも、指を突き伸ばして小型艇を捉え、指が発光した途端に小型艇が海中にも関わらず炎上した。

小型艇の砲台から放たれる光線をかわし、一つ、また一つ小型艇が落としてゆく。砲撃では駄目だと操り手が思ったのか、小型艇は側面からノコギリのような刃を出し、回転しながら向かってきた。

「しつこいな、心中は御免だぜ。ロツサ、しっかり掴まってるよ……
…アードラー・バックステイング！」

アードラーのトゲから放たれる針のような光線が無数に放たれ、小型艇に刺さっては爆破してゆく。戦闘開始からわずか五分で、辺りの小型艇は全滅した。

「よし。海賊やつけたし、さっさと帰るか」

「……！？ 琉、気を付けて！ まだいる……！」

「何イツ！？」

『史実は見えるか』 破（後書き）

謎の敵、あらわる！ 因みにモチーフは珪藻ですw デザインは実習中に思いつきました。

『史実は見えるか』 急（前書き）

記憶を戻すべく、水中で探索を開始した琉とロツサ。しかし二人のランデブーを邪魔するモノが現れて……。

『史実は見えるか』 急

ロツサに言われ、琉が向いた先には更に多くの小型艇が向かってきていた。先程襲いかかって来たモノと違い、こちらは直径が約5m、厚さが約80cmと大きく、表面には砲台等が見当たらない。しかしある程度こちらに近づいた途端、小型艇は上下にガバツと開き、砲台を伸ばすとそのまま琉達目がけて発射してきた！

「うわ！？ 俺こんなラムネ菓子食いたくねえよ！ ロツサ、ヒンギレー（逃げる）！」

まとも相手してかなう相手ではない。琉はロツサを強く抱えたと、アードラーに掴まりスピードを一気に上げた。

「どうするの……？」

不安に駆られたロツサが琉の顔を見る。マスクのレンズ越しに写る琉の目は険しく、真っ直ぐにカレッタ号を見つめている。

「このままではラチが明かない。ひとまずここから去る必要がありそうだ。全く、タチの悪い海賊だぜ……。しかし今の様子を見る限り、今度のも無人のようだな」

小型艇は容赦なく針のような光線を琉達に浴びせて来る。光線の間を、縫うように進むアードラー。琉はチラリと後ろを向くと、パルトネールを取り出して引き延ばし、

「パルトブーメラン！！」

音声コードを入力すると回転させて投げつけた。そして更に、

「オセルスフラッシュュ!!」

額のオセルスレーダーから放たれた赤い光線が、投げられたパルトネールに命中する。オセルスフラッシュュを浴びたパルトネールは、その身に真つ赤な光を宿すと更に勢いよく回転し、先程までとは段違いのスピードで小型艇の群れに突っ込んでゆく。赤い軌道を描き、パルトネールは小型艇を次々に貫いていった。たちまちあちこちで爆発音が響く。小型艇の頭数が減ることにより、琉達に注がれる光線の数もそれに比例した。その隙に琉達は真つ直ぐにカレッタ号のハッチに急いだのである。

「ロツサ、先に入って!! ……お、来たか!」

パルトネールが戻って来た。既に光は宿しておらず、元の黒い棒状の道具に戻っている。琉はパルトネールを手にとつと、自らもカレッタ号に入り込んだ。ラングアーマーを解除し、ウェットスーツのまま操舵室に走る琉。

「琉、見て! さっきの小型艇が……!!」

舵を握り、ロツサの指差す方向を見る琉。操舵室の窓から見えたモノ、それは、

「くつ、何だこいつらは!? ラムネ菓子のパック詰めか!？」

なんと先程の小型艇が結集し、次々に合体しているではないか! 合体した小型艇は細長い棒状になり、長さは約16mとかなり大きくなっている。どこから湧いたのかアンテナ状の突起を生やして

おり、その姿はどことなく異様なモノであつた。

「なるほど、こちらに対抗して大きくなったということか……うわっ！？」

合体した直後、相手の突起から放たれた光線がカレッタ号に降りかかった！ 強い衝撃が中の二人を襲う。

「きゃあっ！？」

「おわっ！ 大丈夫かロツサ……ん！？」

よるめいた拍子に、琉の口にはほのかな甘みがひろがった。そう、ロツサの赤い唇が琉の口に触れたのである。が、相手は空気を読まずにぶっ放してきた。琉はすぐに正氣に戻ると口をぬぐい、舵を握った。

「アタビチグワ（この野郎）、俺のファーストキッスを達成させていて邪魔するのつもりかよ！？」

琉は窓越しにタン力を切ると碇を引き上げ、カレッタ号を旋回させた。

「なるべく早く脱出したいが、コイツを片づけないと厄介だな。ツインレーザー！」

カレッタ号の両端からそれぞれ小さな砲台が顔を出す。操舵室の窓に、二つのロックオンマークが表示された。琉はマークを重ねて相手の一点に照準を合わせると、レバーに付いたスイッチを握り、押した。たちまち細いレーザー光線を発射され、相手の突起の

生えた個所に突き刺さって爆発が起きた。

「シールド展開！ カレッタ・アームドラッシュュ！！…… ロッサ、しっかりと掴まっててくれ。ちょっと荒けないことするから」

特殊なシールドに覆われ、青く発光するカレッタ号。琉はレバーを握り直すと、一気に手前に倒した。

「うおおおおおおおおお！！」

琉の雄叫びと共に突進するカレッタ号。中心部をやられた合体小型艇は爆発し、海の底へと沈んで行った。その中から一つ、無傷で沈みゆく小型艇を琉は見つけた。

「クラストアーム！」

琉は素早く小型艇を拾い上げ、回収した。

「琉、今なら逃げられる！」

「よし、分かった！……へっ、やっと諦めてくれたか……」

琉は安堵の言葉を口にすると、そのまま浮上して港に戻って行ったのであった。

「で、これが話にあったモノさ」

港に戻った琉とロッサ。琉はアルとゲオの二人を呼び、回収した小型艇を見せていた。

「これはかなり精巧だよ。しかし人が乗れる場所がないねえ」

「無人で動く船か……。一体何処で作られたモノなんだ？　ちょっと失礼するぜ」

無線装置は撃沈した際に壊れてしまったらしく、小型艇はピクリとも動かない。ゲオが外のパーツをいくつか外すと小型艇は水中でみたように上下に開き、アンテナ状の砲台が4つ外に張り出してきた。

「うゝむ、こいつ装甲こそ薄いがこの光線砲はかなりのモノだ。相手は並みの海賊ではないだろう。……ん？　何だ、このマークは」

ゲオに指摘され、琉達は装甲の内側に書かれているマークを見た。稲妻が十字を切るように書かれ、その中心にヒトをあしらったモノである。これを見た瞬間、琉とロッサの脳に電流が走った。

「これ、メンシエ教の！」

「確かに、間違いなくメンシエ教のマークだ！　やっぱり、唯の海賊ではなかったのか……」

「だとしたら琉ちゃん、しばらくエリアδに行っちゃ駄目だよ。明日の朝にはもう、ハイドロまで帰った方が良いかも。ロッサちゃん、せっかくだから今の時代のことを色々勉強したらどうかね」

アルが琉とロッサに忠告した。確かにこのままここには危険すぎる。ロッサのためにも、ここは一旦ハイドロ島に帰還して大人しくした方が良いだろう。

「……分かった、そうしよう。ロツサ、しばらく探索はやめだ。ハイドロに帰って、しばらくは道場の手伝いでもしようかな……」

船の階段を昇る琉とロツサ。予想外に早くなった帰郷。たまにはのんびりするの悪くはないかな、と思う琉なのであった。

「……ふむ、撃沈されたか」

「申し訳御座いません！ 今度こそ、ヤツを……！」

琉達が港に着いた頃。薄暗い部屋の中で男はモニター越しに話をしていた。モニターの向こうには女性が映っている。

「いや、こちらから見る限り実験は成功だ。あとは改良を加えるのみだが、それでも我々メンシェ教の勢力を広げるには申し分ない。早う戻ってくるが良い」

そう言つて、男は画面を切った。そしてローブの袖をめくり、腕時計を見ながら呟いた。

「間もなく時は訪れる。我らが同志を捕え、虐げた者たちよ。メンシェの神の名のもとに天誅を与えてくれようぞ……！」

『史実は見えるか』 急（後書き）

このところ忙しいです。毎度のことながら不定期連載ですが、応援よろしく願います！

では、次回予告です。

「思っていたよりデカかったんだな……」

「わたしの居場所は……どこにあるの？」

『琉さん事件です』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

ロツサの記憶を戻すべく、アルカリア領にあるソディア島に向かった琉。そこで発掘したペンダントから、ロツサといつも一緒にいた人物、リベールの存在が明らかになる。そこで琉はロツサの水中での能力に着目し、彼女の記憶を確かに蘇らせるためにもう一度エリアδに向かつて二人で探索して回ることにした。しかしその途中で謎の無人小型艇に襲われ、更にその小型艇はメンシエ教の差し金であつたことが判明した……。

『琉さん事件です』 序

カレッタ号船内・船長室。明かりの中、カレッタ号のキャプテン・琉は一人PCに向かって航海日誌を付けていた。

『……まさかメンシエ教があのような武器を持ち合わせていたとは。もはや海の中も安全ではない。ロッサのためにも、明日は一旦ハイドロへ帰るとしよう』

『……例の小型艇は警察に引き渡すことにした。この島のメンシエ勢力が沈静化したら、私は再びソディアの地に足を踏み入れることとする』

一通り書き終わると、琉はシャワー室に向かった。壁の向こうからも水音がする。どうやら、ロッサもシャワーを浴びてるらしい。

「ロッサ……ハッ!? イカンイカン、何考えてるんだ俺は」

琉とて男である。壁の向こうで、グラマラスな美女がシャワー中と分かれば特定のモノを想像するのはもはや当然といっても良いだろう。

（やっぱり慣れて来たんだな、俺……。ちょっと前なら鼻血出して卒倒だぜ）

自らもシャワーを浴びつつ、琉は思っていた。彼の暮らしていたハイドロ島には田舎で同年代の女の子がおらず、18歳で入ったラング基地も男ばかりであった。女性と言ったら色気も減ったくれないオバサンばかり。同年代の、若い女性と喋る機会はほとんどな

く、あつたらあつたで緊張して何も喋れなかったのである。

「あれ、琉も水を飲みに来たの？」

「ふえ？ あ、いや、その、シャワーを浴びに来たんだ」

壁の向こうから不意に、ロツサの声がした。驚いた琉はありのまま、自分の本来の目的を壁に向かって言った。直後、琉はある事実に気が付いた。

「ちよい待て。ロツサ、まさかシャワーから水を飲んだのか？」

「うん、温かくて飲みやすいよ。水もたっぷり出るし」

説明せねばなるまい。ロツサはシャワーで浴びることで死んだ細胞を洗い流す他に、放たれた水を全身で“飲んで”いたのだ。いや、むしろ水を飲むことが彼女にとってシャワーを浴びる一番の目的とも言えるだろう。

「……まあ、良いか。実際、いつもキレイにしてるみたいだし。腹壊すなよ？」

シャワーから上がり、琉は近くにかかっていたふんどしを締めると、上から青い浴衣を軽く羽織った。彼のリラックスする時の部屋着はいつもこれである。サッシュを帯代わりに締めると、そのまま布団に横たわる。枕元にあった携帯電話を取ると、琉はおもむろにある番号を打ちこんだ。

「ハイサイ（よお）！ 琉、どうしたんだ急に！？」

「ハイサイ、カズ。達者にしてたか？ いきなりだが明日アルカリアを出ることとなった。3日後にはハイドロに着くと思うぜ」

琉が電話をかけたのは、ハイドロに住んでいる和雅であった。

「メンシエ教の奴ら、ついに海にまで追ってきやがってな。それで、メンシエ取り締まりがきっちりしている所で一旦身を潜めよう、と思っただ」

「そうか……。そういや、ロッサ様は元気かい？」

「ああ、元気だ。今隣の部屋でシャワー浴びてるぜ」

この後和雅が興奮し、暴走した拳句に鼻血を出して卒倒したのは言うまでもない。琉は久々の帰郷を楽しみにしつつ、目を閉じたのであった。

翌朝。突如琉の携帯が、いつものアラームとは違うけたたましい音を立てた。真っ白な布団から、浅黒い腕が携帯に伸びる。眠い目をこすりつつ、琉は携帯の液晶画面を見た。

「ああん？ 臨時ニュース受信？ こんな時間に？ おいおい俺はまだしも、一般家庭だったらまだ寝ている時間だぞ……。まあ良いや、何々……！？」

ニュースを見た琉の目が一気に覚める。同時に引いてゆく琉の血の気。携帯の画面にあったモノ、それは……

『監獄襲撃！ オルガネシア刑務所崩壊！ 屋根にメンシエフラッグ！』

衝撃的な見出しとともに凄惨な映像がそこには映し出されていた。絶海の孤島、ガレキの山と化した刑務所、その屋根に立てられた旗、そこにデカデカと描かれたメンシエマーク。記事にはさらにこう書かれていた。

『オルガネシア刑務所は。月 日未明に何者かの襲撃を受けた。刑務所には火が放たれ、看守や一部の囚人のうち約40人が死亡、約30人が行方不明となっている。屋根にはメンシエ教のマークを記した旗が立てられており、警察当局は指定テロリスト集団“メンシエ教”の仕業ではないかとして捜査を続けている……』

携帯の画面に齧りつく琉。すると画面が突然変わり、またしても鳴り始めた。電話の着信である。

「ん、カズ？ 早いな……ハイサイ！」

「ハイサイ、琉！？ ニュース見たか！？ ハイドロには来るな、デージナッテル（大変なことになっているぞ）！」

「何、むしろ危険だと！？ カズ、一体どういうことだ！！」

電話をかけて来たのは和雅であった。朝っぱらから緊迫した声である。肌蹴た浴衣を脱ぎ捨て、布団を畳みながら琉は携帯に向かって半ば叫ぶように聞いた。

「良いか琉、落ち着いて聞いてくれ。例の襲撃事件のニュースは見たよな？ ……やっぱ見たか、その時に何人が行方不明が出ただろ？ そいつらにはほぼ共通点があるんだよ……」

「共通点？ 奴らが刑務所を襲うこと自体が俺には不可解だが……」

「簡単な話さ。こっちの情報じゃあ“教団員を取り戻すため”なんだそうだ。実はな、囚人のうちヒト族だけが見事に全員行方不明なんだそうだけ。それだけじゃない、ハイドロ島内でも今朝交番で暴行事件が……」

布団を部屋の隅にやると、琉は携帯を片手に持ったままシャツを着始めた。

「チツ、どこに行っても危険ってワケか。そして脱獄早々御礼参りとは……」

「とにかく、今のオルガネシアは荒れている！ 今帰るのは危険だ、良いね！？」

「分かった……。他にも何か、分かったら連絡してくれ。こっちは何か、対策を考えないと……。マタヤーサイ（またな）！」

琉は携帯を切って机に置いた。ふんどしを締め直し、ズボンを履き、ベストを着こみ、上着を羽織って携帯を内ポケットに仕舞い、サッシュを締めると机に置かれたパルトネールを持ち、結び目に差した。洗面台に向かい、短めの髪を少し整えると琉は部屋を出た。

「全く、故郷に帰っても危険とは、物騒な世の中になったモンだぜ！ ……いかに落ちつかねえ、ちよっと“アレ”をやるかな……」

そう言うなり琉は、操舵室に向かいそのまま甲板に出て行ったのであった。

『琉さん事件です』 序（後書き）

まさかの大事件。琉は帰れなくなってしまいました。さてどうなるか！？

『琉さん事件です』 破（前書き）

衝撃的なニュース。それは、メンシエ教徒による刑務所襲撃であった……。

『琉さん事件です』 破

「ん……。あ、琉に起こされる前に目が覚めた……」

アンニユイな声と共に、布団からのつそりと這い出す赤い影。布団を畳み、手櫛で乱れた髪を直す仕草は何処はかとなない色気を醸し出していた。洗面台の鏡を見る赤い瞳。ロツサは身なりを軽く整えると、扉を開けて部屋を出た。

「あれ、琉は何処？ ……ん？」

操舵室にきたロツサ。しかしそこに琉の姿はない。キョロキョロと周りを見渡すと、舵の上に上着とサツシュがかけてあった。そして半開きになった甲板への扉から、何やら声が聞こえて来る。

「はああああ……。ふんッ！ はあッ！ でやあッ！！」

甲板に出たロツサ。そこには上半身に何も着ず、筋肉質な肉体を外に晒して拳を振るう男の姿があった。腰だめに構えた拳が真っ直ぐに風を切り、時折繰り出す蹴りが宙を切る。何を見据えているのか、大きなその目はメンシエ教徒やハルムと出くわしたときのように鋭くなっていた。

「琉、何と戦ってるの？」

ロツサの声に気付き、琉は構えを解いた。近くに置いてあったシヤツとベスト、パルトネールを手にとると琉はロツサに近づいた。

「おはようロツサ、今日は早いね。今のはちょっとした運動だ、汗

かいたしシャワー浴びてくるぜ」

琉はそういうと、舵にかけてあった上着とサツシュをも腋に抱えて自室に入って行った。ちょっとした後、琉は上着を含めた服一式を着こんで現れた。

「……そうそう、大事なお知らせが一つ。ハイドロには帰れなくなつた」

「帰れない！？ 一体、どういうことなの？」

琉は上着の内ポケットから携帯電話を取り出し、ロツサに見せた。画面を見たロツサの顔には徐々に怯えの色が浮かび、仕舞いには携帯電話を持ったまま硬直した。琉はヒョイと携帯電話を取り上げるとロツサにいった。

「要するに、アイツらが今まで以上に好き放題やり始めたってことだ。こんな調子じゃあ、しばらく帰れないだろうね」

「それじゃ、一体いつになったら帰れるの！？」

「それは……。どうも言えん。ただ分かったのは、ヤツらはただのよそモノ嫌いの田舎者集団ではなく、軍事レベルの兵力と統率力を持った恐ろしいテロ集団だったということだ」

「そんな……。じゃあ、わたしの居場所は……どこにあるの？」

肩を落とす琉とロツサ。今の状況では、何処に行っても危険だろう。

「ロツサ、安心しろ。君の居場所なら俺が作ってやる。だから……とりあえず飯にしようぜ、こういう時こそ腹ごしらえが必要だ」

落ち込んでばかりはいられない。琉はロツサと一緒に食堂に向かった。こういう時こそしっかりと食べねば対応出来ないというのを、琉は誰よりも知っていた。

各種野菜と砂豆で出来た豆腐、缶詰を開けて炒めて卵でとじる。いわゆるチャンプルーと呼ばれる、シンプルな炒め料理である。大体朝はこの料理が多い。しかし飽きがこないよう、琉は毎回入れる具材を少しずつ変えているのであった。

「とりあえず、今日の予定だ。まずアルとゲオ達に連絡し、帰れなくなっただことを伝えよう。……しばらくはあの工房で使ってもらうかな。それから、昨日持ち帰ったモノの整理もしないとな。売れるモノがあつたらすぐさま売りに行つとこうか」

朝食を取りつつ今回の予定を話す琉。ハイドロ島に帰れない上に今海に出るのは危険と、今の琉には仕事がなかった。そこで、アル達の工房でしばらく使ってもらおうという魂胆である。これは、単純に食っていくアテを探す他にメンシエ教から身を隠すという目的も含まれていた。

朝食を終え、早速アル達に電話を掛ける琉。

「……そうだ、あつちでロツサに出来ることは何かあるかな？ ま、いざとなりや俺が教えりや済む話か……っておい、えらく時間かかるなあ？」

番号を入れてはや1分。いつまで経っても出る気配がない。電話は事務所と仕事部屋の二つにある他、職人二人もそれぞれ携帯電話を持つているはずである。

「喋らない、の？」

「相手が電話に出ないと気付かないさ。仕方ない、出かけてるんだろ。アルに直接掛けてみるか。駄目ならゲオに、だな」

番号を打ち直し、琉は再び携帯電話を耳に当てる。

「……さあ、今度は出てくれよ……！？」

ブチッという音が鳴り、電話が途絶えた。それも電話に出ず、一言も喋らずにである。つかさず今度はゲオにも掛ける琉。だが……

「只今、電話に出ることが出来ません。改めておかけ直し下さい」

ここまでくると流石におかしい。琉は携帯電話を懐にしまうと云った。

「何かあったとしか考えられん。こうなりや直接工房に行こう。ロツサ、一人でいるのは危険だから一緒に来なさい、良いね？」

アードラーを呼び出し、バイク形態に変形させて街中に向かう琉とロツサ。すると二人の目には、異様としか言えぬ光景が映ったのであった。

本来なら皆仕事に取り掛かり、街には多くの通行人が出歩く時間帯である。ところが、今の街は午前中とは思えぬほどに静まり返り、外には誰も出歩いてはいない。それどころか話し声すらも聞こえてこないのだ。

「ねえ、琉……。どうして今日は皆いないの？」

「分からん。しかしこの様子じゃあ工房も心配だぜ……」

道行く者は誰もおらず、今の街はただ砂塵と塵気楼が揺らめくだけのもぬけの殻と化していた。殺風景かつ不気味な光景に戦慄する琉。

「琉……震えてるの？」

無意識のうちに震える琉の背。しがみついていたロッサに、それは直に伝わってくる。琉は元々そこまで勇敢な性格ではなく、特にこういった予想外かつ前代未聞の事態には弱い所がある。恐怖心を押し殺し、アクセルを掛ける琉。そして裏通りの入り口に近づいた時だった。

「大人しくしろッ！ 薄汚い亜人種に分際が、我々メンシエに逆らうとは何事だ！！」

「やることが汚いのはそっちの方だ！ こっちこそ、オイラ達の工房を荒すのはやめてもらっようよぉ！」

「生意気な……。やっちまえッ！！」

怒号。フードを被った連中。そして極めつけは……

「今の声は……アル！？ よし、掴まってるよロッサア！！」

ハンドルを握り直し、アードラーのエンジンがうなり声を上げる。一気に加速するアードラー。琉は懷からトリガーパーツを取り出し、ダイレクトにパルトネールに取り付けると、

「パルトネール・シューター、パラライザー！…… ロッサ、飛び降りるぞ！」

赤い閃光がフードの男を一人捉えた。琉はアードラーのハンドルを切り、停車させると同時に飛び降りるとパルトネールを構えた。

「何だ貴様は！？……うがッ！？」

「アル、ゲオ、大丈夫か！？」

突っかかって来たメンシエ教徒を一人気絶させると、琉は工房の中に向かって叫んだ。

「琉ちゃん！？早く逃げないと駄目だよお！メンシエ教が大暴れし始めたんだよお！！」

「うるさい！ここも大人しく、我々に従えば良いモノを……。ん？貴様、彩田琉之助かッ！？」

メンシエ教徒の一人が琉の顔を見るや否や声を張り上げた。

「だったらどうした！？ほれ、アンタ達の大好きな異端者と悪魔が、わざわざ表に出てきてやったぜ！？」

挑発しながらもパラライザーを放つ琉。更に残りの連中を、液化したロッサによる体当たり攻撃が吹き飛ばしてゆく。あらかた片づけた後、琉とロッサは工房の中に掛け込んで行った。

「おい、大丈夫か！？」

「オイラは大丈夫だよお、だけどウチの子が一人……！」

アルの指す方向にトヴェルクの少年が一人倒れており、ゲオが付きつきりで面倒を見ていた。

「琉ちゃん、この子はヤツの銃を一発食らっちゃったんだ……。そのせいか、腕が全く動かねえんだ！」

見ると少年の右肩からは大量の血が流れている。深々と突き刺さる一つの銃弾。それを見たロッサが声を上げた。

「琉、これ……聖弾！？ 早く取らないと……！」

「よし、そうとなれば……」

パルトネールを腰に差し、懷からメスとピンセットを取り出す琉。ロッサとアル、ゲオの見守る中、琉の処置が行われた。

「うぐッ！ ……つつう……」

麻酔などしている場合ではない。弾を取り除かない限り、彼の腕は動かない。

「我慢してくれ、もうすぐだ！ ……よし、取れた！！ アル、ゲオ、消毒液は！？」

弾を摘出した琉。アルが持ってきた救急箱から消毒液を取り出して吹き付けると、すぐさまガーゼを当てて包帯を巻き付けた。

「ありがとうございます……ございます……つつう!？」

それでもまだ、少年の肩には激痛が走る。ゲオは少年を抱えると、奥の部屋へと連れて行った。そこには他の職人達も待機していた。

「皆、しばらくここに身を潜めるんだ。オレはヤツらの所に殴りこみを掛けて来る!！」

ゲオのセリフに驚いた琉。思わず大きな声を出して言った。

「おいゲオ、何を考えてるんだ!？ 今そんな行動を起こしたら……」

「仕方ねえだろ! ……オレと、アルの家族が……」

「家族が? ……まさか!？」

『琉さん事件です』 破（後書き）

急展開を見せる第六章！ 暴走を続けるメンシエ教徒に対し、琉はどう戦い抜くのか！？

『琉さん事件です』 急（前書き）

工房と連絡が付かず、アードラーに跨り急行した琉であつたが……。

『琉さん事件です』 急

「琉が工房に現れる数時間前」

「さて、今日も作業始めるよぉー！ ええとまず、オイラとゲオは……」

工房の朝は早い。この世界での主流産業は遺跡探索。琉のみならずラング装者にとって、彼らを支える道具の存在は非常に重要な存在である。しかしその道具はトライデントやラングアーマーといった特殊なモノばかりで、これを制作出来る技術者は限られてくる。アル達の工房もその一つであった。彼らの工房は毎日これらの道具を開発、製造する他にも修理、改造といった注文が大量に舞い込んでくる。朝から晩まで、交代しつつ休憩しつつ彼らは着実に作業をこなし、完成させる。

「今年の新ラング装者は10人か。彼らに頑張ってもらうためにも、キツチリとカスタマイズしなとな！」

そういつて各々作業場に向かう技術者達。ある者はPCに向かい、ある者は機械を操作し、ある者は完成した部品を組み立てる。こうしてまた、忙しくも清々しい朝が訪れる……はずだった。

ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！

「誰え？ 仕方ないなあ、もう」

インターホンがあるにも関わらず、扉を乱暴に叩く音が工房内に響き渡った。アルはだるそうなセリフと共にモニターを見て、驚愕

した。フードを被った男達が、扉の周りを囲っているのである。

「ハッ、メンシエ教！？ 皆あ、後ろに下がって！ 絶対に開けちゃダメだよぉ！！ ゲオ、ちよつと話を聞いてやって！！」

ダイヤモンドとトヴェルクが働いているこの工房にとって、メンシエ教徒は脅威以外の何モノでもない。アルはその手の甲から鉋物で出来た鉤爪を出し、ゲオは近くに置いてあった自前の武器であるパイルバンカー（杭打ち機）に盾をくっつけて構えつつモニターに向かった。

「はいはい、要件を伺います」

「亜人種ごときが我々に大きな口を利くな。すでに周りは包囲している、助かりたくば大人しく我々の命令に従うのだ。まず、工場長を呼べ」

ゲオはアルに合図すると、アルがモニターの前に立った。

「工場長はオイラだあ。早く要件を言ってくれよぉ！」

「まず我々にこの工房を明け渡せ。そして今作っているモノを全て中止しろ」

あまりにも理不尽な要求。アルとゲオは顔を向き合わせると、再びモニターに向かって言った。

「何故この工房が欲しいんだ？ ついでに何故制作中止にせねばならん！？ そこんとこちゃんと説明してもらおうかッ！！」

「オイラ達の作ったモノを待つてる人がいるんだよお！ それを差し置いてまで、一体何を作れっていうんだあ！？」

剣幕を張る二人。しかし交渉をしていたフードの男は動揺もせずにごういった。

「よろしいならば……連れて来い！」

すると奥から、何人かの男がダイヤモンドとトヴェルクの女性と子供を掴み、引っ張り出してモニターに押し付けた。それを見た瞬間、二人の顔が凍りついた。

「ク、クロエ！？ おい、オイラの家族に何をする気なんだあ！？」

「ヘルガ！？ くそッ、卑怯だぞお前ら！！」

モニター越しに助けを求める二人の家族達。悲痛な表情が、アルとゲオの心に突き刺さる。フッ、と笑いつつ、フードの男はモニターに向かって言った。

「せいぜい吠えるが良い。会いたければ扉を開ける。ま、開けないならこちらからこじ開けるのみだがな！！」

この声の直後である。バンという大きな音と共に扉がこじ開けられ、メンシエ教徒がなだれこんで来た！

「皆、早く奥に逃げて！ ゲオ、いくよ！！」

「オラオラ、妻と子は返してもらっぜ！？」

メンシエ教徒のナイフが二人に襲いかかる。アルの鉤爪が刃を受け、ゲオのシオルダータックルが炸裂した。アルの背後から、また別のメンシエ教徒が斬りかかる。しかし刃は、彼の鱗に当たるなり折れてしまった。

「ひ、ひいッ！ このバケモノめ！！」

「アンタ達はハルムより恐ろしいよお？」

次の瞬間、この男にアルの裏拳が炸裂した。しかし……

「これ以上の抵抗はやめろ。愛しい家族がどうなっても良いのか？」

メンシエ教徒のナイフと銃が、アルとゲオの家族に向けられていた。

「あ、あなた！！」

「お父さん！！」

助けを求める妻に泣き叫ぶ子供達。二人は歯を食い締めて見る他なかった。

「ふん、この二人は生かしておくて厄介だ。やれッ！！」

リーダー格の男が指さすと、銃を持った男達が一斉に工房内目がけて発砲した！

「うわッ！？」

アルはその硬い手で、ゲオは盾ですぐさま弾を防いだ。

「なんてね、そんな銃弾ごときでやられるオイラ達じゃないよお！」

「ほほお。では、後ろの扉はどうなっているかな？」

「何！？」

二人が振り向くと、後ろの扉に銃によって開けられた穴が開いており、しかもそこから肩を押さえた作業員が一人崩れるようにして倒れ込んで来た。右肩を押さえており、押さえる手の指の間から大量の血が流れている。

「しまった！ おい、大丈夫か！？」

ゲオが扉に向かおうとした、その時だった。

「おっと動くな、大人しくしろッ！ おい、女と子供を連れて行け
！！！」

二人の家族が、メンシエ教徒達に引つ張られて姿を消した。

「全く手こずらせおつて……薄汚い亜人種の分際が、我々メンシエに逆らうとは何事だ！！！」

「やることが汚いのはそっちの方だ！ こっちこそ、オイラ達の工房を荒すのはやめてもらっようお！」

「生意気な……。やっちまえッ！！！」

その場のメンシエ教徒が、武器を構えて工房に突入しようとした、まさにその時だった。

ブイイイイン!!

「何だ貴様は!?! ……うがッ!?!」

「アル、ゲオ、大丈夫か!?!」

〽回想終了〽

「ひどい……ひどすぎるよ!」

「すると、二人の家族は一体どこに連れ去られたんだ!?!」

話を聞いた琉とロツサ口々に言った。

「全く見当がつかないよお……。それに、アイツらは何で一体急に暴れるようになったんだあ?」

「さっきニュースで、ヤツらの監獄襲撃が報じられてたんだ。恐らく、これで大量の人材を取り戻したんだろう。ヤツら、ただのよそ者嫌いの田舎者集団だとタカをくくっていたが……思っていたよりデカかったんだな……」

溜息をつく琉とアル。ところがその隣で、ゲオは何やらレーダーを取り出して見ていた。

「ん、ゲオ? そのレーダーは一体どうしたんだあ?」

「アル、さっきヤツらが来た時に、ヘルガ……ウチの家内に小型発信器を投げつけておいたんだ。反応してれば良いのだが……」

まさかの好プレーに驚く琉とアル。ゲオの顔はどことなくドヤ顔をしているようにも見えた。

「おいゲオ、何でそれを早く言わん！　しかし良くやったぜ！」

「だが問題が一つ。ヤツらの向かう場所が……」

ゲオはリーダーの地点を指差した。

「まさかのオアシスだ。そのためには、この街から砂漠地帯を突っ切らねばならない。しかし早く行かないと、何されるか分かったモンじゃねえ……」

「でも、オアシスの周りはハルムの巣窟だよ！　どうやれば……」

このセリフの直後だった。

「何、ハルムの巣窟？　ジュルリ……」

「ロツサ！　……ん、待てよ？」

ロツサのセリフで、琉はあることを思いついた。

「……よし、俺達も行こう」

「ええッ！？」

琉のセリフに驚く二人。しかし琉にはある思惑があった。

「ヤツらの暴走を止めたいのは俺も同じだ。ハルムなら俺とロッサに任せてくれ。さ、早く行かないと何されるか分からんぞ！」

こうして琉、ロッサ、アル、ゲオの4人は、オアシスに向けて砂漠横断を決意するのであった！

『琉さん事件です』 急（後書き）

（次回予告）

「これが……新たな力か!？」

「はああああッ!！」

『砂の地獄を突破せよ』 序（前書き）

～前回までのあらすじ～

手掛かりを求めてアルカリアに来た琉とロツサ。探索で重要な手掛かりを見つけたものの、メンシエ教の無人小型艇の襲撃により断念せざるを得なくなってしまう。そして故郷に帰ろうとした琉に届いたのは恐ろしいニュース。メンシエ教がタダの田舎宗教ではなく、大規模なテロ組織であることが判明したのだ。そしてその魔の手は琉の知人である工房の二人にも襲いかかり、家族を人質に工房の明け渡しを迫っていたのであった。琉の加勢で何とか退けたのだが…。

『砂の地獄を突破せよ』 序

「悪魔を倒し、世界を救うのなら分かります。不当に逮捕された父や、同志を救い出すのも分かります。しかし、これは……」

薄暗い部屋の中で、一人の女が抗議している。

「何故ヒトじゃないというだけの理由で、関係のない者を捕えたり命を奪ったりする必要があるのですか？ 早く家に帰すべきではないのでしょうか！？」

「良い良い、アヤメの言うことももつともだ。しかしな、こうでもしなければ協力を仰げなくてな」

もう一人、部屋にいる男が言葉を返した。

「悪魔を連れてる男——彩田琉之助。ヤツはラング装者、我々とは技術にしても素の体力そもそも次元が違う存在だ。それに対抗するには、ヤツが“利用”する亜人種どもの技術を利用し、同時にヤツの戦力をそぎ落とす必要があると考えたのだ……」

その頃、襲撃のあった工房では。

「それは奥へ。こいつは持って行く。……よし片付いた！」

工房内では、アルの指揮下で従業員、そして琉とロッサが総出で片付けをしていた。

「琉……何で今工房の中を片付けるの？ 早く行かないと……」

「急がば回れ、だ。砂漠を直に突っ走るワケにもいかんだろう？
何、すぐに分かるさ」

工具、作りかけの製品、修理を依頼されたモノ。これら全てを奥の部屋に仕舞い込み、工房内はたちまち殺風景となった。

「皆あ、奥の部屋で待機しててねえ。工房を頼んだよう！ んじゃ
ゲオ、行こうか。琉ちゃんとロツサちゃんは、その白い線より外側
で待っててねえ」

アルがある扉の鍵を開けると、そこには地下への階段が。アルと
ゲオはそのまま階段を駆け降りて行った。

「何があるの？」

「すぐに分かるさ……ほら来た！」

一方アルとゲオは階段を降りると、早速そこにあった椅子に乗り
こんだ。そして周りの壁についたスイッチを押すと、アルがレバー
を動かして目の前にあるハンドルを握り、叫んだ。

「フロア・オープン！ アンタレス・セットアップ！！」

工房内全体に、大きな音と振動が響く。工房の床が二つに開き、
中から巨大な影が浮かび上がる。やがて影は工房の中に姿を現した。

「これは……！？」

「コイツはアンタレス。ここの工房の“最高傑作”さ」

アンタレス。砂漠を時速約100kmで走ることが可能なバギーカーである。屋根に付いたソーラーパネルでエネルギーを補完し、砂漠を約1カ月、フルパワーで走り続けることが可能なスーパーマシンである。

「さ、早く乗ってえ！……よし、アンタレス・ゴー！！」

シャッターが開き、アンタレスの巨大な姿が現れる。誰も通らぬ裏通りの砂の道を、一つのバギーが駆け抜ける。やがて周りの景色は建物の建ち並ぶ街から見渡す限りの砂漠へと変わって行った。

「どうだいロツサちゃん、初めてのバギーは。早すぎてクラクラしてないかい？」

「……それより何か乾く。琉、水ちょうだい」

「はい、水。ゲオ、そもそも彼女は砂漠自体が初めてだぜ」

目指すはオアシス。囚われの家族を助け出し、メンシエの暴走を止めるために4人は砂漠を渡る。シリアスな状況下でもユーモアを失わない琉とゲオ。ハンドルを握りながら笑うアル。こういう時こそリラックスすることが大切だと、男3人は分かっていた。

「街がどんどん、小さくなってゆく……」

だんだんと離れてゆく街。一方のロツサは水を片手に、周りの見渡す限りの砂景色を眺めていた。赤みがかった黒髪が風になびき、紅玉の瞳は何処か不安げな表情をたたえている。

（街から離れるのが不安か。そりやそうだろうな……）

アンタレスはひたすらオアシスを目指して疾走した。ハンドルを握るアルの隣で、リーダーを持ったゲオが説明する。

「反応はオアシスに向かってまっしぐらだ。しかしオアシスで何をする気なんだ？」

「ねえねえ、メンシエもバギー使うの？」

ロツサが聞く。

「そりや使うさ。でなきゃこんな場所、移動出来ないぜ！　しかしすぐ追いつくと思ったんだがなあ……」

「どうやら違法改造したみたいだねえ。100kmは確かに速いかもしれんけど、法律ギリギリだからねえ。あつちは確実に150kmとか出してるよお」

「全く船にしてもバギーにしても……。何でも速けりゃ良いってものじゃないのになあ。しかしエンジン壊れたりしないのか？」

琉はタメ息をつきながら言った。あまりに高い速度を出すと、エンジンにかかる負担も大きくなる。メンシエ教徒は一体何を考えているんだ、と琉は思った。

「ところで、あとどれくらいでオアシスに着くの？」

ロツサはアルとゲオに聞いた。

「ん……あと3時間くらい」

約2時間が経過した時だった。

「琉、のど渴いた……」

「ロツサはよく飲むねえ……。ちよつとずつ、だぞ？」

体質上、水を全く飲まないアル。時折飲む程度の琉とゲオ。一方のロツサは常に飲み続けていた。

「ロツサちゃん、水中には強いみたいだけど乾燥は苦手みたいだねえ。オイラとは正反対だあ」

「オアシスに着いたらまず水分補給だな。……お、どうやらあちらはオアシスに着いたみたいだぞ！」

ゲオのレーダーを、琉とロツサが覗き込む。

「反応の移動が止まっている。……オアシスのふちっここかな？　こんな所に何かあったっけな……」

そう言ってる時だった。ガタン！　という音がしてバギーが停止したのである。

「アル、どうした？」

「目の前見て！　来るよ！！」

『砂の地獄を突破せよ』 序（後書き）

今回のタイトルは久々のオリジナルです。そして第七章は海ではなく、砂漠が主な舞台となります。果たして四人は、無事にオアシスに到着出来るのでしょうか！？

『砂の地獄を突破せよ』 破（前書き）

アルとゲオの力作バギー、
アンタレス。それに乗り、
オアシスに向かう4人であつたが……。

『砂の地獄を突破せよ』 破

「一刻も早く、悪魔はせん滅せねばならん。アヤメ、手段を選んでも場合ではないのだぞ？ ……ん？」

突如、男の携帯電話が鳴り響いた。

「どうした。……何？ 突然ヤツが現れて妨害した？ そんなでもってこちらに向かっているだろ！？」

同時刻、アルの工房を襲ったメンシェ教徒が琉によって蹴散らされていた。男は携帯電話を切ると、狂ったように笑いこいだ。

「クカカカカカ！ これは良い、飛んで火に入る夏の虫とはまさにこのことよ！ アヤメ、ヤツが、彩田琉之助が来るぞ。そこでお主には、侵入者を抹殺するという使命と権限を与える。良いな？ 存分に仇を討つが良い！！」

「……ハッ！ メンシェの神の……名のもとに」

それだけ言うと、アヤメと呼ばれた女は部屋から出て行った。

「ついでだ。コントロール装置を起動させておこう……。ククク、ヤツらめ、まさかハルム襲撃がメンシェの仕業とは思わんだろうな！」

薄暗い部屋に、男の不気味な笑い声が響き渡った。

「あ、あれは！？」

ほぼ同時刻。あと少しでオアシスにたどり着く、そんな場所のことである。

「やつぱりいたねえ、ハルム。こうなったら振り切るよお！」

バギーの前の地面が、ぼこぼこと盛り上がっている。盛り上がりはバギーと一定の距離を保ちつつ、うろつくと動き回っている。地中に潜むハルムは、獲物の動きを伺うかのようにうろつくと動き回っているように見えた。

ギユウン！！

レバーを切り替え、一気にアクセルを踏み鳴らすアル。その音に気付いたのか、ハルムはすぐにこちらに向かってきた。

「皆、武器を構えてえ！ アンタレスに追いつけるハルムなんざそうじゃないけど、万が一ってことがあるからね！！」

ハンドルを切るアル。砂を巻き上げ、砂漠に独特の曲がりくねった軌跡を刻みつつ疾走するアンタレス。その座席から、琉はチェインに切り替えたパルトネールを、ロッサは戦闘用に黒く変形させた自らの腕を、ゲオは自前の盾とそこに取り付けられたパイルバンカーをそれぞれ構えていた。

「チツ、やつぱ海ん中じゃないとパルトネールは反応せんな……」

琉はバギーの背後から迫る砂の盛り上がりを見つづつ言った。海中作業用に作られた道具であるトライデントのハルムセンサーは、海水中に溶け込んだハルムの分泌物に反応するように出来ており、

陸上では反応しないという特徴を持つ。これは、琉の持つパルトネールとて例外ではないのだ。

砂の中から迫るハルムであったが、アンタレスには追い付けずどんどん遠ざかってゆく。4人がホツと胸をなでおろした、そんな時だった。

「よし、振りきれた……って、前にもいる!？」

ハルムは一匹ではなかった。アンタレスの前に、盛り上がった砂が更に3つか4つ、動き回っていたのである。瞬く間にアンタレスはハルムに包囲されてしまった。

「武器、構えてえ。来るよお!！」

次の瞬間。盛り上がった砂を突き破り、先端に針を持った紐状の生物が飛び出し、獲物を貫かんと襲いかかって来た! アルはハンドルを切って攻撃をかわすと、ハルムのうちの一つ目がけて突進する。突進すると同時に4人は武器を手にバギーから飛び降りてすぐさま分散した。攻撃を食らったハルムが倒れると、根元にはハサミと脚の付いた“本体”が蠢いていた。それを見たゲオが声を上げる。

「イグピオン!? 馬鹿な、こいつら集団行動しないはずだぞ!？」

イグピオン。サソリとトカゲを合わせたような見た目が特徴で、本体を砂の中に隠し、約6mにも及ぶ巨大な尾を振りかざして獲物を狩るという習性を持つ。巨大な尾はムチのようによくしなり、先端には50cmにも及ぶ三角形の剣のような毒針を持つ。しかし本来は縄張り意識が強く、このように集団で行動するのはまず考えられないことであった。

「ロツサちゃん！ こいつは本体、尾の付け根を狙ってえ！ ……
おわっ！？」

前述の通り、地表に出ているのは尾であり操ってる本体は地中のごく浅い場所に潜んでいる。しかしそうやすやすと近づくことは出来ず、アルはイグピオンの針を鉤爪で引っ掛けて防いでいた。しかしこの尾にはもう一つの恐ろしい武器がある。鉤爪に引っ掛けられた針。しかし次の瞬間、その先端は真っ赤な色に染まったのである！

「うわぁッ！ …… やってくれたねえ！！」

このハルムの毒液には発火性があり、これを利用して尾から高熱の火炎を発射する力が、イグピオンにはあった。

アルは寸手の所で炎をかわすと引っ掛けた針をもう片方の腕でへし折って炎を止め、そのまま相手の本体目がけて飛び込んだ。そして着地すると同時に鉤爪を突き刺し、本体を砂から引きずり出したのである。アルは、刺した本体をそのまま引き裂いて消滅させた。

「オイラを焼いて食おうなんて、1万年早いんだよぉ！」

一方のゲオは巨大な盾で針を防ぎ、2体のイグピオンを相手に奮闘していた。

「この盾は防火使用だ、そんな炎なんかでやられるかよ！」

火炎放射攻撃を盾で防ぎ、追い詰めるゲオ。そして尾の根元を見るや否や背中に取り付けた大筒に点火したのである！

「こっちの火力はもつと凄いで、覚悟しな！ シュート！！」

次の瞬間、ゲオの大筒が火を噴いた！ 大筒は尾の付け根に命中し、この個体は毒液に引火したのかたちまち爆発して消滅した。

「そこだッ！」

更にゲオはもう一体の懷に飛び込むと、本体目がけて右手のパイランバンカーを炸裂、刺し貫いた。急所を貫かれ、この個体もたちまち崩れるようにして消滅したのであった。

「ロツサの“捕食”の邪魔はさせん、いくぞ！」

琉はそう言いながらチェインで対抗していた。炎をかわし針をかわし、本体目がけて分銅を発射させる琉。途端に尾の動きがおかしくなった。

「パルトショック！」

たちまち鎖を介して高圧の電流が襲う。本体に強烈な攻撃を撃ち込まれ、イグニオンはたちまち消滅した。しかし更に他の個体の針が琉に襲いかかる。

「パルトネール・サーベル！！」

かわしきれない！ そう思った琉はパルトネールをチェインからサーベルに変えて針を弾き返し、更に弾かれた針の付けね目がけて斬りつけ、切断した。

「トドメだ、パルトネール・シューター、パラライザー！」

後ろに飛び退き、琉はその傷口に赤い閃光を放つ。パラライザーとはいえ、発火性の強い物質には引火する。たちまちこのイグピオンは動かなくなり、炎に包まれて消滅した。

「琉ちゃん、こっちは片付けたよぉ！」

「そっちはどうだい！ ロツサちゃんは無事か！？」

「心配はいらん。あれを見てみな」

アルとゲオの二人が見た先、それは……。

「ハアアアアッ！」

ロツサの長く伸びた指が、4体のイグピオンを同時になぎ倒す。イグピオンが負けじと尾から炎を放つも、液化して逃れるロツサを捉えることが出来ない。次の瞬間ロツサの爪が、1体のイグピオンの本体を貫いた！

「よし！ しかし琉ちゃん、助けに行かなくて大丈夫なの？」

「彼女は今、イグピオンを“捕食”しようとしている。消滅させるワケにはいかん、とにかく食わせないと……ん！？」

ロツサは自らの手で貫いたイグピオン本体を引きずり出し、そっとその口を近づけて吸い始めた。

「イグピオンを……食っている！？」

「以前話した能力だ。彼女はハルムを食べ、その形質を取り込むと

いう力を持っている。今まではオドベルスの翼しか持っていなかったが……」

ロツサに吸い尽され、イグピオンの体が灰のように崩れ去ってゆく。そして、

「はう！ う、う……！！！」

「おい、本当に大丈夫なのか！？」

以前にオドベルスを捕食した時と、同じ反応。ロツサは胸の辺りを押さえてうずくまり出した。と、そこに、残った3体のイグピオンの容赦のない火炎攻撃が襲いかかる！

「しまった、この反応のことをすっかり忘れていた！！ ロツサア
ーッ！？」

『砂の地獄を突破せよ』 破（後書き）

ロツサの運命やいかに！？　そして今回登場のイグピオン、モチー
フはそのまんまサソリですw

『砂の地獄を突破せよ』 急（前書き）

オアシスに急行する琉達一行。途中、砂漠にすむ凶暴なハルム・イグピオンの襲撃を受けた。珍しく集団で行動するイグピオンに苦戦する一行だが、ロッサがついにそのうちの一体を捕え、食らい始めた！ しかし直後……。

『砂の地獄を突破せよ』 急

慌てて駆けつける琉、アル、ゲオ。

「くそっ、パルトブラスター!!」

琉はパルトネールに取り付けられたトリガーパーツのレバーを切り替えてブラスターモードにし、駆け寄り、照準を合わせ、両手で構え、引き金を引くとたちまち青白い光弾がイグピオンの体を貫き、木端微塵に吹き飛ばした。

「でやあッ! ロッサちゃん、無事かい!」

「ふんッ! くそ、生きててくれよ……!!」

アルとゲオもそれぞれ撃破し、3人はロッサに近づこうとした。すると、

「おわッ!? 何、まだいたと!」

予想もしてなかった事態。何と更に5体ものイグピオンが出現し、その尻尾をこちらに向けている。

「食う気まんまんだぜ、こりゃ……」

「こんなの、絶対おかしいよお!」

再び構える3人。アルとゲオが口ぐちに言った。

「アル、ゲオ、すぐにアンタレスへ走ってくれ！俺がその間に口ッサを助け出す！！　良いかい！？」

「了解！！」

琉はパルトネールを構え、迫りくるイグピオンを待ち構えた。

（あと3m……2m……1m……今だ！）

距離を読んで、琉が引き金を引く。ドオオオン、という音と共に放たれた光弾が、1体のイグピオンの体を貫き爆発させた。続けざまに琉はもう一体に狙いを付けると、これまたパルトブラスターで爆発させた。

「躊躇してる場合じゃねえ、もう一発行くぞ！……何い？」

距離を読み、引き金を引く琉。しかしパルトネールが反応しない。それもそのはず、タダでさえ消費の激しいブラスターを、立て続けに撃ったせいでエネルギーを使い果たしてしまったのである。

「アギジャベ！（くそっ！）」

急いで電池を詰め替える琉。相手は、すぐに近くに來ていた。それもそのはず、本来射撃が苦手な琉はエネルギーを無駄にしないために一定の距離にまで誘いこんで撃つというクセがあるのだ。しかし今回はこれが返って仇となってしまった。電池切れのトライデントは変形も出来なくなり、ただ重いだけの棒となってしまうのである。そして非情にも、琉に毒針が迫る。万事休す、そう思われた時であった。

ヒュウン！

不意に琉の体が宙に浮いた。そして琉に迫っていた尻尾を、何と同じ形をしたモノが弾き返している。琉は一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。

「琉、大丈夫！？」

「…… ロッサ？ ロッサなのか！？」

声に気付き、視線を向けた琉の目に最初に写ったのはロッサの顔であった。眉間が開き、第三の目が輝いている。彼は、翼を開いたロッサの腕で抱えられていたのである。そしてそのロッサの腰から、何かが生えている。その先にあつたのは……

「イグピオンの尻尾…… そうか、取りこめたのか！」

そう言われてロッサは、自分の腰に生えた尻尾を自慢げにくねらせた。形の良い彼女の美尻と相まって、非常に妖艶な動きを見せている。長さこそ4mとオリジナルと比べて短いがその力はむしろオリジナルを遥かに凌駕しており、弾かれた個体はそのまま転倒してしまっていた。ロッサは琉を地面に降ろすと、尻尾を掴んでオドベルスに向けた。

「琉、下がって！」

次の瞬間。ロッサの尻尾から真っ赤な炎が噴き出し、イグピオンの体を包み込んだ。真っ赤な炎に包まれたイグピオンの体はたちまち爆発を起こし、跡形もなく消滅した。

「ハアアアアッ!!」

ロツサはそのまま残りのイグピオンに向かって火を放ち、たちまちイグピオンの群れは爆音とともに跡形もなく消え去った。

「琉ちゃん! ロツサちゃん! 早く乗ってえ!!」

全滅したのを見計らい、バギーで駆けつけたアルとゲオ。すぐさま琉とロツサは乗りこむと、再びハルムが出ないうちにそこを後にした。

「はあ、はあ……。何とか脱出出来たな……。ロツサ、よくやったぜ! ……ってロツサ!?」

琉はすぐに異変に気が付いた。ロツサはアンタレスの座席に着いた瞬間に気を失い、倒れ込んでいたのである。

「またか……。一応、脈は大丈夫みたいだな。お疲れさん、オアシスに着いたらたっぷり水を飲ませてやるからな!」

そしてイグピオンを退けて1時間後。やがて砂景色から、再び町が見え始めた。そして町の真ん中には大きな湖が、透き通った水をたたえている。

「よくし着いた! 琉ちゃん、ロツサを起こしてやりな!!」

「着いた!? おいロツサ、オアシスに着いたぞ! ……君、寝顔可愛いじゃん」

オアシスを取り囲むようにして出来た町。その建物の間をすり抜

けて、アンタレスはオアシスの岸に停車した。ゲオに言われ、琉はロツサを揺すった。

「ん……琉……」

「オアシス、着いたぞ。……あ、って何だよ、いきなり抱きつくんじゃないよ！ どこ触ってんだコラ！？」

寝ぼけたロツサに抱きつかれ、琉はあわわと慌てふためいた。

「相変わらずウブだねえ」

「あ……着いた……？ ……お、み、水！」

目を覚ましたロツサ。そしてオアシスが目に入るや否やアンタレスから飛び降り、真っ直ぐに駆け寄ると大きな水音を立てて飛び込んだ。

「ロツサ、君かなり大胆なことするねえ……」

相当乾いていたのか、ロツサはオアシスの水の中ではしゃいでいた。心なしか、ロツサの肌が先程よりも艶とハリを増してるように見える。

「ロツサ、そろそろ上がっておいで」

そう言われてロツサは、オアシスの岸に上がって来た。濡れた髪が艶やかに輝き、彼女の肌は戦闘中と比べて幾分キレイになったかのように見えた。

（これでハルムの形質が二つになったか。オドベルスの翼にイグピオンの尾、どちらも強力なモノには変わりないな）

何にせよ、これからの活躍に期待しよう、と思う琉なのであった。そしてほぼ同時刻……。

「フツ、やはり突破されたか。所詮ハルムはハルム、集団行動させても天敵には勝てんということか……」

薄暗い部屋で男が一人、怪しげな機械を触っている。口元には怪しい笑みを浮かべ、目の前のモニターを見ていた。

「嗅ぎつけた所でどうにも出来まい。貴様らにこの、メンシエ教地下聖殿を攻略することは不可能だ。四人ともソディアの砂に埋めてやろう、覚悟するんだな……！」

男はモニターの画面を切り、同時に怪しげな機械を素手で叩き壊した。そして部屋を出ると、そのまま階段を下って行く。するとそこには大量の、ベルトコンベアーに向かうトヴェルクとディアマンがいた。彼らは皆、奇妙な腕輪と脚輪を付けられており、ディアマンの中には鱗が一部砕けている者もいる。そして所々、フードの者達が鞭を持って睨みを利かせていた。

「メンシエの同志達に告ぐ！ この地下聖殿、並びに地下聖房を汚さんとする輩が現れた！ そのうち一人はかの恐るべき悪魔ヴァリアブル、そしてもう一人は悪魔に魂を売ってヒト族を裏切った極悪人、彩田琉之助だ！ ただちに亜人種共を牢に戻し、臨界体勢を取れ！ メンシエの神の、名の下に……！」

「メンシエの神の、名の下にッ……！」

フードを被った者達が一斉に答え、トヴェルクとディアマン達を引つ張り何処かへ連れ去り始めた。中には鞭で叩きつける者までいる。

「その五人、私と共に来い！」

「ハッ！！」

男はフードの者を五人連れ、更に地下室へと下った。中は鉄格子の部屋がいくつもあり、トヴェルクやディアマンといった異種族の女性と子供が入れられている。絶えずすすり泣きが響いており、彼女らもまた、腕と脚に輪っかが付けられていた。

「コイツらだったか、アルとゲオの嫁と子供っていうのは」

「はい、ビショップ・ワインダー様」

ビショップ・ワインダーと呼ばれた男は鉄格子の奥ですすり泣くトヴェルクとディアマンの母子を見降ろしつつ言った。

「“浄化室”へ連れて行け！！」

五人が鉄格子を開けて入ると、中にいた母子達は怯えて奥へと引つ込んだ。しかし無情にも引きずり出され、哀れな母子は奥の部屋へと連れ去られていった。

「ふっふっふ、ヤツらなら真っ先にあの部屋を嗅ぎつけるだろう。トヴェルクの女に付けられた小細工に、我々が気付くはずがないとも思ったのか？ やはり所詮は亜人種の知恵か……」

ワインダーはローブの中から石板を取り出した。中央にオーブがはめ込まれ、周りを取り囲むように毒蛇が描かれている。

「待っておるぞ、反逆者ども……!!」

『砂の地獄を突破せよ』 急（後書き）

ロツサに待望の新能力！そして遂に、命令を下していた謎の男の名前が明らかに！！さあ次回、一行は家族を救いだすことは出来るのか！？

～次回予告～

「こっちは忙しいんだ！コイツは痺れるぜ、覚悟しろよ……」

「わたしに良い考えがあるんだけど」

『地下聖殿に潜り込め』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

手掛かりを求めてアルカリアに来た琉とロツサ。探索の途中でテロ宗教組織：メンシエ教が暴走し、その魔の手は琉の知り合いである工房の二人の家族にまで襲いかかった。その後を追い、オアシスに向かった一行は途中で恐るべきハルム“イグピオン”の襲撃を受ける。その不可解な行動に翻弄される一行。しかしロツサがその能力を吸収して一気に形勢逆転、無事オアシスに着いたのだった……。

『地下聖殿に潜り込め』 序

ソディア島・オアシス。表面という表面が砂漠に覆われたこの島に置いて、貴重な水源である。この島にはこのオアシスの周りと海岸にしか町がない。そして今、オアシスの付近は静まり返っていた。一行はリーダーの反応を追い、オアシスの町外れにバギーを停めた。反応が正しければ、この付近にアルとゲオの家族がいるはずである。青いスーツに身を包んだヒト族の青年——琉は、オアシスの町の様子について言った。

「相当にハデにやりやがったみたいだな、こつちでも……。まさか、さっきのイグピオンもヤツらが差し向けたんじゃないかな？」

「まさかあ。ヤツらはヒト族至上主義でしょ、ハルムなんか生かして放っとくワケが……」

「あつ、そういえば！ 琉、ちょっとこつち来て……」

ロツサは何かを思い出すと琉を呼び、その豊満な胸の間に手を入れて何やらもぞもぞと探し始めた。

「ロツサ、どうした……っておい、一体何やってんだ!？」

不意打ちセクシーショットを見せつけられ、思わず赤面する琉。心なしか、ロツサの胸はただでさえ豊満なのにも関わらず、今の琉には更に大きくなっているように見えた。そんな琉にお構いなく、ロツサはその魅惑の谷間からコイン状の物体を取り出して琉に見せた。

「さっきイグピオンを食べた時に何か余計なモノが入ってたの。これなんだけど……琉、何で顔そらすの？　しかも真っ赤になってるけど」

「……全く、君には“恥じらい”ってモノはないのかね。ってコレか？」

琉はロツサからモノを受け取ってマジマジと見た。

「パツと見、ゲオの使ってる追跡コインにも見えるが……。アル、専門家の出番だぜ」

琉はアルにこの奇妙なコインを投げ渡した。この世界にはコイン型のマイクロマシンが様々な用途で使われている。しかし琉は、その専門家ではない。やはりここは制作者に任せるのが良いだろう、と彼は考えたのだ。

「はいよ、どれどれえ……。うーむ、腐食がひどいねえ」

このコインはロツサがイグピオンを食った際に出て来たモノ、即ちロツサの体内で溶け残ったモノである。そのため、何とかコイン型マイクロマシンとしての外観を留めているだけで内部はほぼダメになっていた。

「これがイグピオンにくつついてたのかあい？」

「うん。何か美味しくないと思ったら……」

うむ、と言ってアルは再びコインを睨んだ。

「ひよつとして、これをハルムにくっ付けて操つてたのかなあ。でもそんなの聞いたことないよ。ゲオー、分かるー？」

「ん？ 見せて見せてー」

アルはリーダーを監視しているゲオにコインを渡そうとした、その時だった。

「あ、メンシエ教徒が来るよー！」

ロッサが気付き、四人はすぐにバギーの影に隠れた。隠れながらも、ゲオはリーダーを注視している。

「どうやらこちらは気付かれていないらしい。ちよつくら様子見と行こうか」

琉はバギーの影から、フードを被った男を観察し始めた。ロッサも琉の背後に隠れつつ、様子を見ている。

メンシエ教徒はバギーの影にいる四人には目もくれず、ある看板に向かった。看板には“落下注意”と書かれている。教徒は周りをキョロキョロと見回すと、おもむろに看板を引き抜いた。

「うわ……やりたい放題だな、こりゃ。……おや？」

琉達が見ている中、彼は何やら引き抜いた跡に手をつ込み、その後看板を戻した。するとどうだろう、看板の近くの地面が割れて地下への階段が現れたのである！

「琉、これって……」

「間違いねえ、入口だ！！　よし、見てろ……」

琉は近くに落ちていた石を拾うと、思いきりメンシェ教徒目がけて投げつけた。

「痛えッ！？　誰だ！！」

階段を降りていたメンシェ教徒は、そのまま地表に戻って来た。そして石の飛んできた方向、バギーに向かってきた。

「何処のガキだが知らんが大人しく出て来い！　罰を与えてやる！！」

「はいはい、出てきてやるよ出てきてやるよ。大人しくないけどな！！」

その言葉と同時に、メンシェ教徒の首に、サーベルとなったパルトネールの先端が突き付けられた！

「うつ！？　貴様、何をやってるのか……分かってるのか！！」

「説教なんざ興味ないね。……アンタ達の仕業ってのは分かってるんだ、この島の住民達は一体何処にいる！？」

琉は語気を強め、声を低めてメンシェ教徒に言った。更にサーベルの刃を傾け、袈裟掛けの形にして押し当てる。刃を引けばこのメンシェ教徒は、たちまちバツサリと斬られてしまうだろう。

「お、教えるものか……殺すならさっさと殺せ！！」

「寝言は寝てから言え、アンタにはまだ聞きたいことが山ほどあるんだ！」

ドゴオツ！ という音と共に琉の脚が鳩尾に入り、メンシエ教徒はその場で倒れ込んだ。つかさず琉はメンシエ教徒の胸ぐらを掴み、その首に刃を押し当てつつ言った。

「貴様……中坊の分際で……」

「これでも一応25なんだが。あと、聞くのはこっちで答えるのはそっちのハズなんだが？ ……あの入口はどうやって開けた」

琉が問う。しかし敵は口を閉ざして一文字。

「ロツサ、ちよつとこっち」

琉はロツサを呼び、そつとその耳に何かを吹きこむと、ロツサはメンシエ教徒のアゴを指で支えて上に向け、その顔を覗き込んだ。そしてロツサと目が合った途端に、メンシエ教徒の顔から見る見るうちに血の気が引いていくのが見えた。

「あ、ああああ、あ、悪魔……！！」

「ふふふ、悪魔なんて失礼ね……」

ロツサはそつとローブに指を這わせた。するとその軌跡を辿るかのように、ローブの生地が裂けてゆく。その裂けた生地から、液化したロツサの手が服の中に入り込んだ。

「ふふふ……どう？ 神の教えを破りながら死ぬ気分は……」

「や、やめてくれ……く、食われるのだけは……！！」

メンシエの教義では、悪魔ことヴァリアブルのエサになって死ぬことは絶対に許されないとされている。つまり、相手の兵糧にだけはなるなということである。そのため、ただ琉に斬り殺されるのは大丈夫でもロツサに食われるということに関しては凄まじいまでの恐怖を感じるのだ。この異常な感覚、言うまでもなく薬物による洗脳の影響である。

「……なんてね、すぐには食べてあげない。まずは料理をしないとねえ？」

ロツサの猫撫で声が、メンシエ教徒の耳に突き刺さる。

「あああああ、ああっ！？」

ロツサの液化した腕が、メンシエ教徒の体中をねつとりと這いまわる。ローブを裂かれ、服に仕舞い込んでいた武器が次々に外に飛び出て来た。スタンガン、拳銃、聖弾、ナイフ……一通りの武器を取り上げると、ロツサは手を元に戻して服の中から引いた。

「もし素直に答えるのなら、ロツサを止めてやっても良い。彼女は俺の言うことなら聞くからな、一通り吐いてくれたら命だけは助けてやる。どうだ？」

琉がそう言うと、メンシエ教徒は黙ったまま何度もうなづいた。恐怖で引きつった顔のまま、その眼は明らかに“助け”を求めている。

「じゃあ聞くぞ。トヴェルクとダイヤモンドは何処にいる」

「ち、地下4階の牢獄だ……」

それを聞くなり、琉は携帯電話を取り出して素早く書き取った。

「入口はどうやって開け閉めすれば良い？」

「か、かか看板の下に、ハンドルが……それを半分ひねれば開くはずだ。閉める時は内側から半分戻せば良い、それだけだ……」

ほほう、と言いつつ琉はメモを取る。

「何故この島のトヴェルクとダイヤモンドを拉致した？ 何が目的だ？」

「そういや、オイラ達以外の職人はほぼ連れて行かれたらしいねえ。一体何がしたいんだあ？」

メンシエ教による異種族狩り。その規模は留まることを知らず、このソディア島のトヴェルクとダイヤモンドはそのほとんどが何処かに連れて行かれていた。町が静まり返っているのはそのためである。

「そ、それは……」

流石のメンシエ教徒も口を閉ざした。どうやらかなりの極秘項目だったらしい。琉は黙ってロツサに目を合わせ、そのまま片眉を上げた。

「ふふふ、言わなくて良いのよ、イヤなことは。ゆっくりと溶かし

てあげる……」

「や、やめてくれ！ 頼む、食われるのだけは、食われるのだけはイヤだ……！！」

引きつった声で、メンシェ教徒は震えながら懇願した。と、その時である。

「……ん？ おい、レーダーの反応が動いたぞ！ 何処かに連れて行かれるみたいだ……！！」

『地下聖殿に潜り込め』 序（後書き）

今回の章は久々にロツサの怪演（？）が冴えてますw しかし琉も琉で何を吹きこんだのやら……。さて、第八章のタイトルもネタ抜きのオリジナルです。

『地下聖殿に潜り込め』 破（前書き）

地下聖殿への入り口を見つけ、更にメンシエ教徒を一人捕えた一行。琉とロツサによる尋問の結果、連れてかれた場所までは判明したのだが……。

『地下聖殿に潜り込め』 破

琉とロツサが問い質す中、レーダー装置を見ていたゲオが声を上げた。

「……悪運の強いヤツめ。質問を変更するぜ、連れて行った二種族の方達をどうしてる？ 牢に閉じ込めて……それだけか？」

焦りの表情を浮かべ、琉はロツサを止めて別な質問をした。

「へ、部屋……。 “浄化室” だろうな多分……」

「浄化室？ 何なんだその部屋は」

アルとゲオの顔に、一瞬だけ電流が走った。嫌な予感しかしない言葉である。

「浄化するのさ……汚らしい亜人種のヤツらを、聖なる煙でな……」

「何だつて!？」

四人は同時に口を開いた。

「聖なる煙……ということは、浄化室はガス室か!？」

「ま、そういうことだ。あと30分で浄化が開始されるはずだな……」

四人の顔から血の気が引いた。

「ガス室だと……まるでかつてのラディア帝国じゃねえか……」

ラディア帝国とはこの世界で最も古い国である。現在は遙か北方のポロニア島とラドン島にのみ領土を持つが、現在は鎖国しており入ることさえままならない。遺跡文明の時にはこの世界の3分の1を占めていたと言われる一方、領土だった場所の遺跡調べるとガスボンベの付いた部屋や奇妙な形をした骨が見つかるというダークサイドに溢れた国でもあるのだ。

「チッ、こうしちゃおれん！ 行くぞ！！」

ゲオがレーダー片手にいきり立つ。三人も同調した。

「とりあえず、コイツは縛ってその辺の倉庫にでも放り込んでおこう。ロッサ、いつもの」

琉がそう言つと、ロッサの全身がたちまち液化し、見る見るうちに形を変えた。そして……

「じゃ、しばらくは彼女がアンタの代わりをするから。そこで大人しくしてな」

四人はすぐに入口まで走った。だが、

「しまった、このまま行けば確実にやられる！ 特にアルとゲオは目立つしな……」

「ローブ剥ぐしかないねえ。ただオイラだと服が鱗で破れちゃうよ

お
」

「琉、ここからはどう?」

ロツサが何かを指差している。

「これは……通気ダクトか! でかしたぞロツサ!」

琉がカバーを外すと、ロツサが早速入り込んだ。入り込むと同時に姿がいつもの美女の姿に変わる。こちらとしてはなるべく波風立てずに行きたい所であり、その上こういった狭いところは彼女の得意分野である。そして琉も続いて入り込んだ。だが、ここで問題が一つ。

「うへえ! ロツサちゃんは余裕でも琉ちゃんじゃ肩幅ギリギリじゃないかあ! こりゃオイラ達じゃあ無理だよあ……」

その様子を見ていたアルがそう言った。アルとゲオは琉よりもガタイが良く、とてもこの通気ダクトをくぐれなかったのだ。

「ええッ、マジかよ!? じゃあ二人は外で待つしかないか?」

するとゲオが、懐からあるカードを取り出して琉に渡した。

「携帯電話に差せばリーダーが表示されるはず。これを使って……オレ達の家族を頼む!」

琉は早速携帯電話にカードを差しこんだ。すると、たちまちその液晶画面に座標とポインターが表示されてゆく。

「オイラからもよろしく頼むよお！ とりあえず、こっちは外で待機してアイツを見張ってるから。何かあったら連絡して、強行突破なら得意だから！」

「そうか……。ありがとう、任せてくれ！」

かくして、琉とロツサが潜入を開始したのであった！

「よし、行こうかロツサ！ ……しかし暗いな、っと」

琉はパルトネールと携帯電話を取り出した。その液晶画面に、あのリーダーが表示されている。更にパルトネールの先端を光らせ、奥を照らした。が……

「あーしまった、俺が前に行った方が良かったか。ロツサ、前見えるかい？」

「ちゃんと見えるよー！ そうそう、この先下に落ちてるみたい」

ロツサの目は暗闇でも利くように出来ている。琉はパルトネールの光でロツサの後を付いて行くことにした。

（それにしても、ロツサは胸だけじゃなく尻もキレイな形だよな……って何考えてんだ俺！？）

狭い空間、真っ暗闇、あまつさえ男女が二人きりである。こんな感情を抱くのもムリはない。体の奥から熱くこみあげそうになるモノを押さえこみつつ、琉はロツサの後から付いて行った。

やがてロツサの言う、下に落ちる地帯に着いた二人。垂直に落ちるダクトの中を、液化してスルスルと降りてゆくロツサに対し、腕

と脚で突っ張りながら慎重に降りてゆく琉。階層を確認しながら、二人は降りて行った。

「ここが一番下みたい。深さからして4階だと思うけど……」

「そうか、だったら良いんだが……。肩幅キツイぜ」

ギリギリの肩幅の中を狭そうに下る琉。しかし問題はその後だった。

「うへえ！？　まずい、流石にこの隙間は通れねえ！！」

リーダーの反応を追ってダクトを通る二人。ついに、ポインターに最も近い出口を発見したのである。だが、それは……

「トイレの通気口、何で入口みたいにしなかったんだ？」

二人は念願の出口を前に立ち往生、ならぬしゃがみ往生していた。今更ながらご都合通りに行かぬ結果に嘆く琉。だが、同じく出口を見ていたロッサの脳裏にはあるアイディアが浮かんでいた。

「ねえねえ琉、わたしに良い考えがあるんだけど」

「お？　え、何々どうするの！？」

思わず食いついた琉。まさに地獄に仏、この時の琉にはロッサが天使か、ひよつとすれば女神に見えていたであろう。

「んー、ちよつと息を止めてもらえる？」

「はいはい、了解……んんん!？」

ロツサの指示通り息を止めた琉。するとロツサがスルリと琉の背後に回り込んでがっちり背中抱きつき、何と液化しだしたではないか!

「んぷんぷん!？」

息を止めたまま声を漏らす琉にお構いなく、液化したロツサの体が琉の体という体全てを覆い尽した。そして琉を取り込んだまま、蓋を外した通気口に近寄るとそのまま自らを潤滑剤にして一気にすり抜けたのである! ボテツ、という音と共に二人はトイレの個室に落下した。

「よつ、と。どう? ちゃんと出られたでしょ」

琉から素早く分離し、ロツサは得意げにそう言った。

「よ……よくやったぜロツサ……」

琉は半ば放心状態となっていた。落下先の様式便器に座りこみ、その青い目は何処か宙を見ている。そして何故か、全身がカタカタと震えていた。

「琉、大丈夫? 一応、溶けたりしないように気を付けたんだけど」

「あ、ああ、大丈夫だ問題ない……。それより、時間はどれくらい経ったんだ?」

ロツサに手を取られ、琉はやつと立ち上がった。

（やば……。一瞬だけ、マグロに丸のみにされるイワシの気分が味わえたぜ……。しかも服に、妙に甘ったるい匂いがしみついたな。あとロツサ、胸どころか身長までも伸びてないか？）

こんなことを思いつつ立ち上がると、琉は携帯電話を取り出して時間を見た。

「20分経過、残り10分か。急ぐぞ！」

琉とロツサは壁伝いにしゅつとイレを後にした。レーダーを頼りに走り抜ける二人。地下室独特の薄暗さが、更に緊張感をかきたてる。案の定、招かれざる客に気付いたメンシエ教徒がこちらに向かってきた。

「パルトネール・シューター！　パラライザー！！」

琉はパルトネールをシューターに変形させ、向かってきた教徒を撃った。しかし奥にはまだまだ教徒がいる。琉はロツサを後ろにかばいつつ、トリガーパーツのスイッチを入れて構えた。

「こっちは忙しいんだ！　コイツは痺れるぜ、覚悟しろ……。パルトスパイダー！！」

声を当て、琉は武器を持ったメンシエ教徒達の頭上目掛けて赤い光弾を放った。すると光弾はメンシエ教徒達の頭上でクモの巣状に広がり、そのまま覆いかぶさったのである。

「わ、何だこれは……。うっ！？」

たちまち絡め取られるメンシエ教徒達。パルトスパイダーはパラライザーのエネルギーを投網状にして放つ技である。数体の敵の動きをまとめて封じることが出来る一方、パラライザー10発分のエネルギーを消費する上に大きなスキが生じるために奥の手として取ってあつたのだ。ある程度まとまつた人数を相手にする際に役立つ技である。

「この奥か？」

二人は牢獄があると思しき部屋のドアまでたどり着くと、琉はパルトネールを、ロツサは戦闘用に変化させたその腕を構えた。

「ロツサ、準備は良いな？ 俺がヤツらを引きつけるからロツサは中にいる人達を出してやってくれ、良いね？」

「うん、分かった！」

「よし、なら……。3……。2……。1……。！！」

カウントダウンを終えると同時に琉はドアを蹴り倒して突き進んだ。突然の来客に驚く囚人達。琉は見回りをしていた教徒に早速パラライザーを浴びせてそのロープを強奪、それを着こむと更に突き進んで浄化室の扉を探した。一方のロツサは鉄格子の鍵穴に液化した指を入れ、合い鍵にして次々に開けていった。

「ロツサ、浄化室が見つかったぞ！ そっちはどうだ？」

「全部開けたよ！ 面倒くさいから途中から全部溶かして回ったけど」

「まあ、その方が早いよな。さて、この部屋だ。ごく親切に堂々と浄化室と書いてやがる。遠慮なく入らせてもらおう」

『地下聖殿に潜り込め』 破（後書き）

今回の二人はアグレッシブですw ロッサもかなり役立つ子になりました。さて次回、いよいよ突入です！

『地下聖殿に潜り込め』 急（前書き）

通気ダクトを通り、潜入する琉とロツサ。遂に二人は浄化室の場所を突き止めた！

『地下聖殿に潜り込め』 急

「何故だ？ 何故ここまでする必要がある？」

「決まっているだろう。ただでさえ汚れたヤツらが、こちらの言うことを聞くと思うか？ だから浄化するのだ」

浄化室。その中で、女と一人のメンシエ教徒が言い争っていた。

「20分ほど前」

「納得いきません！ 何故これをする必要が！？」

浄化室。特殊な強化ガラスの壁によって二つに遮られた、異質な部屋。片方には様々な機械やガスボンベが置かれ、ガラスの向こうには何も無い。そんな部屋で、ある女性の怒りの叫びが響いていた。

「仕方あるまい、あの生意気なトヴェルクとアルヴァンを従わせるにはこうする他ないのだ。そしてヤツらは間違いなく、この部屋に来る」

もう一人、豪華なローブを着こんだ男がそれに答えた。そして懷から、あるコインを取り出して女に見せた。

「ヤツらの悪知恵だ。こんなモノを家族に取り付けておった。だから間違いなくこの部屋が分かるだろう。そしてもし来なければ30分後に浄化しろ、分かったな！？」

二人が話す傍らで、数人のメンシエ教徒がダイヤモンド、及びトヴ

エルクの母子をガラスの向こうへと押し込んでいた。最後の一人を蹴り込むとつかさず鍵を掛け、メンシエ教徒の一人が言った。

「ビショップ・ワインダー様、準備が出来ました！」

「よし、お前とお前、あとアヤメはここに残れ。あとの3人は見回りを任せる。良いな？ コインはあえてここに置いておこう」

ガラスの中では、アルヴァンとトヴェルクの母子がガラスを叩いて懇願していた。しかしその声は届くことがない。というのも浄化室のガラスは防音使用で、かつアルヴァンやトヴェルクといった腕力に優れた種族でも割れぬほどの厚さで出来ているためであった。ワインダーは機械に付いていたマイクを取るところ言った。

「よく聞け亜人種ども。運が良ければ誰かが助けにでも来るだろう、だが！ あと30分したらそのパイプから聖なる煙が噴き出され、お前達の魂を浄化するだろう」

マイクのスイッチを切ったワインダー。そしてアヤメの方を見るように言った。

「良いか、ヤツらが来たらまとめて始末するのだ。決して生きて帰すな！ メンシエの神の、名の下に！！」

「メンシエの神の名の下に！！」

「回想終了」

「おい二人とも！ こんな所で言い争ってどうする、ヤツらはいつ現れるか分かったモンじゃないんだぞ！！」

もう一人いたメンシェ教徒が、二人の言い争いを止めた。

「こんなの、絶対おかしいよ……」

アヤメはまだ不満を漏らしていた。そんな折であつた。

ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！ バタンッ！！

「ん！？ 噂をすれば来たか！！」

扉を豪快に蹴り倒し、青いスーツの男と赤いドレスの女が駆けこんできた！ 男は入るや否や銃を構え、一人を目掛けて赤い閃光をぶつ放した。

「間にあつたな！ ロッサ、鍵を開ける！！」

「OK、まかせて琉！」

ロッサはすぐさま鍵穴に指を入れ、回そうとした。

「させるか！！」

「危ない！！」

アヤメのスタンガンがロッサに襲いかかる。しかしその腕を、琉の手が掴んで止めた。

「貴様は彩田琉之助！ この間の屈辱、晴らさせてもらっ！」

アヤメは拳銃を取り出した。中にはあの聖弾が詰まっている。

「誰かと思えばこの間の小娘か。親父は元気か!？」

琉はシューターを構え、アヤメと対峙した。お互いに銃を構えて睨み合い、こわばった指がトリガーにかかる。が、その時だった。

「残念、扉なら既に開いたぜ。遅かったようだな!」

琉はシューターを構えたまま、アヤメにそう言い放った。

「何!？」

「スキあり!!」

まさに一瞬のスキ。琉はすぐさまトリガーを引くと赤い閃光がアヤメ目がけて襲いかかった! が、

「うがあッ!？」

「そつち!？」

当たったのは別のメンシエ教徒だった。不意を突かれたアヤメは思わずメンシエ教徒の方を見た。そして同時に、ロッサは扉をこじ開けたのである。

「チツ、外したか。ロッサ、彼女らを頼む! ……さて、これだけ終われば用済みだ。あばよ!!」

琉はSスイッチを入れ、相手の頭上に狙いを定めた。

「パルトスパイダー！ ……何！？」

ドヤ顔を浮かべつつトリガーを引く琉。だがしかしパルトスパイダーは発射されなかった。そしてトリガーパーツを外そうにも、パルトネールが変形しない。

「馬鹿な！ これはどういうことだ！？」

『ククク、引つかかったな！ 異端者よ』

たちまち浄化室内に声が響き渡った。

『ようこそ、我らが地下聖殿へ。教えてやろう、その扉にはジャマ―が仕掛けてある。開けることによってスイッチが入り、トライデントの機能を全面的に封じてしまうのだ。それだけではないぞ？』

「何い？ ……あ、熱ッ！！」

なんとパルトネールが高熱を発し、琉は思わず手を離れた。幸いにも琉の手は火傷していなかったが、落ちたパルトネールは熱によって赤くなっている。

「そうか、お前達の狙いは最初からこの俺とロッサだったというワケか！」

『その通り！ 皆の者、この二人を捕えよ！ 殺してもかまわん、トライデントのないコヤツなど怖くもなるともない、やってしまえ！』

牢獄からの扉から、数人のメンシエ教徒がなだれ込んできた。そしてアルとゲオの家族達を連れて再び牢へと連れて行くこととする。

「……全くお前らというヤツらは。一体いつ、俺が武器なしでは何も出来ないヘナチヨコだと言ったんだ？」

琉がそう言うと、彼を取り囲むメンシエ教徒達が笑いだした。

「負け惜しみか、彩田琉之助！ 虚勢を張っても無駄だぞ？」

「だったらお前、かかって来い！」

琉は声を上げた者を指差し、挑発した。挑発されたメンシエ教徒はナイフを抜き、琉に襲いかかる。

「面白い、やってやろうじゃねえか……ぐふっ！？」

ナイフの一撃をかわし、琉の手刀が彼の首筋にヒットした。そして琉は腰ために拳を持って行き、そのまま独特の構えを取ったのである。

「何だその構えは！？」

「お前達、“空手”も知らんのか？ だったら教えてやるからかかってきな！」

取り囲んでいたメンシエ教徒が一斉に琉目がけて襲いかかった！ 琉は早速近くにいた者に一撃食らわせると、背後にいたメンシエ教徒を回し蹴りで一掃、更にその場で高く跳び上がるなり正面にいたメンシエ教徒の顔面を蹴り倒した。倒されたメンシエ教徒に巻き

込まれ、背後にいた者達までもが倒れて行く。

「ロツサ！ あの扉の何処かにジャマー装置がある、破壊してくれ！」

「任せて！」

そう言われるとロツサは液化し、何人かのメンシエ教徒に体当たりを食らわせながらあの扉まで向かった。数に任せて攻撃するメンシエ教徒。しかし、この比較的狭い浄化室において、大量に戦闘要員を繰り出したのはメンシエ教側の判断ミスだったと言わざる得ない。地の利は完全に琉にあった。

「これの、何処かに！」

ロツサはガラスの壁に付いた扉にしがみつくと、眉間の目を開いて装置を探し始めた。その間にもメンシエ教徒の執拗な攻撃が続く。

「そつちに行かせるワケにはいかん！ トアーツー！」

叫びと共に跳び上がる琉。琉は手前のメンシエ教徒の肩に跳び乗ると、彼の脚は次々にメンシエ教徒の肩に襲い掛かった。蹂躪されるメンシエ教徒の上を駆け抜け、琉はロツサの元へ向かう。彼が着地した途端、メンシエ教徒達は蹴られた個所を押さえて次々に倒れ込んだ。

「必殺・飛石粉碎蹴り！」

飛石粉碎蹴り。相手の肩を蹴り付け、その反動を利用して飛石を渡るかのように敵から敵へと素早く跳び移り、着地と共にダウンさ

せるといふ琉の編み出した技である。

「ロツサ、装置は見つかったか……チッ！」

ロツサに駆け寄った琉だったが、そこにナイフの刃が一閃した。寸手の所でかわした琉だったが、逆立った髪の一部が宙を舞った。

「彩田琉之助、息の根を止めてやる！」

「因縁の対決か。来い！」

琉はすぐに構えを取った。アヤメも片手にナイフ、もう片手にスタンガンを構えて対峙する。

「ここであつたが百年目……あの時の屈辱、晴らさせてもらうよ！」

アヤメのナイフが琉に斬りかかる。素早い斬り込みをかわす琉だが、同時に彼女のスタンガンがロツサに襲い掛かった。

「まずい！」

琉の手がすぐさまアヤメの腕を掴み、キリキリと締め上げる。スタンガンは地面に落ち、琉のブーツが容赦なく踏み壊した。

「クッ!? ……やってくれたわね!!」

アヤメはナイフを逆手で構えると、琉の喉元目がけて斬りかかる。体を軽くそらしてかわす琉だが、その横から他のメンシエ教徒がナイフの先端を向けて来る。琉はそのナイフを持った腕を掴むとアヤ

メに向け、更にナイフの持ち主の腹部に肘鉄を食らわした。

「邪魔しないで、コイツはあたしが仕留めてやる!」

「チームワークがよろしくないようだな、君達は」

「う、うるさい!」

呆れた顔で挑発する琉に、食ってかかるアヤメ。だが、この後二人の目に写ったのは思いもよらぬ異常な事態であった。

「しかしアヤメ、そんなことを言ってる間があつたら早くコイツを……うッ!？」

ナイフを取られ、肘鉄を食らって突つ伏しているメンシエ教徒。彼がアヤメに忠告をしようとした時、それは起きた。

「う、うがああッ!？ か、体が、体が動かない!!」

喉元、胸、腹部、あらゆる個所を押さえて彼はのたうち始めた。彼だけでない。他のメンシエ教徒も突然苦しみ出し、床の上で転げ回り出したのである。

「しまった! こんな時に!？」

アヤメの表情に焦りが生じた。

「き、切れた……。は、早くし、し……」

「おい、一体全体どうなってやがるんだ!？」

あまりに異常な光景に、琉は目を見開いた。突如苦しみ出すメン
シエ教徒達、彼らに何があったのか、何故アヤメは平然としていら
れるのか、そして何より琉とロツサはこの地下聖殿を脱出すること
は出来るのであろうか！？

『地下聖殿に潜り込め』 急（後書き）

メンシエ教徒に一体何が起きたのか！？　そして琉とアヤメ、因縁の戦いの行方やいかに！？　そして今回、琉は空手が出来ることが判明。実は素手でも結構戦えるんですw　しかしピンチに変わりはありません、彼の運命やいかに！？

～次回予告～

「これが浄化の効果だと言っのか！？」

「琉、早く！！」

『魔の蛇に飲まれるな』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

琉の行きつけの工房。その職人であるアルとゲオの家族が、メンシエ教徒にさらわれた。救出に協力することになった琉とロツサ。ハルムに襲われつつもオアシスに到着した一行は、ついにメンシエ教の“地下聖殿”を発見する。体格がでかい職人二人に代わって潜入した琉とロツサ。地下4階の浄化室で、ついに職人二人の家族を発見した！そしてメンシエ教徒達を蹴散らして脱出を図った、のだが……。

『魔の蛇に飲まれるな』 序

突如其来しみ出したメンシエ教徒達。琉は何が起こったか分からず、うろたえていた。

「おい、どうした、大丈夫か……おわッ!？」

琉は足元にいた一人を抱えたが、抱えられた教徒は琉を払いのけて更にのたうち回っていた。浄化室はまさに地獄絵図と化していたのである。

「琉、装置を破壊したよ!」

「でかしたロッサ、すぐにズラかるぞ! パルトネール!」

琉が手をかざして叫ぶと、ジャマーの呪縛を解かれたパルトネールが勢い良く飛び出て来た。熱も発しておらず、琉はすぐにそれをサッシュに差すとロッサやアル達の家族と共に浄化室を駆け出した。

「待て! まだ勝負は終わっちゃいな……くッ!？」

「し、神恵水はどこだ! 出せ、早く出せ……うあああ!」

後を追いかけてようとするアヤメ。だが、足元にいたメンシエ教徒に捕まって動けなくなってしまった。

「アル、ゲオ、聞こえるか!? 君達の家族なら無事だ、今外に向かっている! ……当然あちらには見つかった、応援頼む!」

浄化室の扉を閉め、琉は電話をかけた。そして電話を仕舞い、今度は牢獄にいる他の種族の囚人達に声をかけた。囚人達は怯えきっており、それどころかその場から動けない用にも見える。

「どうしたんだ？」

琉は檻の一つを開けて中に入った。中にはトヴェルクの青年が囚われている。相手は完全に怯えきっており、檻の奥で縮こまっていた。

「安心してくれ、俺はヒト族だがメンシエ教徒ではない。何で外に出ないんだ？」

「わ、輪が……」

そう言われ、琉は囚人の腕にはまっている腕輪と脚輪に気が付いた。

「これ、腕と脚の力を奪ってる。外さないと……」

ロッサが言う。額の眼で囚人を調べたらしい。一方でアルとゲオの家族達には腕輪はついていたものの脚輪が付いていなかった。

「だったらこうするまでだ、ちょっと腕を貸してくれ」

そう言っ琉は腕を差しださせると、腕輪目がけて手刀を入れた。たちまち壊れた腕輪が床に散らばってゆく。

「てやッ！ よし、動くか？」

もう片方の腕輪も外し、琉は囚人に聞いた。

「……は、はい！　ありがとうございます！！」

「じゃ、脚は外せるかい？」

囚人は自分の脚輪を持つと手で引きちぎった。ホッとした表情の琉。

「よし君、皆の腕輪と脚輪を外して回ってくれ。ロツサも頼む、外れたら他の方達のも外すように言ってくれ！　皆でここを脱出するんだ、良いな！？　俺は外を見張っておこう」

琉は出口に向かうと、外の様子を探り始めた。案の定、メンシエ教徒達が高举して向かって来る。

『無駄なあがきを。この地下聖殿にはまだ百人ものメンシエ教徒がいる。お前がここを脱出するのは不可能だ、諦めて裁きを受けるが良い！』

再びあの声が響く。琉はその声に向かって叫んだ。

「良い加減、姿を現しやがれ！　アンタには聞きたいことが山ほどある！」

『死人に口なし。者ども、やれ！』

メンシエ教徒達は拳銃を構えて向かって来る。それを見た琉はパルトネールからトリガーパーツを外し、パルトネールの中央部を引き延ばして軽く折り曲げた。

「パルトブーメラン！」

扉の影から、琉はパルトネールを投げつけた。回転しながら飛翔するパルトネールが、次々に拳銃を叩き落としてゆく。しばらくして戻ってくるパルトネールだったが、琉はひたすらに投げ続けた。とにかく今は、時間を稼ぐ必要があるからだ。

「琉、全員のを外したよ！」

「よし、ちょっと待つてな。パルトネール・シューター！」

ロツサの声を聞いた琉はトリガーパーツを再びパルトネールに装着、メンシエ教徒達の正面に狙いを定めた。

「パルトスパイダー！」

琉が引き金を引くとパルトネールの先端から赤い光弾が放たれた。そしてメンシエ教徒達の目の前で光弾が弾け、蜘蛛の巣状に広がったのである。狭い廊下に一面広がった蜘蛛の巣は、次々にメンシエ教徒達を引っ掛けていった。

「3……2……1！　よし、行こう！」

次々にパルトスパイダーに突っ込んで、バタバタと床に伏せてゆくメンシエ教徒達。薬によって体が強化されて足の速さも常人を遥かに上回る彼らだが、その分急には止まれないことを琉は見抜いたのである。パルトスパイダーが消えるのを見計らい、琉はロツサと囚人達に合図を出した。一行は一斉に走りだした。

「ここが階段か。とにかく上だ、上を目指すぞ！」

階段を見つけ、駆け上がる琉達。駆け上がった先には伏兵が待ち構えていた。

「ここから生きては帰さん！ 異端者め、死ねい！！」

「死ねと言われて、素直に死ぬヤツがいるかッ！！」

琉はナイフが来るよりも早く相手の額にパルトネールを突き付け、パラライザーを撃ち込んだ。

「まだいるかもしれん、皆固まって動いてくれ！」

地下三階。階段を昇りきった先にあつたのは、ベルトコンベアー等の機械が大量に置かれた奇妙な部屋であつた。

「これは……工場？ 聖殿とか言いながら、奥にこんなモノを隠していたのか」

銃を構えたまま、琉は周りを見渡した。機械だけではない、この広間には他にもビーム砲、燃料タンク、装甲といったモノが置かれていた。

「琉、何かこれに見覚えがあるんだけど……」

ロッサがあるモノを指差した。そこにあつたのは巨大なシャーレのような機械で、中にビーム砲を備え付けてあつた。

「これは……無人艇！？ そうか、ヤツらの目的が分かったぞ！」

ヤツらはここで新しい武器を開発、量産していたんだ。そしてその作業のために、異種族の力が必要だったというワケだな。しかしこんな物騒なモノ、表で堂々とは作れないし誰も協力しようとはしないだろう。だからこの島の異種族を無理矢理さらって、秘密裏に作ってたというワケだ」

『御名答だな、異端者よ』

あの声が工房中に響き渡った。身構える琉とロツサ。怯える異種族達。

「じゃあ観念して姿を現すんだな！ お前さんの計画はこれまでだ、諦めて警察にでも出頭することをお勧めするぜ！！」

タン力を切る琉。しかし相手は意外なことを言い出した。

『よろしい、ならば地下2階の大聖堂まで来い！』

「ほう、話が分かるじゃねえか。では、遠慮なく行かせてもらおうぞ！」

琉は一行を引きつれて行こうとした、が

「ここから先には通さん！ 異端者よ、ここで朽ち果てるが良い！」

「やっぱそうなるのか」

そう簡単に行かせてもらえない。工房のあちこちには伏兵が潜んでいたのである。広いフロアだけに、これまでより一回り多くの敵に包囲される一行。琉はパルトネールを構えて睨みつけた。

「さっきはやってくれたわね、彩田琉之助。でもここまでよ!」

その中には、先程浄化室で交戦したアヤメも混じっていた。

「しつこい女は嫌われるぜ、お嬢さん?」

琉はパルトネールを構えつつ言った。口調こそ軽かったが、その顔には焦燥が浮かび上がっていた。

『そやつらに裁きを与えよ! 特に異端者と悪魔だけは生きて帰すな!!』

一斉に武器を構えるメンシエ教徒達。万事休す、そう思われた時だった。工房内に突如衝撃が走ったのである。壁にはヒビが入り、ガラガラと音を立てて崩れ始めた!

「馬鹿な!? この地下聖殿が、崩れ出しただど!」

メンシエ教徒は口ぐちに騒ぎ始めた。いきなり地下室の壁が崩れ出すなどと、誰が予想出来ようか。一方で琉とロッサの口元は、何処か不敵な笑みを浮かべている。

「来た……」

「真打ち登場だぜ……」

『な、何だ!? 何が起きたのだ!』

カメラにも映っていたらしい。放送される声まで慌てふためいて

いる。そうしている間にも壁は砕け、たちまち砂煙が上がりだした。砂煙の中に浮かぶ影、そしてその中から響く声。

「皆あ、助けに来たよぉー！」

「ドリルは漢のロマンだぜいー！」

『魔の蛇に飲まれるな』 序（後書き）

囚人救出！ そして壁を破って現れたのは何者か！？ そしてタイトルにある「魔の蛇」とは何なのか？ 第九章、お楽しみに！

『魔の蛇に飲まれるな』 破（前書き）

アルとゲオの家族達を発見し、囚人達を連れて脱出を図る琉とロツサ。地下3階で多数のメンシエ教徒に囲まれるも、突如壁が崩れだした！！

『魔の蛇に飲まれるな』 破

「アル、ゲオ！」

「あなた！？」

「パパ〜！！」

姿を現したのはそう、陸上で待機していたアルとゲオだったのである。琉とロツサ、そして囚人たちの顔に安堵の表情が浮かび、口ぐちに彼らのことを呼び始めた。

「さあて、行きますか〜！」

二人は肩をバキバキと鳴らし始めた。途端にメンシェ教徒達の顔から血の気が引いてゆく。散々傷め付けた囚人と違い、こちらの二人はピンピンしているからだ。例え薬物による身体強化があつたとしても、本来ヒト族を上回る力を持つ上に武装までしている彼らの登場はまずいといしか言いようがない。

『何をしている！ 地下聖殿を壊した狼藉者に裁きを下せ、決して生きて帰すな！！』

部屋中に怒号が響き、メンシェ教徒達はナイフやスタンガン、更にはハルバードを手にして一斉に襲い掛かって来た！

「ロツサ、彼らをなるべく安全な所へ！！」

「分かった！！」

琉はロツサに囚人達の避難を任せ、メンシエ教徒達の前に立ちはだかった。

「ロツサ達に近づくんだったら、まずこの俺を倒してからにしろ！」

「よし、望み通り血祭りにあげてやる！」

挑発に乗ったメンシエ教徒達。琉は少し笑みを浮かべるとパルトネールを引き延ばし、軽く折り曲げた。

「パルトブーメラン！！」

大きく振りかぶり、パルトネールを投げつける琉。パルトネールは回転しながら飛翔し、メンシエ教徒達に強烈な打撃を加えてゆく。鈍い音とともに次々に倒れ込むメンシエ教徒達。そしてパルトネールを投げつつ、琉自身も手前にいるメンシエ教徒に挑みかかった。琉の正拳突きが眼の前の敵に突き刺さり、更に彼の腕が相手の首に回ったかと思いきやそのまま投げ飛ばした。その背後から、ハルバードを持ったメンシエ教徒が襲い掛かる。

「うおつと！？」

琉がその場で転がると、刃は床に叩きつけられた。メンシエ教徒が刃を持ち上げると、床にはくつきりとその跡が刻み込まれている。あと少しでも遅かったら、琉の頭がこうなっていただろう。

（チツ、ただでさえリーチが長い上に刃物まで付いてやがるか……。おっ？）

ハルバード持ちの教徒に苦戦する琉の目に、勢い良く回転しながら接近してくる黒い棒状のモノが見えた。何とも良いタイミングで、パルトネールが戻って来たのである。琉はパルトネールを掴み取る、素早く音声コードを入力した。

「パルトネール・チェイン！」

パルトネールの先端が変形し、鉤の付いた分銅が出現した。琉はメンシエ教徒から一端距離を置くと、ハルバード目がけて分銅を放った。たちまちハルバードの柄に鎖が巻き付いてゆく。琉は左手で鎖を引き、ハルバードを絡め取った。

「痺れるぜ、覚悟しろよ……。パルトショックー！」

琉の左の掌がパルトネールの柄を叩く。途端にその鎖を電流が走り、ハルバードを伝ってメンシエ教徒に流れ込んだ。

「うあああッ！？ あ、アヤメーッ！！」

相手はハルバードを握ったまま鋭い悲鳴を上げ、卒倒した。

「琉ちゃん、今のはやりすぎじゃあ……」

「安心しろ、手心は加えてある……。しかしアヤメって？」

近くでメンシエ教徒を相手取っていたアルが琉に言った。琉は言葉を返すと分銅を引っ込め、パルトネールを通常形態に戻した。そして近くにいるメンシエ教徒を打ちすえ、その先端がメンシエ教徒の鳩尾を捉えてゆく。

「お父さん！？　しつかりして！！」

一方でアヤメは父親の元に駆け寄った。その体を揺すっても、痙攣しており戦えそうにない。

「彩田琉之助……覚悟！！」

アヤメは怒りに震えつつ、拳銃を取り出してすぐさま琉に向かつて照準を合わせた。琉は近くのメンシエ教徒達の相手をしており、背後から銃で狙われていることに全く気付いていない。ついにアヤメはその引き金に指を置いた。危うし琉！　だが、アルがそれに気が付いた！

「琉ッ、危なあい！！」

「アルッ！？」

銃声一発。弾は飛び出してきたアルの肩に当たり、その鱗が碎けて宙を舞った。弾は体内に留まらず、ひしゃげて地に落ちている。被弾したアルの肩から、砂状の血が流れ落ちていた。ディアマンの血は空気に触れると砂上に変化するためだ。ガツクリと膝を突くアルに、琉が駆け寄って行く。

「おい、大丈夫か！？　……許さんッ！！」

「しまった！？　ええい、今度こそ！！」

アヤメがトリガーを引くよりも速く、琉のパルトブーメランが銃を弾き飛ばした！　しかしアヤメも負けておらず、ナイフを2本手に持つと、琉目がけて斬り付ける。琉はパルトネールをサーベルに

変形、ナイフの刃を受け止めた。

「アル、大丈夫かッ！」

ギユイン、という音と共にゲオが近付いてくる。ゲオは脚の装備に付けられたローラーで移動、腕に付いた装備の先端をドリルから拳状に変形、次々にメンシエ教徒を殴り倒しつつ突き進み、アルの元へと駆け寄った。

「ゲオ……オイラは大丈夫だあ。聖弾は、入り込んではいないよお」

「そうか、良かった……。しかしこのままじゃラチが明かねえ、アレを使うぞ。ナックルクエイカー！」

ゲオは装備に付いたスイッチを押して更に音声コードを入力、すると装備された“拳”にエネルギーが充填されてゆく。

「くそっ、斬り込みが他と比べて速い上に鋭いな……。君だけが、神恵水の効果がまともに出てんのは」

「ふん！ アレを飲めてたら、あと2年早く生まれていれば、アンタなんかあつという間に仕留めてやるというのに……！」

説明せねばなるまい。メンシエの教義では、神恵水は25歳になるまで飲むことが許されていない。何故なら、この薬は身体能力を著しく向上させるものの、25歳未満が服用した場合は副作用で死に至る危険性が高いためである。

（しかし強い……。女相手に本気を出せないのもあるが、訓練を積んだワケでもないのにここまでやるとは……。もしや彼女、“アレ

”か……！？”

琉はナイフを防ぎつつ、遂にそのサーベルの刃でナイフを弾き飛ばした。ナイフを弾かれてひるむアヤメ。しかしそこに、他の教徒のナイフが斬りかかる！

「どいて！ そいつはあたしがやる、だから手を出さないで！」

「こっちは助けが欲しいよ！」

琉はナイフをサーベルの刃で叩き落とすと、その柄で素早く鳩尾を突いた。更にトリガーパーツを取り出すと、パルトネールをシューターに変形させ、アヤメに突き付ける。しかしアヤメの手にも拳銃が握られていた。互いの額に銃口が当たり、二人は無言のまま睨み合った。だが、そこにゲオの声が響く。

「琉ちゃんどいて！ 一気に片を付けっから！！ でやああーッ！！」

ゲオの拳が床を叩く！ 途端に床を衝撃波が走り、破片やメンシエ教徒を飛ばして引き裂いてゆく。

「何！？ しまった！！」

アヤメの気がそれた瞬間を見計らい、琉は引き金を引いた。途端に赤い閃光がアヤメの額に突き刺さり、そのまま倒れ込んでゆく。彼女の拳銃がむなしく宙に吠え、アヤメは完全に意識を失った。見渡すと、フロアにいるメンシエ教徒のほとんどは床に転がっている。先程の衝撃波、ナックルクエイカーが効いたらしい。

「ロツサ、無事か！？ 外に出るぞッ！！」

琉は階段に走り、囚人達を先導した。アルとゲオは家族との再会を喜んでいる。その目には大粒の涙を浮かべており、いかにこの瞬間を待っていたかが伺えた。

「琉ちゃん、ロツサちゃん、今日は本当にありがとう！ お陰でオイラ達の家族、そして仲間達は無事に帰れるよぉ！！」

「琉ちゃん、アンタは本当に見上げたヤツだぜ！ 帰ったらまた御馳走すっからな！！」

階段を駆け上がりつつ、感謝の言葉を並べる二人。しかし琉の表情は依然として厳しいモノであった。

「二人とも、まだだ。本当に喜べるのは家に帰ってからだぜ。ここはまだ地下聖殿、早く脱出しないとな！」

力強く頷く二人。階段を昇った先に待っていたのは、また広間であった。しかしさつきとは違い、パイプオルガン等の設置された巨大な礼拝堂であった。天井まで20mはあるうかという高さに加え、所々にメンシエフラッグが掲げられており、更に堂々と飾られた彫刻が更に荘厳さを際立たせている。まさに宗教の総本山とでも言いたくなるような感じであった。

「まさに圧倒的な光景、か。しかし長居は無用だぜ、走れ！」

出口目がけて走る琉とロツサ、アルとゲオと囚人達。琉とロツサが扉をこじ開けると、その先にはまた細い通路が続いている。その先には長い長い階段があり、琉はアルとゲオを先に昇らせた。二人

が駆けのぼると、階段の上からはやがて光が差ししてきた。目論見通り、ここが出入り口だったのである。今のところ、メンシエ教徒の様子は無い。

「よし、俺はここに残って見張っておく。ロツサは彼らを連れて先に外へ出てくれ！ そしたら俺も続くから！！」

「琉、わたしも残る！ わたしがいるとまた狙われるかも……」

「しかし……。まあ、良いか。外にヤツらがいないとも言い切れん」

ロツサは自ら残ると言いだした。琉は渋々承諾すると、一緒に見張り始めた。今のところ、メンシエ教徒達が大量して襲って来そうな気配はない。

「ねえ、琉。声だけ出してたアイツ、いないね」

「ああ、そうだな。しかし、どう来るか分かったモンじゃないからね、気が抜けないぜ！ ……お、皆出られたか！！」

琉とロツサが喋っている間に、最後の囚人が階段を駆け上がり外に出て行った。それを見届けると、琉とロツサはすぐさま出ようとした、が

ガシャン！

大きな音と共に通路が閉じられた。重いシャッターが通路を完全に塞いでおり、脱出することもままならない。琉とロツサはシャッターをガンガンと叩き始めたが、シャッターはビクともしない。

「アギジャベ（畜生）！　ハメられたか！！　ロッサ、シャッターを溶かせッ！！」

「ん……！！　ダメ、ビクともしない……」

「フハハハハ！　彩田琉之助、並びにヴァリアブル！　私はワインダー、ようこそ我が地下聖殿・礼拝堂へ！！」

琉達と礼拝堂のステージに、スポットライトが当たった。琉とロッサの目線の先には豪華なローブに身を包んだ、中年と思しき男が立っていた。

「お前か、さつきから放送で色々言ってきたのは！　……声が若い割にオッサンだったんだな……」

「うるさいぞ中学生、私はこれでも25だ！　さてふざけるのもここまでだ、貴様ら二人は私直々に“浄化”してやろう！！」

そういつと顔の老けた男——ビショップ・ワインダーはステージを降りて来た。そして懷からあの石板を取り出したのである！

「あれは！　……まさかお前も！？」

「気付いた所でもう遅いわ！　聖なる煙で浄化してくれよう……」

そういうなりワインダーはその場で宙に浮き、琉とロッサを見下ろした。そして石板を掲げると、たちまち眩い光が部屋中に広がり始めたのである！

『魔の蛇に飲まれるな』 破（後書き）

あの悪夢が再び！ 果たして琉とロツサの運命やいかに！？

『魔の蛇に飲まれるな』 急（前書き）

地下聖殿脱出を試みる琉、ロツサ、アル、ゲオ、そして囚人達。しかし出口に達する寸前で琉とロツサが閉じ込められてしまう。そして遂に地下聖殿の主、ビシヨップ・ワインダーが琉とロツサの前に姿を現したのであった！

『魔の蛇に飲まれるな』 急

「もしもし、ちょっとトラブルだ！ あちらのお偉いさんが出てきて、そのデカくなり出して……とにかく、何言ってるか分からんかもしれないが、とにかく危険だからシャッターの所まで来るなよ？」

「……うわっ！？」

礼拝堂内に広がる光。やがてワインダーのシルエットが、見る見るうちに巨大なモノへと変化してゆく。琉とロツサは手をかざしつつ、ただただ戦慄と共に見ているしかなかった。

「コイツもか！？ コイツもなのか！？」

眩い光が収まると、ワインダーはその巨大なる体格を現した。身長約13m、以前戦ったゴライアスと比べて手足が長く、優美な印象を受ける。装甲を纏ったその身体には、これまた装甲に包まれた巨大な蛇が巻き付いており、舌を出しつつこちらを睨んでいる。

『神の力を以て、貴様らに天罰を下してくれる。いくぞ………！』

キシャーッ！ という音を出し、蛇がその口を開いた。すぐに身構える琉とロツサ。すると蛇の牙から真っ赤なガスが噴射され、二人に襲い掛かった。

「うっ！ こんな密室で毒ガスだと！？」

「琉、早く！！ こっち！！」

スカーフで口元を覆う琉を、ロツサが引っ張ってガスから引き離

す。ガスがシャッターに当たった瞬間、シャッターは見る見るうちに泡を発生して溶け始めた。

「見たか！　これが聖なる煙の力、お前たちは白い泡となって浄化されるのだ！！」

聖なる煙。その正体は、あらゆる物質を溶解する強力な毒ガスである。これをマトモに吸い込んでしまえば最期、体内から浸食されて分子レベルでの溶解を起こし、数秒で跡形もなく消滅してしまう。なお、遺跡で発見されるガス室は特殊素材で作られていることが判明しており、ガスによって内部が傷んだり、外にガスが漏れることはないと考えられている。恐らく、浄化室もそうなのであろう。

「お前は、これで何人ものトヴェルクやダイヤモンドを虐殺したのかッ！」

「残念ながら、ここではまだ誰も殺してはおらん。彩田琉之助、貴様に邪魔をされたためにな！　だから代わりに、貴様ら二人が実験台になるが良い！！」

蛇が再び口を開く！　するとロツサは琉を抱えると、翼を広げて宙に浮いた。

「琉、何とか天井に穴を開けることは出来ない？　そうすれば……」

ロツサは琉の耳にひそひそと何かを話し始めた。

「一応、ブラスターを使えば……やってみるか！」

吹きつけられる煙。煙は彫刻やタペストリーにも広がり、荘厳だ

った光景が見る見るうちに殺風景になってゆく。しかしその様子を見た琉は、あることに気が付いた。

（このガス、重いな。さつきから噴射されると拡散せずにはすぐに落ちてはモノを溶かしている。ということは、宙に浮けば回避出来るということか）

琉はロツサに抱えられたまま、パルトネールを取り出すとすぐにトリガーパーツを取り付けてシューターに変形させた。そしてレバーをPからBに切り替えると、ワインダーの頭上に狙いを定めて接近する。

「3……2……1……！　パルトブラスター！！」

パルトネールから放たれた青い光弾が、ワインダーのすぐ上の天井を貫いた！　たちまち天井が崩れ、ガレキがワインダー目掛けて降り注ぐ。そこにロツサの鞭状に変形した指が、崩れた天井に更に追い打ちをかけた。打ち砕かれ、更に多くのガレキがワインダーに降り注ぐ。

「今だロツサ！！」

琉の言葉を受け、ロツサが天井の一番薄くなった個所に突進する。ロツサは全身を液化させると琉の体を再び包み込み、自ら緩衝材となると天井目がけて突っ込んだのである！　やがて、二人の目にはアルカリアの眩しく燃える太陽が目には焼き付いた。

「やった、上手くいった！」

作戦成功に喜ぶロツサ。ロツサの体から分離した琉は、その場で

思いきり息を吸い込むと言った。

「フハアーツ！ 地上の空気が、いつも以上に旨く感じるぜ！
…おっ！？」

二人が外に出ると、遠くの方から二つの影がこちらに駆け寄って来ていた。

「おおーい、琉ちゃん、ロツサちゃん！」

「おい、無事か！？ 大丈夫だったか！？」

琉達も駆け寄ろうとした……が！

ブシャアーツ！！

突如地面から吹き出した赤い煙。4人の足取りがピタリと止まった。

「琉ちゃん、これは一体！？」

「気を付ける！ あれを吸い込めば最期だぞ！！」

各々武器を構え、後ずさりを始める4人。やがて煙の引き出した場所から、あの蛇が、そしてワインダーが姿を現した！！

『よくもやってくれたな！ 貴様らまとめて罰を下してやるから覚悟しろ！！』

まさに怒り心頭、ワインダーに絡みついた蛇は鎌首を上げ、琉と

ロツサ目がけて飛びかかって来た！！

「確かに俺は旨いモノ食ってるからな、俺自身も旨いかもしれん……て、こっち来んな！！」

ギリギリで毒牙をかわす琉。しかし蛇は、なおも琉を呑みこまんと襲い掛かる。

「琉、掴まって！」

ロツサが飛来する。琉の手を取ると、そのまま空へと舞い上がった。

「アタビチグワ（この野郎）！ 又チヌカリンドウ（命抜き取るぞ）！？」

興奮した琉。ロツサに掴まったまま、島言葉全開でタン力を切りつつパルトネールを取り出した。ロツサは琉を抱えたまま飛び回り、ドレスの裾から出現した尻尾を手にとつと、ワインダーの“本体”目掛けて高熱の炎を放った。

「そこだ！ パルトブラスターツ！！」

琉のパルトブラスターが追い打ちをかける！ 遂に、ワインダーの胸から上が見事に吹っ飛ばされた。

「よし！」

ガッツポーズ。蛇は地面に落ち、下半身だけになった巨体。これでほとんど無力化したと言えるだろう。脚だけが、フラフラと琉達

目がけて近付いてくる。しかし次の瞬間だった。

『馬鹿め。これでやられると思ったか!』

前言撤回。安心したのもつかの間、何と見る見るうちにワインダーの体が元通りになってゆくではないか!

「ひいいッ、アギジャビヨー（なんてこった）!？　じゃあ、石板は一体何処なんだ!！」

琉の声が裏返し、顔からは血の気が引いてゆく。空中に浮かぶロツサの腕の中で、琉は震える手を押さえつつパルトネールを握り直した。しかしスパイダーとブラスターを何度も撃ったせいで、パルトネールのエネルギーは残りブラスター一発分しか残っていないという状況である。ただでさえ詰め替えは大きな隙が生じる上、手持ちの未使用電池は残り一つ。

「ロツサ、石板の位置は!？」

ロツサの眉間がグワツと開く。この眼はロツサ自身の力を消耗するため、滅多やたらに使うことは出来ない。

「嘘……本体の何処にもないなんて!？」

しかし大量のエネルギーを消耗したにも関わらず、ロツサの口から出たのは信じられない結果であった。これではいくらブラスターを撃つても炎で焼けども、効果があるとは考えられない。

「ええい、これでも食らえッ!！」

地上にて、地下聖殿から持ち出したミサイルポッドを抱えたアルとゲオが飛び出してきた。白い軌跡を描き、複数の小型ミサイルがウィンダーに襲い掛かる。次々に被弾するミサイル。ウィンダーの体中から爆風が上がる。ロツサは琉を抱えてその場から飛び去り、アルとゲオの背後に着地した。

「部分破壊がダメなら、全身を吹き飛ばすまでだッ！」

ゲオが言う。力づくだが、ある意味真つ当な考えとも言えるだろう。ミサイル攻撃に耐えきれず、ウィンダーの全身は遂に砕け散って行った。その破片も、次々に塵状となって消えてゆく。

「ついにやったか！」

アルとゲオが拳を掲げ、歓喜の声を上げた。琉もやっと胸を撫で下ろし、ホッと息をつく。だが、ロツサだけは違った。

「ダメ、まだいる！」

「え？ ヤツなら全身が吹き飛んだはずだぞ……！？」

突如震えだす砂の大地！ 再び身構える4人組。そして勝利による歓喜のムードをブチ壊し、蛇を伴ったウィンダーが地中より出現したではないか！

『つくづく馬鹿なヤツよ。良いか、私は不死身なのだ！！』

戦慄する4人。ここまで恐ろしいことが果たして他にあるだろうか。だが、この様子を見ていた琉はあることに気が付いたのである。

「ロツサ、もう1回眼を使ってくれ！　しかし本体ではなく、あの蛇だ！」

「蛇？　分かった……」

ロツサの眼が再び開く。そしてその視線を、人型をした方ではなく蛇に向けたのである。

「……やっぱり！　本体はあのおつきい方じゃない、蛇の方だったんだ！」

「そうと分かれば話は早いぜ！　ロツサ、行くぞッ！！」

ロツサは翼を広げ、琉を抱えて飛ぼうとした……が！

「うッ！？　……ダメ、体が……乾いて……エネルギーも……うう……」

「ロツサ！？　しまった、水分とエネルギーか！！　アル、ゲオ、ロツサをオアシスに！！」

琉はロツサを抱えてアルとゲオに渡しながら言った。

「琉、ヤツの石板は……アゴの……下に……」

「もう良い、これ以上喋ったらダメだ！　アル、ゲオ、早く！！」

それだけ言うと琉は蛇の頭を見据え、パルトネールをチェインに変形させると蛇目がけて駆け寄った！

「琉ちゃん！？ よせ、死に行く気か！！」

ゲオの忠告を無視し、琉はなおも敵に向かって走り寄る！

『遂に自暴自棄になったか！ 直接握りつぶしてくれる！』

「やれるモンならやってみろ！ 良いかワインダー、不死身なのはこの彩田琉之助の方だアッ！！」

迫りくる手に飛び乗り、琉は更にチェインの分銅をワインダーの首に放って鉤を引っ掛け、その体をよじ登る！

『狂ったか彩田琉之助！』

「いいや、俺は正気だね！」

ワインダーの長い腕が琉を払おうとする。それをかわしつつ、琉はワインダーの首元にしがみ付き、後頭部へと移動した。するとワインダーの蛇が、こちらにむかって鎌首を上げている。

『おのれ！』

牙をむき出し、蛇が襲い掛かる！ しかしワインダーの体目がけて、煙を噴射することは出来ない。そこで琉はパルトネールをサーベルに変形させると今度は蛇の頭にしがみついた。

「物騒なモンは没収だ！」

暴れる蛇の頭にしがみ付き、琉が剣を振るう。すると蛇の牙が、上あごの一部と共に切断されて砂に落ちた。

『馬鹿な！ 私の牙がッ！！』

のたうち回る蛇から飛び降り、琉はパルトネールを構え直すと呼吸を整えた。

「ハアーツ……。パルトヴァニッシュ！」

音声コードを受け、エネルギーを帯びた刃が光を放ち始める。サーベルを横に構え、琉はのたうつ敵に刻一刻と近づいてゆく。

『やめろ……。！ やめてくれ……。！！』

蛇がダメージを受けたのに伴い、巨大な人型の方もガツクリと姿勢が崩れている。琉は蛇の下あごに鱗に紛れた石板を確認すると、躊躇せずに真っ直ぐ刃を突き刺した！ 途端に大人しくなる蛇。

『ぐわあ！ おのれ……。』

最期の力を振り絞り、ワインダーの巨体が琉目がけて腕を振り、払おうとする。しかし琉はその場で跳び上がり、腕をかわすと真っ直ぐに蛇を見下ろした。そのカエシのある刃は、一度突き刺すと貫きでもない限り引き抜くことが出来ない。次の瞬間、琉は飛び蹴りの姿勢を取りつつ、体をひねり始めたのである！

「必殺・旋風螺旋蹴りッ！！」

琉の脚がパルトネールに当たる。靴底の滑り止めがパルトネールに合わさり、彼の体のひねりと共に刃が回され、刺されている石板が砕かれてゆく。

『ぐわあああああー!』

鋭い悲鳴と共に崩れてゆくワインダーの体。蛇の体も崩れてゆき、その胴から元のビショップ・ワインダーが姿を現した。

「き……さ……ま……」

ワインダーはなおも琉に手を伸ばす。

「貴様を……消せば……。私は……ラディアの……教皇になり……
この世界の……頂点に……」

何かを言いかけ、ワインダーはこと切れた。

「生臭ボウズが、何が世界の頂点だ。お前のようなヤツが頂点に立てても、待っているのは孤独だけなんだぜ……」

琉はワインダーを抱えると、近くの倉庫に放り込んだ。

「琉ちゃん、大丈夫!？」

「琉! 良かった……」

アルとゲオ、そしてロツサが駆けよって来る。かくして4人の長い1日が、遂に終わりを迎えたのであった……。

『魔の蛇に飲まれるな』 急（後書き）

遂にワインダーとの決着が付きました！ ここまで長かったな……。さて、来章の M y s t i c L a d y は？ w

↓次回予告↓

「汚物は消毒するように、ナメクジは駆除せねばならん！」

「こら、ダメでしょ！」

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

砂の国アルカリア。その主要な島であるソディア島を訪れた琉と口ツサ。二人は海底遺跡で重要な手掛かりを発見するが、メンシエ教の妨害により探索は続行不可能に、そして世話になっている職人の家族がメンシエ教徒による拉致事件に巻き込まれてしまう。二人は職人であるアルとゲオと共にオアシスに向かい、ハルムの襲撃やビシヨップ・ワインダーの攻撃をかいくぐって遂にメンシエ教地下聖殿を発見、壊滅させたのであった！ さて、今回のお話は？

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 序

メンシエ教による島民拉致事件から二週間が経った。地下聖殿に残っていたメンシエ教徒のほとんどがアルカリア政府によって拘束され、地下聖殿自体もその実態を暴かれることとなった。

「ふーん……。地下聖殿は今日から取り壊しか。まあ、壁を崩したり床を裂いたり、挙句の果てには司祭自らが天井をブチ壊したりしたしな。あれを改修出来るとは到底思えないぜ。まあ、拾えるモノは全部拾っただろうけど」

地下聖殿の裏工房で作られていた無人艇やその材料は、新型のラングアーマーやトライデントの材料になるという。ソディア島の中で解体に、琉も参加していた。元々技術者の多いこの島なので、作業自体はわずか一週間で終わりを告げた。そしてその後も、琉とロツサは引き続き海底遺跡の調査を続けていた。だが、エリアδ全域を調査したにも関わらず、これ以上の手掛かりは何も得られなかったのである。

「琉、これからどうするの？ もうエリアδには何も無いみたいだよ」

この日も作業を終え、琉とロツサは発掘品の仕分けをしていた。金目のモノはちよくちよく見つかるモノの、肝心なロツサ関連のモノは全くと言って良いほど出てこない。

「そうだな、一端ハイドロまで帰るか。ここよりか、エリアβを漁った方が何かと出てきそうだが。ひよっとすれば、既に何か掘り出されてるかもしれないし。そうすれば、わざわざ潜らなくとも見せ

てもらえば……。しかしあそこは今、メンシエ教徒が暴れ回つてると言つしな……」

そう言つた時だった。突如琉の携帯電話が鳴り始めたのである。

「おや、カズ？ どうしたんだろ……ハイサイ！」

電話に出る琉。

「ハイサイ琉？ 今話せるか？」

「どうした。金の貸し借りと宗教の勧誘ならお断りだぜ」

少しおどけてみせる琉。しかしカズの口調はいつもに増してシリ阿斯だった。

「違う。なあ、ソディアのメンシエ教の勢力のことだけどさ。……やったの、アンタだろ？」

カズの様子に気づき、琉の表情までもが厳しくなった。

「鋭いな……誰から聞いたんだ」

「ネットの掲示板に上がったのさ。『砂漠の青き英雄！』だの『トライデントを駆使して戦う若獅子』とか。とにかく、目撃証言を整理したらどう考えてもアンタしか浮かばなかったのさ。……だけじゃない。『自由へいざなう赤き瞳の聖女！』だの『白き翼の砂漠の天使』といった目撃談まであってな。……これ絶対ロツサ様だろ？」

「……ああ、その通りだ。そんなに騒がれてたのか」

琉は肯定した。と同時に驚愕していた。確かに自分は地下聖殿に潜り込み、大暴れした挙句に囚人達を解放した。ネット上とはいえ、まさかここまで大きく騒がれるとは思ってもよらなかったのである。

「……あんまり目立ちとうない。俺の事、他人に言いふらすなよ？」

「分かってる！　しかしその腕を見込んでのお願いがあるんだ！！」

カズの声は必死だった。

「何だ、言ってみろ」

「なるべくすぐに、ハイドロまで帰って来てくれないか？　もう我慢の限界なんだ！　これ以上ヤツらに……メンシエの連中に好き勝手されたくないんだよ！」

刑務所襲撃事件の後、メンシエ教徒達は再びオルガネシア中に広がり始めたのである。そして今まで以上に過激な行為に及び始めたのであった。メンシエ教の信仰を強要、警察署襲撃、ヒト族以外の種族への表立った迫害行為など、カズが話した状況はそれはそれは散々なモノであった。

「分かった、明日にはここを出よう。良いか、あと5日は我慢してくれ！　良いな！？」

「ありがてえ！　着いたら、いや近くに来たら連絡をくれ！」

そう言って、カズは電話を切った。

「ロツサ、明日はここを出るぞ。ここよりエリアβの方があるかもしれないし、何よりメンシエの連中に俺の故郷を荒らされるのはガマンならないからな」

ロツサは力強く頷いた。ロツサにとって、ハイドロは目覚めてから初めて脚を踏み入れた島である。琉と同様、この島への愛着は深かった。

「そうだ、確かアルに頼んでおいたモノがあつたはず……」

琉は携帯電話の電話帳を探ると、再び耳に当てた。

「もしもしいゝ？ あ、琉ちゃん！」

何処かのんびりした声が受話器から響いてくる。

「ハイサイ、アル！ 例のモノ、出来た？」

「もちろんだよお！ 取りにおいでえゝ」

その日の夕方、琉とロツサはアードラーに跨り、裏通りへと向かった。

「ねえ、琉。“例のアレ”って何？」

「ああ、そんなモン見りゃ分かるさ。お、着くぜ」

アードラーを玄関の前に停め、琉は早速インターホンを鳴らした。

「お、来たね。早速だけど上がってよ！」

出迎えに来たアルに言われ、琉とロツサは工房に入って行った。

「おお！ 二人とも来たね！ 見ろよ、この工房も随分キレイになっただろ？」

中でパイルバンカーの整備をしていたゲオが言った。彼の言う通り、工房内の銃弾や壊れた機械は撤去してあった。

「それで、これが頼まれてたバジユラムね」

「バジユラム？ これ、トライデントじゃないの？」

ロツサは首を傾げた。アルが琉に渡したモノ、それは琉の腰に差してあるモノとそっくりな黒い棒であった。

「バジユラム。トライデントの元になったモノだ。でも本来工具のトライデントと違い、コイツは立派な武器なんだけどね」

バジユラム。トライデントの原型となった変形武器で、遺跡時代にはすでに使われていたとされている。変形部（サーベルの刃やチェインの鎖が飛び出る部分のこと）が棒の片方しかないトライデントに対し、このバジユラムは両端に変形部があり左右対称となっている。

「一応テストはしてあるよお。後は音声データを入力するだけだねえ」

「分かった、ありがとう！ ……そうだ。明日、帰ることになった」

琉はバジラムを仕舞うと、アルとゲオに言った。

「帰る？ そっか、そっぴやもう、エリアδは全部回ったんだっ
な」

「それもあるが……今ハイドロがヤバイ」

「ヤバイ？」

アルとゲオが同時に声を上げる。

「ハイドロは俺の故郷なのは以前話したよね？ やっぱりというか、最近メンシエ教の暴れっぷりがまたひどくなつたそうだ。それで、遂に友人から助けを求められちゃった……」

琉はある程度予想はしていた。オルガネシアの刑務所が襲撃された後、ハイドロ島の警察署がメンシエ教徒によつて襲撃を受けていたのである。その後のカズの情報で、襲撃をかけたメンシエ教徒は捕まったということだったのだが、その程度でヘコ垂れるような連中でないことを琉は熟知していた。

「だからこないだ注文してきたのかあ。まあ、バジラムなら3日で作れるから良いんだけどさ。……でも、無茶はするなよあ？」

翌日。朝早くから、アルとゲオが港に来ていた。

「じゃあなあ〜！ また来てくれよあ〜！」

「今度来たなら、また一杯やろうぜ！ それまで元気でな〜！」

二人はカレッタ号が見えなくなるまで、手を振り続けていた。ロツサも後部甲板で手を振っている。

「港まで来てくれてありがとう、アル、ゲオ。今度来るときは、ハイドロの旨いモノ持って行くからな！」

琉の別れ際の挨拶。彼は必ず、再会を約束して出航する。船乗りの性なのか、はたまた今回の船出が再び戦いに身を投ずるモノだからか。

「お、ロツサ、戻って来たか。じゃあそろそろ、自動操縦に切り替えるとするかね」

目的地をハイドロ島に設定し、琉はコーヒーメーカーのスイッチを入れた。

「ねえ、琉。この間やってたその……ええーと……」

ロツサは琉に何かを伝えようとしている。しかし、言葉が出てこない。仕方なく、彼女はある動きを始めた。拳を握り、腰だめに構え、そのまま真っ直ぐに腕を伸ばす。それを見た琉はすぐに分かった。

「ああ、“空手”か。あれはね……」

説明せねばならない。この世界の空手はオルガネシアの格闘技として知られており、特に琉の出身地であるハイドロ島はその本場として知られている。主に身体訓練と健康体操、そしてハルムに対する護身術として、琉はこの術を小さいころから習ってきたのだ。

「まあ、遊び場といったら近所の道場が裏山の入り口だったしな。知らず知らずのうちに習慣になっていたんだ。自慢じゃないけど、島の中では強い方だったよ。よく裏山の岩や木を蹴って、変な技編み出して遊んだなあ……。しかしそれが今役に立ってるなんてな」

はあ、と溜息をつく琉。

「技って……飛石粉碎蹴りとか旋風螺旋蹴りとか？」

「そうそう、よう覚えてたね。……そうだ！ ロッサも一つやってみるかい？」

「うん！」

ロッサは元気良くうなずいた。一方琉にはある考えが浮かんでいたのである。

（ロッサは、俺より力はあるが戦いそのものに慣れていない。ここで少し技を教え、身のこなしを覚えてくれればこちらとしても少しは安心出来る。そして何より、本人が興味津々だしな）

早速二人は甲板に出たのであった。

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 序（後書き）

急展開を見せていた話も一段落し、久々のパロディタイトルですw
さて、現在平和なこの船で、一体何が起こるのでしょうか！？

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 破（前書き）

カレッタ号の二人に平和な日常が訪れた。琉はロツサに空手を教えてやることに。だが、この平和な時間がいかに脆いモノかということ、二人はまだ知らなかった……。

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 破

「ハアッ！ ハアッ！！」

「肩の力を抜いて……そうそうそう。うん、やっぱり覚えが良いね」

カレッタ号甲板。ロツサは普段のドレスから胴着に着替え、琉の指導を受けていた。長い髪を後ろで縛り、キリつとした目つきで拳を振るう姿はいつものイメージとは全く異なるモノであった。なお、彼女の胴着は琉のそれを元に変身能力を使ってドレスを変形させたモノである。

「ロツサ、帯の色は白だ。黒にするにはまだ早い。あと、サラシは腹だけでなく胸にも巻いといてくれ……目のやり場に困る」

……もちろん、琉のモノをそのまま再現したためにこういう間違いもあつたのだが。特に琉と同じ格好だと、胸元が極めてきわどいモノとなる。そしてサラシを巻いても、その豊満な胸が押さえ切れてるとは言い難かった。

（うーん、どうしても胸に目が……。しかしロツサ、こないだより背が縮んだか？）

琉はロツサに関して、ある疑問を抱いていた。というのも、オアシスへ向かう途中でイグピオンを捕食して以来、ロツサの背は琉と並ぶくらいに伸びていたのである。地下聖殿潜入中に彼は気付いていたが特に気にしていなかった。が、その背に比例して胸も大きく、更に髪がひざ裏まで伸びていたのである。……それもこの前日まで

は。

（やっぱり目の錯覚だったのかな……）

今のロツサは身長も胸も髪も初めて会った時のサイズに戻っている。自分なりに納得いく答えを出し、琉はこのことに関して考えるのをやめた。

「よし、基本はここまでにして、と。ロツサ、君の場合は指先を変形させるのが基本スタイルだったね？」

「ええと、これ？」

ロツサは片手を變形させて見せた。彼女の指先は長い鉤爪状となり、鋭く尖っている。この指はロツサ自身の酵素による溶解作用と相まって、恐るべき切れ味を生み出す仕掛けとなっているのだ。琉はその指を見ると言った。

「君の場合は拳で突くよりこの指で突く、即ち“貫手”をメインで使った方が良いと思うんだ。ってなワケで、ちよつと見てくれ」

ロツサの前に出て、琉は姿勢を正すと呼吸を整えた。腰だめに構えた拳をそつと開き、指をそろえて伸ばす。そのまま腕を伸ばし、琉はその指で真つ直ぐに宙を突いた。

「……こんな感じ。君の場合は正拳突き代わりにこれをメインで使うと良いかな」

「え、琉は使わないの？」

「使わないワケじゃないんだが……あいにくヒト族の指は脆い。硬

い部分にこれをやると逆にこっちが突き指して病院行きさ。さ、続けようか」

琉のマネをして、宙を突くロツサ。徐々にその動きにもキレが出来る。

「良いぞ、その調子だ！……おっと、もうこんな時間か。ロツサ、そろそろお昼にしよう。シャワー浴びておいで」

二人はそれぞれの部屋に戻り、胴着から普段着に替えるとシャワーを浴びた。琉は早々に着替えとシャワーを済ますと、一足先に食堂に向かった。

「さあて、と。今日は結構運動したしな、スタミナの付くモノが良いだろうな。とりあえずオオトカゲの缶詰と……あとは野菜か」

琉は棚から缶詰を取り出し、更に冷蔵庫を開けようとした、その時だった。

パリ……シャリ……

冷蔵庫から妙な音がする。それも何かを齧るような……そう、虫が葉っぱを齧るような音があるのである。

「ん！？……嫌な予感しかしねえ、まさかとは思うが……」

琉は近くにあるスプレーを片手に、恐る恐る冷蔵庫を開けた。そして、カレッタ号中に琉の叫び声が響いたのである。

それは殺虫スプレーというにはあまりにも大き過ぎた。大きく、分厚く、重く、そして精巧過ぎた。それはまさに拳銃だった。角に追い詰め、半ば狂気に染まった顔に自らは気付かず、琉はそのトリガーノズルに指をかけた。

ブシャアアアーッ！

拳銃型特大スプレーの先端から、今までにない量の殺虫剤が発射される。これだけの殺虫剤を浴びて生き延びられるナメクジなどいないだろう、そう思われるほどの量を琉は相手に浴びせかけた。したり顔の琉。口元がニヤリと笑みを浮かべる。しかしその眼は依然鋭く、煙が晴れるのを待って睨んでいた。死骸を確認せねば安心出来ないからである。が、次の瞬間であつた。

ビシッ！

「アガツ（痛えッ）！？」

誰が想像出来たであろうか。殺虫剤の煙を貫き、なんとあの生物が飛び出して琉の顔に突進してきたのである。思いきり殴られたような衝撃を頬に感じ、琉はその場で倒れ込んだ。

（何なんだアイツは！？ 本当にナメクジか？ まさか突然変異でも起こしたのか！？）

琉を張り倒し、ナメクジと思われる謎の生物はすぐさま食堂の扉に向かった。しかし扉は閉まっている。逃げ道などこの生物には用意されていなかった。

「パートナー・サーベル……」

サッシュベルトからパルトネールを颯爽と取り出し、サーベルの刃を展開すると、琉は遂に無言となった。堪忍袋がブチ切れた証拠である。普段のあどけない南国の少年風の顔つきが一変し、世にも恐ろしい鬼の形相と成り果てていた。流石にヤバいと思ったのか、生物の方も逃げるのをやめて琉に向かい始める。琉の眼光が生物に突き刺さり、遂に2体は対峙した！

振り下ろされる琉の刃。颯爽とかわし、再び琉に突っ込む生物の体。軟体状の体が矢の如き形を成し、琉に向かって来る。それを受け止めるサーベルの刃。しかし生物はその刀身に張り付くと、なんとジワジワと溶かし始めたではないか！ 驚いて生物を振り払う琉。

（恐ろしいヤツだ……。だったら尚更生きて帰すわけにはいかん！）

再び構成されてゆくサーベルの刀身。トライデントの変形部は、特殊な磁場で金属イオンを吸着しており、溶かされたり欠けたりしてもすぐに再生することが出来る。

「パルトヴァニッシュ……」

処刑宣告とばかりに重々しい声でコードを入れる琉。エネルギーが充填され、パルトネールの刃が光り始める。この状態なら、刃は欠けたり溶かされたりすることはない。琉はじつと生物を見据え、剣を構えた。対する生物も壁を伝い、こちらに狙いを定めている。そして次の瞬間！

ズバァッ！ ドゴォッ！

食堂内で交差する琉と生物。琉が着地した瞬間、生物は真つ二つに裂けて床に落ちた。破壊エネルギーを入れられたためか、断面が

光を放っている。

「ざまあねえな……うぐッ!？」

刃の光が収まった瞬間、琉の脇腹を焼けるような痛みが襲った。押さえた手を見ると血が滴っており、服の一部が溶かされている。

「チッ、悪あがきかよ……って何!？」

生物の方を振り向いた琉は信じられぬモノを見た。なんと相手は斬られた断面を自切し、再び体をくっつけていたのである！

「ば、馬鹿な……!？ ひいつ!！」

すぐに再生した生物に対し、溶けた部分がすぐには収まらない琉。ほとんど一方的にやられたといっても過言ではなかった。脇腹を押さえつつ、震える手で再び剣を構える琉。

ガチャ

と、そこに扉が開き、空気を読まずに入って来る者がいた。

「遅くなってごめん、ごはん出来た? ……って琉!？」

扉が開いたことに気付くなり、生物はすぐさま廊下に向かって凄まじい速さで這って行き、入って来た者——ロツサとすれ違って出て行った。それを見たロツサの表情が一変する。

「あれは……まさか!？」

「アギジャベエ（くそう）……逃がして……たまるか……」

琉は片手でサーベルを、もう片手で脇腹を押さえつつ後を追い始めた。

「ダメ、そんな体じゃムリよ！ それにあれは……」

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 破（後書き）

琉負傷！　そして謎の生物の正体は！？　そして今回、ネタが結構仕込んでありますw

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 急（前書き）

食堂内で邂逅した侵入者。ナメクジだと判断した琉は激闘の末に敗れ、ロツサが扉を開けた瞬間に相手は逃げ出してしまった。そしてそれを見たロツサは……。

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 急

「あれって……。おい、知ってるのか!？」

琉は床に崩れつつロツサに聞いた。

「間違いない、あれはわたし!」

「な、何だってー!？」

衝撃のカミングアウト。ナメクジだと思われた謎の生物の正体は、ロツサの体の一部が分離したモノだったのである。

「最近、特にイグピオンを食べてから体が急に大きくなって、重くなって邪魔になったから、今朝一部を分離して部屋に置いて来て、そしたら軽くなってスッキリして、でもあんなことになるなんて……」

つまり、琉が前々から感じていた違和感は決して目の錯覚などではなかったのである。

「待つてて! もう1度取りこんで来る!」

それだけ言うと、ロツサ自身も液化して後を追いつめた。

「おい、待て!」

床に血痕を残しつつ、琉はロツサの後を追った。壁を伝い、ガタガタと走る琉。サッシュベルトをほどいて傷口に当てて押さえつけ、

なんとか血を止めようとしていた。だが、ある程度進んだ所で琉はある重大な事実気付いたのである。

（しまった！ このまま行けばエンジンルーム、このままじゃエンジンもロッサも……！！）

稼働中のエンジンルームはあちこちに電流が走っており、ロッサが侵入すればあっという間に消滅することとなる。更にロッサの消化酵素は強力で、エンジンを溶かされたらカレッタ号は止まってしまう。琉は壁に張り付いて緊急スイッチを探し、カバーを外すと音声コードを入れた。

「エンジンルーム・シャットアウト！」

ガタン、という音が奥から響く。琉がその場に向かうと、案の定エンジンルームの障壁の前でロッサとその一部が対峙していた。

「間に会ったか！」

安堵の表情を見せる琉。一方のロッサも自身の一部を捕まえ、取り込もうとしていた。だが、思いもよらぬ結果が彼女を襲ったのである。

「うそ……。わたしが、わたしに拒否された……？」

「拒否い？ てことはまさか……」

ロッサの手から逃れた一部は、壁の隅で小さく震えている。それもまるで、怯えた小動物のように。

「ロツサ。コイツはすでに君自身ではない。君の体から生まれて、独立した意思を持った全く新しい個体。即ち、君の“子供”とも言うべき存在だ。……ん？ 子供……？」

琉は痛みをこらえつつロツサに言った。そして言った直後、琉はあることに気付いた。そう、これは即ち……。

「ロツサは“母”になれた……ってことなのか！？」

唖然としつつ、琉は言った。ロツサもイマイチ自覚が出来ない。こんな偶然に、命とは誕生するモノなのか。

「わたしが“母”に？ でも、いきなりそんなこと……」

「自覚はないかもしれない、でも君が新しい命を生み出したのは事実なんだ。そして生み出した以上、君はその子の“母”となる……はずなんだが」

ロツサはかつての自分の一部——即ち“子供”の方を向いた。

「ロツサ。何度も言うが、あれは君の子だ。それも生まれたばかりの……ってロツサ！？」

琉はすぐに気が付いた。ロツサの手は先端から赤黒く染まり、あの戦いや狩りに使う形へと変貌を遂げていたのである。それだけではない、彼女の眉間が裂け、あの第3の目が開いていたのである。

「ロツサ、一体何をする気だ！？ 相手は同族、それも自分の子供だぞ……！」

琉の脳裏に浮かんだモノ。それは、今までハルムやメンシエ教徒と対峙した時のロツサの様子であった。本来の捕食者としての狩猟本能、そして身の危機を感じた時の防衛本能。どちらを発現した時も彼女の腕は染まり、目を取り戻して以来は額が開いていたのである。

（初めて子を産んだ動物は、子供を我が子と認識出来ずに殺してしまふことがあるという。ましてやロツサからしてみれば、あの細胞片は本体と共存することを拒んだ、いわばガン細胞とでも言うべき存在……そういうことか！）

琉は考えた。ロツサは異物と化した自分の一部を殺すつもりなのだと。自分の体に馴染まなくなったこの細胞片は、彼女自身を脅かすと考えたのだと。

「ロツサ、バカな真似はよせ！ ……しまった!？」

時すでに遅し。琉が言うよりも早く、ロツサの指は我が子の体を貫いていた。

「そんな……」

愕然とする琉。さっきまで殺す気だった相手に、今は同情を覚えていた。だが、ロツサの一部には思いもよらぬ変化が起き始めたのである。

通常、ロツサの指で刺されたモノは、彼女の持つ消化酵素によって内部から溶かされてしまふ。そのため、今回も刺された細胞片はそのまま委縮してしまふかと思われた。だがどうだろう、かつてロツサの一部だったこの生命体は委縮するどころか急激に大きくなり始めたのである。

「え……？」

その場から動けぬまま、琉は声を漏らした。彼にとって、さつきから起きている事象は想定範囲外のオンパレード。脳内は既にパニック状態にあった。

そんな琉を差し置いて、ロツサの“子”は見る見るうちにヒトの姿を成し始めた。ロツサが指を抜くと、大きくなった“子”の体に色が着いてゆく。やがてただの細胞片だった“それ”は、ロツサをそのまま幼くしたような4〜5歳の女の子へと姿を変えたのである。

「ロツサ、一体何が起こったんだ？」

「取り込めなかったから、新しくあげることにした。何だか、そうしなくなったから」

なんと、ロツサは自分の子供に体の一部を分け与えたのである。

ロツサのドレスに似た赤いワンピースを着ており、ブルネットの髪は前で切りそろえた形となっている。ヒトの姿をもらったロツサの娘は、おぼつかない足取りで琉に近付いて来た。そのつばらな赤い瞳に、琉の青い目が映っている。“子”は琉に向かって、そっと手を差し出した。

「仲直り、かな？ ……さつきはゴメン」

琉はその場でしゃがんで目線を合わせ、同じように手を差し出した。が、次の瞬間である。

デュクシ！

「アツガアーツ（痛えーッ）！？」

無防備に差し出された琉の右手。それを見た“子”はその指を鋭く尖らせ、琉の手の平を貫いたのである。琉はすぐに手を引き、見ると手の平には見事な穴が空いていた。それを見たロツサ、自分の娘の背後からそつと手を伸ばすと、

デユクシ！！

「こら、ダメでしょ！」

「って、ロツサ！ 何やってんだ！？ DVにも程があるぞ！！」

何を考えたのか、ロツサは娘の後頭部に指を伸ばし、刺し貫いたのである！ 思わず痛みを忘れて叫ぶ琉。だがロツサの指が引き抜かれると、娘はハツとした様子で琉の方に向かった。そして、

「いたいことをして、ごめんなさい」

「あ、いや、その……。こっちこそゴメン」

ロツサは、娘にゲル分を与えることで直接言葉を教えたのであった。しかしそれを見慣れぬ琉にはあまりに衝撃的な光景である。

「とりあえずロツサ、それ人前でやるなよ？ まあとにかく、飯にしようぜ……つつう！？」

食堂に引き返そうとした琉。だが今までショックによって忘れていた痛みが、ホッとした瞬間に襲い掛かって来た。ガククリと崩れ

落ちる琉。

「琉！ 大丈夫！？」

「悪い、作れそうにないぜ……。そうだ、今日はロツサが作ってくれないかい？ 大丈夫、やり方なら教えるから……」

ロツサの肩を借りて食堂に向かった琉。包帯を巻きつつ、琉はロツサに包丁の使い方やフライパンでの炒め方を教えた。ロツサのモノ覚えが良いのか琉のレシピがシンプルだからなのか、料理は案外あっさりと出来上がることとなった。

「やはり親の手料理ってモノを、子供には食べさせないとな。……そう、食べさせられるうちにな……」

こうしてカレッタ号に内における事件は幕を閉じたのであった。

『航海日誌×月 日。今日はこのカレッタ号に新たな船員が加わった』

その晩、琉は航海日誌を付けていた。隣の部屋では、ロツサが我が子を抱いて眠っている。そして琉のケガだが、晩になるころには血が止まっており、時折消毒をしながら包帯を取り換えている。しかし脇腹をやられたためか、寝がえりを打つとたちまち痛みが走った。

『……紆余曲折あったが、ロツサの子は何とかコミュニケーションがとれるようになった。しかしヴァリアブルが単為生殖をする生物だったとは予想外である。これまで男のヴァリアブルを探して棺を漁っていたが、これはどうも間違いだったようだ』

片手でキーを打つため、いつもより記録に時間がかかる。それでも彼は打ち続けた。

『……問題は島に着いた後である。幸い私は両利きだ、左手でも武器を扱うことは可能だが、脇腹のダメージがどうにも気になる。やはりバジラムを頼んでおいて正解だったかもしれない』

『……さて、ロツサの娘だが、ロツサは“名前”を付けたことがない。そこで私が名付け親となることに決まった。一応ロツサの名前のパターンに則り、古代語で付けることに私は決めた』

生まれた子には、名前を付けねばならない。いつまでも“子”では正直呼称し辛いモノがある。

『……候補は3つ上がった。そこで私はそれぞれ名前の元になったモノを生まれたばかりの子に見せ、選んだモノの名前にすることにした。用意したのは一輪の花、遺跡で拾った宝石、そして夜空に輝く星である』

部屋に戻る前、琉は二人を甲板に呼び出した。そして部屋に飾ってあった花と売りモノのルビー、そして甲板から見える星空を子供に見せたのである。

『彼女が選んだのは花であった。選んで早速花を食ってたため、単純に食物だと判断したのかもしれない。実際彼女は食いしん坊だった。しかし花を選んだという事実には変わらないだろう。そこで私は花を意味する言葉からとって、この子に“フローラ”という名を付けることに決めたのであった……』

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』 急（後書き）

新キャラ登場！ そしてロツサが子持ちになってしまいました！ w
新しく誕生したフローラ、果たしてそれからどう活躍するのでしょうか？

～次回予告～

「カズ、コレを使えッ！」

「ハイドロが、沈む！？」

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 序（前書き）

（前回までのあらすじ）

アルカリアでの調査をやめ、オルガネシア領のハイドロ島に帰還することとなった琉とロツサ。その途中でロツサの体の一部が分離、トラブルを起こす。独立した意思を持ったそれはすでにロツサの体の一部ではなく、立派な別個体のヴァリアブルとなっていた。ロツサは図らずも新たな命を生み出し、“母”となっていたのである。琉によって、その個体は「フローラ」と名付けられることとなり、更にロツサに体の一部を分け与えられることで成長、少女の姿をとったのであった……。

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 序

『航海日誌×月 日。明日の朝にはハイドロ島に到着する』

アルカリアを出て、フローラが誕生して4日が経った。琉のケガは快方に向かっているとはいえ治ったとは言えず、右手はなんとか使えるまでいったモノの脇腹の表皮は再生しきってはいなかった。

『生まれてから4日で、フローラは随分と大人しくなった。舌つ足らずとはいえそこそ喋れるようになり、最初に食堂で出くわした時と比べてかなり変わったといえるだろう』

あの時、一歩間違えれば琉はフローラを殺していたか、逆に殺されていたかもしれない。ましてや成体のヴァリアブルであるロツサが本気を出せばどうなるか、琉は嫌でも知ることとなった。

『メンシエ教徒は、彼女らを悪魔と称して付け狙っている。だがそれは、本当に単なるスケープゴートとしてなのだろうか？ 親の“教育”を受けていない幼体のヴァリアブルは本能のみに従う欲望の塊であり、かなりの危険性を秘めているということが今回判明した。ヤツらがヴァリアブルを目の敵にする理由、それにはもっと深い根がありそうである』

それだけ打ち終わると、琉は布団の中に潜り込んだ。彼の脇腹は寝がえりを打っても痛くはならない程度には回復している。

（皆、待っててくれ。明日の朝には着くからな）

翌朝。操舵室には3人。舵を握る琉と、外を見るロツサとフロー

ラ。やがて琉とロッサにとって、懐かしの風景が目に入る。

「フロラ、ここがハイドロ島。琉の生まれた所だよ。……そういえば、わたしが目覚めてから初めて上がったのも、この島だったね」

「そっぴやそっぴな。……まあ、これでヤツらがいなければな」

カレッタ号がハイドロ島の港に入ってゆく。船の固定装置が港の機械と結び着き、カレッタ号は無事港に到着した。

「ハイサイ、カズ。いきなりだが着いたぜ」

着いて早速、琉は電話をかけた。が、その返事は驚くべきモノだった。

「丁度良い所に来たなおい！ ……ぜえ、ぜえ」

電話の向かうから聞こえて来るカズの声は息が上がっており、バタバタと足音まで聞こえて来る。琉は不審に思い、聞いた。

「ん、どうした。いつもはハアハア言ってるアンタが、今日はゼエゼエかい？」

「とにかく島に降りろ！ 今港に向かって逃げている……目を付けられた！」

琉が甲板に出ると、港の方に走って来る男が見えた。頭の黄色いバンダナが目立っている。その後ろに、そろそろと茶色いフード付きのローブの団体が見えた。

「分かったすぐ行く！ 待ってるよ…… ロッサー！」

ロッサを呼んだ琉。階段を展開し、素早く駆け降りると今度はパルトネールを取り出した。

「ロッサ、先に行つてヤツらの目を引きつけてくれ！ こつちもすぐに行くから！ …… チェインジ！ マシン・アードラー！！」

カレッタ号の船底にある格納庫が開き、アードラーが海上に姿を現した。そして陸上に飛び出すとそのヒレを畳み、瞬く間にバイクへと姿を変えたのである。琉はアードラーに跨ると、そのままアクセルを鳴らしてカズの方へと向かった。

「待て！ 貴様は異端者の知り合いだということは知っている、大人しく我々と同行しろ！」

「アキサミヨー（なんてこった）！！ 嫌なこった、パンナコッタ！ どうせ質問と称して拷問する気なんだろ、それくらい調査済みなんだよ！ てか琉はまだかアーツ！？」

メンシエ教徒に追われるカズ。あちこちにあるモノを利用して散々逃げ回る彼であったが、特殊な訓練どころか1日中PCに向かうオタクがドーピングしたメンシエ教徒達に体力でかなうはずがなく、徐々に差を詰められつつあった。

「この先は海だ！ もう逃げられはせん、大人しく……ゴフツ！？」

赤い影がメンシエ教徒に飛びかかり、その場から弾き飛ばした。そしてカズの前に立ちはだかるように移動すると、たちまち人の姿をとり始めた。真っ白な肌、赤みがかった黒髪、豊満かつ妖艶な体

つき。振り返ればほのかに光る真つ赤な瞳。それを見た途端、カズの顔がほころびだした。

「カズ、久しぶり」

「もしやその声は…… ロッサ様！？ 帰っていらした！ ああ ロッサ様、相変わらずお美しい……」

その後ろから空気を読まない爆音が響く。

「ようカズ、相変わらずだな！ そしてそんなにロッサが好きか」

「琉！ やつと来たか！」

琉は片眉をぴくりと上げると、今度は起き上がろうとしているメンシエ教徒の方を睨みつつ、サッシュベルトに差しているパルトネールを取り出した。同時に懷からトリガーパーツを取り出し、セツトする。ガシャン、という音と共にパルトネールの変形部が開いた。

「メンシエ教徒の諸君、お土産だぜ！ パラライザー……！」

容赦なく注がれるパラライザーの赤い閃光が、追手のメンシエ教徒達の額に突き刺さってゆく。追手だったメンシエ教徒は誰一人動かなくなってしまった。

「ロッサ、そいつらを縛って連れてくぞ。本拠地を聞き出さんとな」

メンシエ教徒達が目を覚ますと、そこは見知らぬ風景の中にいた。

「お目覚めかい？」

背後からふと声がする。声の方を向くと、そこには男がいた。まるで鬼を思わせる筋肉質な体に浅黒い肌、怒髪天を突く黒髪、狂気を秘めた青い目。忘れるはずもない、その姿はポスターや映像で見たあの男そのものであった。

「さ、彩田琉之助！ 何故こんな所に！？」

「アンタ達が俺の故郷を荒らしていると聞いてね、帰って来たワケさ」

飛びかかろうとするメンシエ教徒。しかし全員手を後ろで縛られており、動くことが出来ない。

「なあ琉、コイツらは本当にそんなこと吐くのか？」

部屋にはもう一人、黄色いバンダナを頭に巻いた眼鏡の男が入って来る。さっきまで追っていた身が、今では逆に囚われの身となっていたのであった。

「ロツサ、また頼むよ」

琉の背後から現れたのは女であった。鮮血を思わせるその瞳を見て、メンシエ教徒達は戦慄する。その女は何を隠そう、彼らが悪魔として憎み恐れて来た存在であるからである。

「こ、これが悪魔……！ おい貴様、自分が何をやってるのか、分かってるのか！？」

「決まってるだろう。今からお前達に、彼女の栄養分となってもら

う」

琉がそのセリフを言った途端にメンシエ教徒達、並びに傍らで聞いていたカズの背筋が凍りついた。

「ちょ、琉！？ 一体ロツサ様に何を……」

言いかけたカズの口を琉の手が押さえつけた。

「……しかし良いことを教えてやろう。俺はこの四人の中で、一人だけは生きて帰してやろうと思っっている。こちらとしても、同族が眼の前で食われる様というのは見たくないモノだからな」

平然と言い放つ琉。彼が言うとロツサは艶めかしく舌舐めずりをし、メンシエ教徒達を震え上がらせた。

「ただし条件がある。ここを出してほしくばお前達の本拠地を喋ってもらふ。良いな！？ ロツサ、旨そうなのを選んで良いぞ」

琉はロツサにそう言うと、カズを連れて部屋を出た。

「琉！？ アンタ、ロツサ様にヒトを食わせたのか！？」

「嘘に決まってるだろカズ。良いか、アイツらはロツサを悪魔と認識させるためにあることないこと吹きこまれている。俺は単にそれを逆手に取って利用しているだけ、あっちが勝手にビビってるんだぜ。……だからカズ、余計なこととは言うな。それに……」

琉が扉の方を顎で指した。すると、

「ふふふ……貴方も美味しそうねえ……」

「い、いやあゝッ!? や、や、やめてくれ!! あ、ああ、メンシエの神よ、どうかお助けを……」

扉からはメンシエ教徒達の悲鳴と、ロツサの声が聞こえて来た。

「……聞いて分かると思うが、ロツサは演技が非常に上手い。相手も笑える程に引かかってくるからこの手段を取っているのさ」

琉は何処か自慢気に話した。この男、中々に狡猾である。

「ロ、ロツサ様にならむしろ食べられたいかも……」

「ハア、お前は何を言っているんだ……。……ん? 待てよ……」

琉は何かを考え始めた。そしてポン、と手を叩くとカズに向かつて言った。

「良いことを思いついた。カズ、ちょっと耳を貸せ……」

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 序（後書き）

遂に帰ってきました！そして常に電話の向こうで喋っていたカズが、久々に姿を現しましたね〜w にしてもコイツ、変態だなw（お前が言うか）

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 破（前書き）

ハイドロに帰った琉を待っていたのは、メンシエ教徒に追われる旧友の姿だった。そこで琉はカズを救出し、同時にメンシエ教徒を捕えることに成功する。

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 破

琉がカズと外に出てる間、ロツサはメンシエ教徒達に“脅し”をかけていた。

「ひいつ、やだ、死ぬなんてやだ……！」

「ふふふ、本音が出ちゃってるわね。今まで食べて来た子達はもつと強情だったわよお？ でも良いわあ、もつと怯えてちょうだい……」

つつい演技に熱の入るロツサ。誰も知らない第三者から見れば、まさしく悪魔としか言いようがないだろう。だが、メンシエ教徒は思わぬ方法に出た。一人があることに気が付き、ひそひそと話始めたのである。

「あらあ、内緒話？ そんな隠しごとなんてしてないでわたしにも聞かせてよお」

それに気付いたロツサは高圧的に問い詰めた。しかし相手の反応は、ロツサが今まで見た者の誰よりも異端なモノであった。

「おい貴様、何であの男を食わないんだ？ 我々よりかはずっと旨いと思うんだが」

ロツサの顔が一瞬歪む。この男、何を考えているのだろうか。ロツサには分からなかった。

「変なこと聞いわねえ？ あの人は食べないわよお、だって拾って

くれた……」

「拾ってくれた恩があるから食わない？ おかしいぞ、悪魔だったら目覚めて早々にあの男を食らってもおかしくないはずだ。……そもそもあの男に守られてる時点で、悪魔は実はヒトを食えないんじゃないか？」

微妙に曲解されてるとはいえ、彼らの言うことはあながち間違っていないかった。ロツサはメンシエ教徒の多用するスタンガン、即ち電撃に弱い。そして例え相手がメンシエ教徒でも命を奪うことまでは琉によって止められている。ハルムを見つけた時のように攻撃することはほぼ不可能なのだ。

「ロツサ、白状するヤツはいたか？」

何とも良いタイミングで、琉とカズが扉を開けて入って来た。

「おい貴様！ こんなことしてタダで済むと思うなよ！」

「そう言えば、何で貴様は一緒にいるにも関わらず食われないんだ！？」

ここぞとばかりに噛み付くメンシエ教徒達。ロツサは目を潤ませた状態で琉に言った。

「うう、相手がいきなり強くなったよお！ しかも大したことないって言われたよお……」

「そうか。だが安心してくれ、ひそひそひそ……」

琉はロツサに何かを吹きこんだ。そしてメンシエ教徒に向かうとこう言ったのだ。

「アンタ達、ロツサをカン違いしてたみたいだな。だったら目にモノくれてやるぜ。ロツサ、オードブルだ。カズを食え」

琉がそういつてカズに目を向けると、ロツサはたちまち液化してカズに飛び掛かった。

「お、おい琉！ 何を考えてるんだ、早く彼女を止めて……」

「ふふふ、逃げちゃダメよお……」

カズは素早くロツサを振り払い、部屋から出て行った。だがロツサの追撃は止むことがなく、ロツサが廊下に出てわずか十数秒。悲鳴が上がった。

「ロ、ロツサ様どうかお許しを…… みぎやあああああ！？」

「ゆっくり、溶かしてあげる……」

声を聞き、震え上がるメンシエ教徒達。琉はそれを半分笑いをこらえつつ眺めていた。

（ロツサがすごいのは分かっていたが、カズがかなりの演技派だったとはな。こりゃホラー映画かなんかの被害者役で一儲け出来るぞ）

琉が心の中で呟いている、そんな中でも二人の演技は続いた。

「どう？ 呂律が回らなくなってきたでしょう？」

「あひいっ！？ らめえ溶けちゃうのおおッ！！」

思わずため息をつく琉。カズによる迫真の演技は、カレッタ号中に響き渡っていた。

（流石にやりすぎだろ常識的に考えて……。まあ、コイツらが本気でビビってるからアリとしようか）

やがてカズの声は徐々に小さくなってゆき、遂には聞こえなくなった。この加減の仕方、まさに役者とも言いたくなるモノであった。

「ふふふ……ごちそうさま。美味しかったわよ、カズ」

ロツサは遂にカズを食らい尽した、そうメンシェ教徒達は思いこんで戦慄した。

「狂ってる！ 貴様は友人をも悪魔にささげるのかッ！？」

「……だとすれば、ましてや敵対しているアンタ達は尚更、ねえ？」

毒々しくセリフを吐く琉。ギロリ、と彼の目が4人を一瞥した。

「わ、分かった言う！ 言うからこの私は助けてくれ！！」

「貴様！ 裏切る気か！？ だったら私が言っただけでやる！！」

揉め始めた4人。さっきまでカズを追い詰めていたチームワークは何処へやら、今度は自分が助かりたいために言い始めた。

「まさに極限状態ってヤツだな。良いだろう、早い者勝ちだぜ。今から3数えるからな、数え終わったらさっさと吐けよ!!」

ゴクリ、と唾を呑む4人。琉はメンシェ教徒を睨みつけたまま、口を開いた。

「3、2、1、ハイ!!」

「ハイドロ湾の海底だ! そこに我々の基地がある!!」

多少の時間差はあったものの、4人はそろって“ハイドロ湾内の海底”と答えた。それを聞いた琉は驚愕し、同時に強い猜疑心を抱いて更に問い質した。

「海底だど!? ふざけるなコラ、ラング装者を敵に回したアンタ達に、そんな技術があつてたまるか!!」

一方その頃廊下では、見事な演技を見せた役者二人がひそひそと話していた。

「うぷぷ! アイツらすっかり引つかかっただろうな!!」

「そうね。じゃあ作戦の続き、わたしの部屋に隠れよっか」

カズはロツサの部屋に入った。琉の部屋と比べてあまりモノを置いておらず、中はスッキリしている。そんな部屋でも、カズは有頂天だった。

「ヒヤッハー、ロツサ様の部屋だー! 何だか良い匂いがするぞー

「!!」

小声ながらも歓喜の声を上げるカズ。女性の部屋に入ったことがなく、ましてや今いるのは憧れの巨乳美女の部屋である。ムリもない。

「あれー？ おかあさん、このひとだれー？」

「あ、こらフローラ！ 出てきちゃダメじゃない!!」

部屋の隅で壁に擬態していたフローラが、カズの声に気付いてひよっこりと現れた。すぐに注意を始めるロツサ。

「え？ 今の声、誰？ …… つて、えええッ!？」

声に気付いて周りをきよるきよるカズ。するとカズの目には、憧れの女性そっくりの幼女が映り込んだではないか！ 当然のことながら、彼はびっくり仰天であった。

「ああごめん、まだ話してなかったね。この子はフローラ、わたしの子なの」

「ロツサ様の子供、つてことは……」

ロツサの言ったことが、カズの脳内で反響する。そして彼の常識の範囲内で得られる結論はただ一つ。

「琉ウーッ!! あの野郎、シャイボーイだと思いきや抜け駆けして“作り”やがったなあッ!？ あとで小1時間問い詰めてやるッ!!」

「……カズ、どうしたの？　ワケが分からないよ」

地団太を踏むカズ。それを疑問の目で見つめるロッサとフローラ。単為生殖をする彼女らには分からぬ話である。

「さて、わたしはもう1回行って来る。今度は舐められないようにしないとね！」

「……完全にアイツに毒されてる。このままじゃロッサ様が……わぁッ!？」

突如揺れ出した船。よろける3人。

「アギジャビヨー（どうなってんだ）!？　ここは仮にも湾内だ、こんなに揺れるワケが……!？」

カズとロッサは扉を開いて廊下に出た。湾内でここまで揺れるなら、海はすでに大荒れであり、一刻も早く陸に上がらねばならない。だが予想をしていなかった事態が、ロッサとカズに遅いかった！

バァーン!!

途端に響きだす銃声。カズは慌てて扉を締め直して、言った。

「やばッ!!　何でメンシエ教徒が入って来てんだ!？」

「フローラ、カズ、隠れて!　やっつけてくる!!」

ロッサが指を鳴らすとその体はたちまち液化し、扉の隙間から流

れ始めた。そして……

「ぎゃあああああ!?!」

突如上がる悲鳴。ロツサの奇襲を食らったらしい。扉が開き、ロツサが顔を出した。

「やっつけて来た! でもまだいる!!」

「分かった、オレも行こう! これでも一応空手が出来る、ロツサ様一人に任せたら男が廃るしな!!」

カズはそう言うと、ロツサに着いて出て行った。そして倒れたメシエ教徒を拾って盾に使い始める。これで銃弾は防げるはずである。

「ロツサ様に傷は付けません! この和雅が相手をしてやろう!!」

「それより早くこのことを琉に伝えないと! 先に行つて!!」

「……はい。やっぱオレは戦力外か……」

人質を抱えつつ見栄を切るカズに、冷静にツッコむロツサ。渋々承諾し、カズは琉が尋問を行っている部屋、作業室へと向かったのであつた。

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 破（後書き）

カズとフローラがばったり出くわしてしまいました。確かに、普通ならそうやって考えますねw しかし一難去ってまた一難、琉達は
この危機を脱することは出来るのでありましょうか!?

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 急（前書き）

カズを追って来たメンシエ教徒を、逆に捕えた琉とロッサ。迫真の演技ではぐらかしたカズとロッサだったが、メンシエ教徒の襲撃が始まった！

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 急

「本当だ！ 我々の基地はハイドロ湾の底にある！ 嘘など付いていない！！」

必死で自白するメンシエ教徒。琉は表情を歪めたまま、その証言を聞いている。しかし相手の手に握られた、妙な機械には気付いていなかった。

「じゃあ聞こう。海底に基地を作り、一体何をやっている？ 何も隠すんだったら他の場所があるだろうが」

「それは……」

これ以上は言えないのだろうか。メンシエ教徒達は口を閉ざし、うつむき始めた。どうやら海底に基地を作ったのは、姿を隠す以外にも目的があるらしい。

「これ以上は言えないか、じゃあ別なことを聞かせてもらうぜ。どうやって基地を作った？ ラング装者や他の種族の力を借りずに、どうやって海底に基地を作ったんだ！？」

琉にとって、これは最大の疑問であった。これらの勢力を敵に回すメンシエ教に、そんな技術などあるワケない。そう思っていたからだ。

「……別に貴様らの力など借りなくとも、海底基地くらいなら作れるさ」

「ほう？」

返って来た言葉は若干反抗的なモノであった。琉は一瞬豆鉄砲を食らったような表情をしたモノの、すぐに平静さを装った。

「なるほど、そちらはそちらで中々に優れた技術を持っていたのか……」

「当たり前だ！　いつまでも異種族の技術にしがみ付いている貴様らとは違う！　貴様自身も分かっていることだろう、ヒト族が何故大洪水の後に海を制覇し、全ての陸地を発見出来たか！　それはヒトが神に選ばれし優秀な種族だからだ！」

琉の言葉に対し、メンシエ教徒は噛み付くようにセリフを吐いた。琉はそれを黙って聞き続ける。

「弱き種族は我々に屈して大人しくしていれば良いのだ！　我々は最も優れた種族、即ちこの世界の頂点に立つべき存在。その中でも神の力を受けた我々はヒトの中でも上位に立つべき存在なのだ！」

「本音が漏れたな。要するにこの世界の Teppen に立ちたいだけなんだろ？　そしてそのために他の種族をダシに使い、ロッサ達を迫害する。そういうことなんだろう！？」

作業室の中で繰り広げられる押し問答。琉の語気が徐々に強まってく。だが琉がセリフを放った直後のことであつた！

ガタン！

「ん！？　何だ今の揺れは？」

波が起こるには強い、妙な揺れ方。湾内である港で、ここまでの大波が起こるはずがない。琉はすぐにメンシエ教徒の方を睨んだ。そして気付いたのである。

「おい、それを見せろ！」

琉は、メンシエ教徒の一人が持っているモノを見つけて取りあげた。

「追跡コイン！？　そうか、仲間を呼んだな！！」

「気付いたところで手遅れだ！　この船はハイドロ湾の底に沈む！！」

間もなく廊下から銃声上がる。このままではロツサとカズ、場合によってはフローラが危ない！

「アギジャベツ（くそツ）！」

琉はパルトネールをシューターに変形させると扉に向かって走った。

「琉、メンシエ教のヤツらが……アガッ（痛ッ）！？」

「カズ！？　大丈夫かしつかりしろ！！」

偶然にも扉の前に来ていたカズが琉にぶつかった。

「つてえー！　ハッ、それより琉、メンシエのヤツらが」

「分かってる。あん中に一人コインを持ってるヤツがいて、呼び出しやがった。行くぞ！」

琉が走ると、ロツサが自室の前でメンシエ教徒を相手取っていた。華麗でかつ素早い動きを駆使してメンシエ教徒を翻弄するロツサだが、スタンガンを使用する敵を前に防戦一方となっていた。

「パラライザー！！！」

赤い閃光がメンシエ教徒に突き刺さる。倒れ込む敵を見て、ロツサの顔に安堵の表情が浮かんだ。

「琉！ 来てくれた！！！」

「ロツサ、ヤツらを外へ！ このままじゃ船ごとやられるぞ！！！」

琉はロツサを片手でかばい、メンシエ教徒の前に立ちはだかった。

「しかしフローラは！？」

「ヤツらを、フローラから遠ざけるんだ！ ……なるほど、後部甲板から入って来たんだな」

琉はロツサに小声で伝えつつ、メンシエ教徒と対峙した。幅の狭い廊下で、一体ずつ相手にする琉。パラライザーを撃ちつつ、後部甲板の方向へと突き進んでゆく。

「琉！ 後ろ後ろ！！！」

「何イ!?」

メンシエ教徒の攻撃は予想外に早く、表の甲板からも侵入されていた。ロッサの部屋の前で、挟み打ちにされる三人。このままではパルトネールはもとより三人の体力がもたない。万事休す。しかし琉にはまだ、残された手段があった。

「カズ、コレを使えッ!」

琉は懷から棒状の道具を取り出し、カズに手渡した。

「コレは……バジユラム!? しかしこんなオレに使えるのか!?」

「良いから“バジユラム・バトルフォーム”と叫んで引き延ばせ! アンタでも使える形のヤツだから!! ……チッ!」

知恵を付けたのか、メンシエ教徒はパラライザーを食らった仲間を盾にして突き進んできた。これではいくら撃つても止められず、むしろパラライザーの受け過ぎで心臓が止まって死に至る危険性すらある。琉はトリガーパーツを渋々外し、素のパルトネールを構えて激突した。

「……分かった、やってみるよ。バジユラム・バトルフォーム!」

カズは琉に言われた通りにバジユラムを引き延ばした。するとバジユラムの両端から、光と共に金属で出来た棒が出現した。その根元には鉤状の突起がそれぞれ二本ずつ付いており、見た目は三叉の鉋のようになっていた。

「そいつを真ん中で引き離せ！　そうすりゃカズにとって、馴染みのある形になるはずだから！！」

相手のナイフをパルトネールで受け止めつつ、琉はカズに向かってアドバイスをした。早速カズはバジユラムを二つに分離すると、途端に彼の表情が変わり始めたのである。

「ふん。たかが武器を持った所で、神の力を受けてない貴様に何が出来る？」

カズをあざ笑うメンシエ教徒。しかしカズの顔は何処か余裕ともとれる表情を浮かべていた。

「へっ、言ったな？　じゃあその目でしっかり見るが良いさ！」

二本のバジユラムを回し、鉤状の部位に指をかけ、逆手で構えるカズ。途端にキレを増したその動きを見て、メンシエ教徒は警戒し始めた。

「琉、カズは戦えるの？」

「アイツはな、情報屋であると同時に“釵術”の達人でもあるんだ。ただ、何か得物がないと弱気になるだけだね……」

カズ目がけて切りつけるメンシエ教徒。迫り来る刃を、釵に変形したバジユラムの鉤が受け止める。一瞬の隙を見て、片割れのバジユラムの柄がメンシエ教徒の鳩尾を捉えた。思わずナイフを落とすメンシエ教徒。更にカズはバジユラムを逆手から順手に持ち替え、首筋を打ちつけて気絶させた。

「カズ、後ろのヤツは頼んだぜ！」

「おう、分かった！ オラオラ、やられたいヤツは前へ出る、ロツサ様には指一本触れさせねえ！！」

ここぞとばかりにバジラムを振るうカズ。単純に好戦的になったのもあるが、同時にロツサに良い所を見せたいというのが彼の戦う原動力となっていた。

一方で後部甲板への道を開けようとしていた琉は、トコロテンのように入って来るメンシエ教徒にイラ立ちと焦りを感じていた。

「ええいきりがないな、だったらこうだ！ カズ、場所変わってくれ！！」

「了解ッ！」

琉は隙を見てカズと場所を交代、カズが道を開けることとなった。琉は後ろに回るとメンシエ教徒のナイフをパルトネールで受け止め、そのまま押し返す。

「琉、ここはわたしが！」

「待てロツサ、今ここで眼を使うのはよせ！ 狭い場所でアレをやったら俺とカズまで巻き添えになる！！」

ロツサを止め、琉は相手の刃を受けつつ蹴りを入れた。吹っ飛んだ敵が後ろの連中を巻き込んで倒れてゆく。倒れた同胞を踏みつけて、メンシエ教徒は尚も突き進んできた。

「琉、外に出られるぞ！ 早く来い！！」

「よっしゃ、でかした！！ ロツサ、準備だけしといってくれ」

カズが後部甲板への出口を切り開いたのを確認すると、琉はパルトネールを引き延ばして折り曲げ、パルトブーメランを発動させてそのまま扉に向かって走った。

「よし、戻って来た。ロツサ、今だッ！！」

琉がパルトネールをキャッチし、ロツサに合図を出す。ロツサが扉の前に立ちはだかると、その眉間がグワツと開いて“眼”が出現した。そして一端額に手をかざし、払うような仕草を取るとたちまち赤い光がカレッタ号の中に照射された。

「う、うわーッ!？」

狭い船内に密集していたメンシェ教徒達はロツサの催眠眼光から逃れることが出来ず、意識を失いバタバタと倒れ込んでいった。

「残りは外の連中だな！ ロツサ、今のうちに中で倒れてる連中を船の外に出しといってくれ。起きないうちにな！」

再びトリガーパーツを取り出した琉。一方でカズは港で多数のメンシェ教徒を相手に応戦していた。目にも止まらぬ釵裁きが、迫りくる刃を受け止め、更に敵の体を打ちスえる。

「馬鹿な！ ヤツは神の恵みを受けていない上に、異端者のように装者でもないはずだぞ!？」

神の恵みを受けたはずの同胞が、よりもよって一般人にねじ伏

せられてゆく。メンシエ教徒にとって、これは悪夢以外の何モノでもなかった。

「くそッ、こうなれば……！」

先程発言したメンシエ教徒が、拳銃を取り出して狙いを定める。カズは目の前の敵を迎え打つのが精一杯で気付かない。しめた、とばかりに引き金に指を置くメンシエ教徒。しかしそれに気付いた琉の、パルトネールの先端が火を噴いた。

「うがッ！？ 馬鹿な……」

背後から迫る赤い閃光が、銃を持ったメンシエ教徒に突き刺さった。その手に持った拳銃が、空にむかつて虚しく吠える。相手が増え、混乱するメンシエ教徒に向かい、琉は一喝した。

「良く聞け！ 薬物に頼り切ってるようなヤツはな、自分で訓練したヤツに勝てるワケがねえんだよ……！」

銃声に気付いて振り向いたカズ。すぐに状況を把握すると、琉に向かってサムズアップを出しつつ言った。

「琉、良いこと言っじゃねえか！」

「照れるぜカズ。まあ良いや、久々に二人で大暴れといこうぜ……！」

琉はパルトネールからトリガーパーツを外して懐にしまうと、通常形態のパルトネールを持ち直し、見栄を切るようにして構えた。ナイフを構えて迫るメンシエ教徒。ナイフの刃をパルトネールが受け止め、弾く。武器を弾かれうるたえる敵に、琉の脚が追い打ちを

かける。吹き飛ばされた敵は周りのメンシエ教徒を巻きこみつつ倒れ込んだ。

カズは手に持ったバジユラムの柄の先端を交差させ、呼吸を整えていた。次の瞬間、カズはメンシエ教徒の眼前で跳び上がり、太陽をバックに睨みつける。カズを目追いたメンシエ教徒は太陽をモロに見てしまい、思わず目を覆った。

「必殺・十文字陽炎裂き！」

叫びと共に釵と化したバジユラムを持ち替え、目を覆う教徒達目がけて舞い降りるカズ。落下と共に振り下ろしたバジユラムが敵の額を捉え、更にもう一本のバジユラムが腹部を直撃した。崩れ落ちるメンシエ教徒に目もくれず、カズのバジユラムは次なる得物にその先端を向ける。

「数が多いな……パルトブーメラン！」

敵を一体打ち倒し、琉は一端群れから離れるとパルトネールを引き延ばしてブーメランを起動、投げつけた。回転しながら相手をなぎ倒してゆくパルトネール。それに便乗し、琉は素手のまま構える。と再びメンシエ教徒達の中に突っ込んでいった。彼の拳が、彼の手刀が、確実に相手の頭数を減らしてゆく。

「まずい、退け！！　くそッ、これだけ投入してもダメなのか！？」

流石に勝ち目がないと悟ったのか、メンシエ教徒が撤退し始めた。仲間を抱え上げ、次々に小型艇に乗り込んで去ってゆくメンシエ教徒達。追い打ちをかけようとしたカズを、琉は片手で止めた。

「今回は見逃してやろう……だがな！　神の怒りに触れたこの島は

明日の夜、大地の叫びと共に海の底に沈む！！ 覚悟しろよ……」

「何い？ ふざけたことを……」

琉が噛み付いたその瞬間、突如地面が揺れて二人はよろめきだした。

「どうなってやがる……今のはタイミングが良すぎるだろ！？ それにハイドロが、沈む！？」

カズが声を漏らす。

「最初に船が揺れたのはヤツらの小型艇がぶつかって来たからだが……今のは一体何だったんだ！？ まさかヤツら、自在に地震を起こすことが出来るとか、そういうふざけた技術を持つてるんじゃない？ るまいな！？」

琉は考えた。メンシエ教徒が海底に基地を作った理由、それはこの島に何らかの技術を用いて、脅しをかけるのが目的なのだと。しかしそれが何なのか、彼には全く予想がつかなかった。

「まあ良いや、どうせハツタだろう。この島の真下には火山帯のマグマが流れている、いまの地震ならちよくちよくじゃないか？ それにせっかくだし、カレッタでゆっくりしてってくれや」

『ハイドロよ、琉は帰って来た』 急（後書き）

旧友との再会。これは二人に何をもたらすのか。そしてこの邂逅編ですが、一二章で一端完結してまた新たに始めようと画策しております。

く次回予告く

「正気か、お前達は!？」

「なんとしても止めてみせる……!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2630u/>

Mystic Lady ~ 邂逅編 ~

2011年11月24日22時48分発行